

川内原子力発電所及び玄海原子力発電所 火山活動のモニタリング評価結果 (2018年度報告)

2019年6月14日
九州電力株式会社

目 次

1. モニタリングの概要	P3
2. モニタリング評価結果	P5
3. モニタリング確認結果	P8
① 阿蘇カルデラ	P9
② 加久藤・小林カルデラ	P25
③ 姶良カルデラ	P39
④ 阿多カルデラ	P57
⑤ 鬼界	P69
参考1. 各カルデラの基線の再検討	P81
参考2. マグマ供給率の考え方について	P85
参考3. 九州全域の地震活動	P87

*本資料で用いている図面の作成に当たっては、国土地理院長の承認を得て、数値地図50mメッシュ(標高)を使用したものである。(承認番号 平25情使、第333号)
上記地図を第三者がさらに複製又は使用する場合には、国土地理院の長の承認を得なければならない。

(中・長期的取組みについて)

1. 広域地殻変動の影響検討	P95
2. カルデラ火山周辺のひずみ場検討	P98
3. 鬼界の基線長変化における長期トレンド検討	P101
4. 始良カルデラ周辺の水準測量結果	P105
5. 当社GNSS機器による観測結果	P114
6. 地震検知能力の検討	P121
7. 基線長検知能力の検討	P124

*本資料で用いている図面の作成に当たっては、国土地理院長の承認を得て、数値地図50mメッシュ(標高)を使用したものである。(承認番号 平25情使、第333号)
上記地図を第三者がさらに複製又は使用する場合には、国土地理院の長の承認を得なければならない。

1. モニタリングの概要 [評価方法]

[I 活火山に関する公的機関の評価]

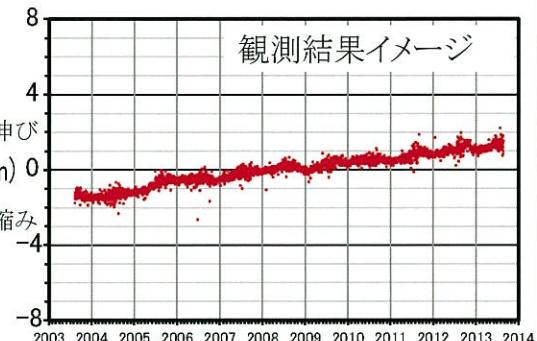
① 評価の収集

発行機関	対象	資料名(URL)
国土地理院	2019年3月度	火山周辺地域における地殻変動 (http://www.gsi.go.jp/BOUSAII/kazan_index.html)
気象庁	2019年2月27日 開催	第143回 火山噴火予知連絡会資料 (http://www.data.jma.go.jp/svd/vois/data/tokyo/STOCK/kaisetsu/CCPVE/CCPVE08.html)
	2018年(年報) 2019年3月(月報)	火山活動解説資料(九州地方) (http://www.data.jma.go.jp/svd/vois/data/tokyo/STOCK/monthly_v-act_doc/monthly_vact.php)

※ 異常が出た場合等に臨時で発表される
不定期情報も逃さず収集

地殻変動(基線長の変化)

- 地殻変動(基線長の変化)が長期的な傾向と比較して急激に変動し、継続して伸びないかどうかを確認する



[II 当社の評価]

① データの収集 ⇒ ② 分析 ⇒ ③ 評価

発行機関	対象	データ名(URL)
国土地理院	2000.1.1 ～ 2019.3.31	電子基準点データ提供サービス (http://terras.gsi.go.jp/)
気象庁	2000.1.1 ～ 2019.3.31	一元化処理震源データ(気象庁、大学、防災科学技術研究所)※ (http://www.hinet.bosai.go.jp/?LANG=ja)

※ 2000年～2017年4月までは、地震月報(カタログ編)の震源データ
(<http://www.data.jma.go.jp/svd/eqev/data/bulletin/hypo.html>)を使用

[III 総合評価]

- 活火山に関する公的機関の評価及び当社の評価等に基づき、カルデラの活動状況の変化を総合的に判断

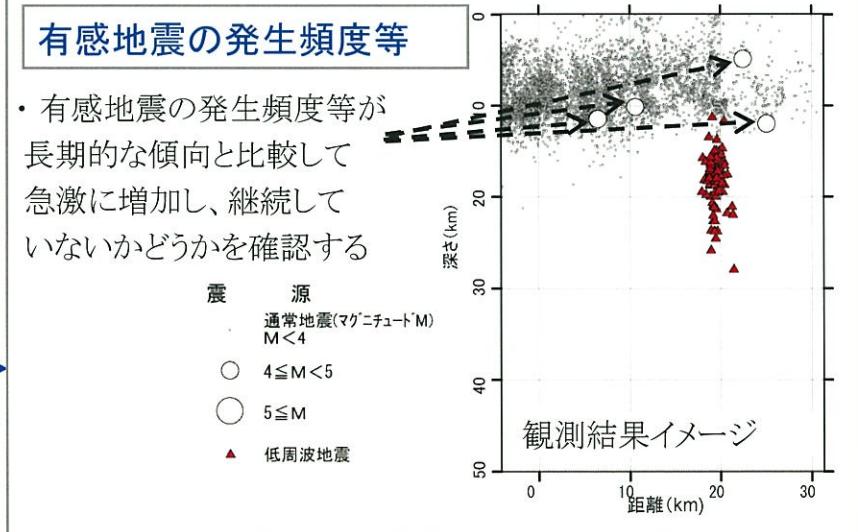
1回/月

- なお評価結果については火山の専門家に助言を頂く

1回/年

有感地震の発生頻度等

- 有感地震の発生頻度等が長期的な傾向と比較して急激に増加し、継続していないかどうかを確認する



1. モニタリングの概要 [監視レベルの移行判断基準と監視体制]

監視 レベル	判断基準	監視体制		
		マグマ供給率 ($\times 0.01\text{km}^3/\text{年}$)		
平常	1 未満 ^{※1}	<ul style="list-style-type: none"> ・GNSS連続観測による基線長変化 ・地震観測による震源分布 	変化の原因等 の検討	マグマ供給率に変化が生じた場合、火山専門家等の助言を得ながら必要に応じて監視レベルを移行
注意	1 ~ 5 未満 ^{※2}	<ul style="list-style-type: none"> ・GNSS連続観測による基線長変化 ・地震観測による震源分布 	変化の原因等 の検討	長期にわたり(1~3年程度)マグマ供給率が1を超える場合は、火山専門家等の助言を得ながら必要に応じて詳細観測を実施
警戒	5 ~ 10 未満 ^{※3}	<p style="color: red; font-weight: bold;">マグマ供給率の増加</p> <div style="border: 1px solid black; padding: 10px; background-color: yellow;"> 詳細観測の実施 (GNSSの増設等による圧力源の検討) ↓ 異常の原因等 の検討 </div>	後カルデラの活動 → 繼続監視 活動的なマグマ溜まりの特定 ↓ カルデラの活動 → ・対処準備 ・燃料体等の搬出等	
緊急	10 ~	<div style="border: 1px solid black; padding: 10px; background-color: yellow;"> 詳細観測の実施 (GNSSの増設等による圧力源の検討) </div>		・対処準備 ・燃料体等の搬出等

※1 始良カルデラ周辺のGPS観測結果等から得られる、ここ数百年の地殻変動量及びマグマ供給率

※2 Druitt et al., 2012によるマグマ供給率の最小値($0.05\text{km}^3/\text{年}$)を警戒体制に移行する基準値として適用

※3 Druitt et al., 2012によるマグマ供給率の中央値($0.10\text{km}^3/\text{年}$)を適用

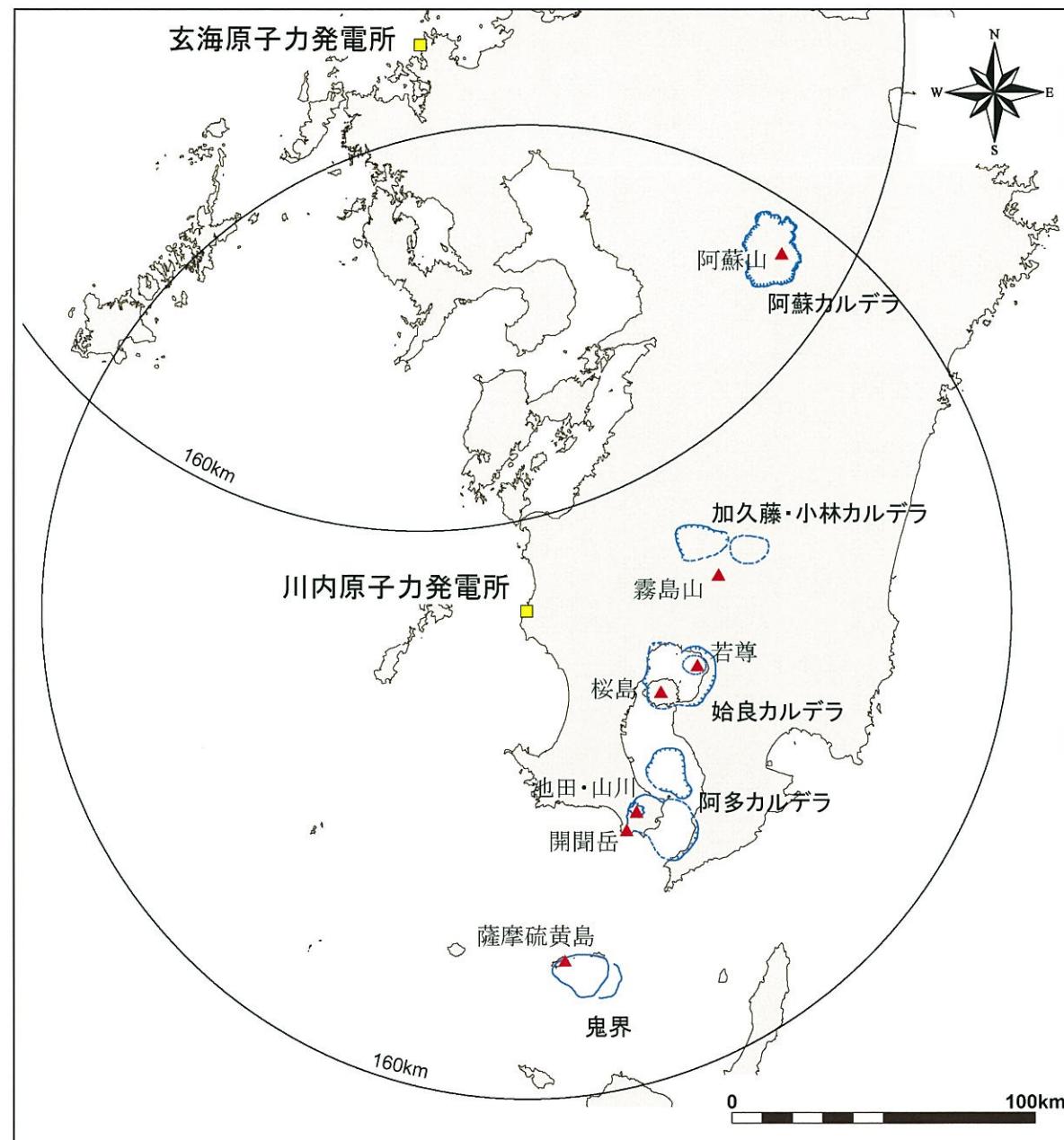
2. モニタリング評価結果

- 公的機関による発表情報、既存観測網によるデータ等を収集・分析し、2018年度の対象火山※の活動状況を確認した。
- 阿蘇カルデラでは熊本地震の影響、加久藤・小林カルデラでは新燃岳噴火の影響、阿多カルデラでは鹿児島湾で発生した地震(M5.3)の影響が認められるものの、顕著なマグマ供給率の増加を示唆する地殻変動及び地震活動の有意な変化は認められないことから、現時点での対象火山の活動状況に変化ないと評価した。

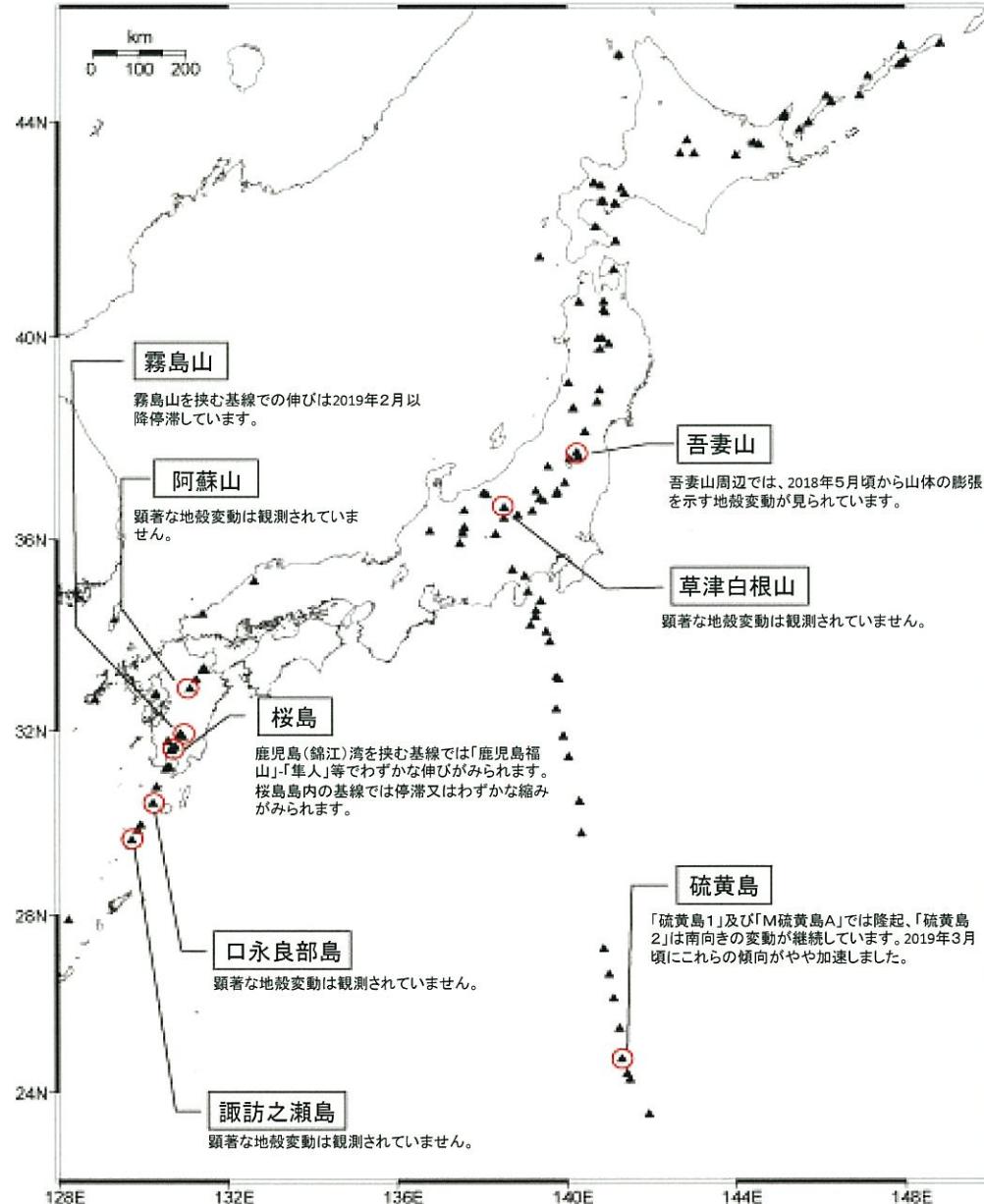
対象火山	活火山に関する公的機関の評価		当社の評価 (国土地理院GNSS観測による基線変化及び気象庁一元化処理データを使用)			総合評価 活動状況 の変化	
	気象庁噴火警戒レベル (下線の火山は対象外)	(気象庁火山噴火予知連絡会資料、 火山活動解説資料)	監視レベル	地殻変動			
				地震活動			
阿蘇カルデラ	阿蘇山 レベル1 (活火山であることに留意)	・阿蘇山では火山性地震、孤立型微動、火山ガス放出量が多い状態で経過している。 ・GNSS連続観測では、マグマだまりを挟む基線に特段の変化は認められない。	平常	・熊本地震に伴う余効変動が認められるものの、カルデラへのマグマ供給を示唆する広範囲な伸びの傾向が認められないことから、カルデラ火山の活動に起因する有意な変化はないと判断している。	・熊本地震の余震が認められるものの、過去1年の地震活動と比較して減少傾向にある。	なし	
加久藤・小林カルデラ	霧島山【新燃岳】 レベル2(火口周辺規制) 霧島山【御鉢】 レベル1 (活火山であることに留意) 霧島山【えびの高原周辺】 レベル2(火口周辺規制)	・霧島山を挟む基線での伸びは鈍化しているものの継続している。 ・広範囲の地震活動の活発化と基線の伸びは、霧島山深部のマグマだまりの蓄積が推定されることから、火山活動の推移を継続して慎重に監視することが必要である。	平常	・霧島火山に関連した変動が認められるものの、カルデラへのマグマ供給を示唆する広範囲な伸びの傾向が認められないことから、カルデラ火山の活動に起因する有意な変化はないと判断している。	・2018年12月に最大M3.4の地震が発生したものの、現在は地震前の状態に戻っている。しかしながら、この地震は加久藤カルデラ内で発生していることから、今後の地震活動に留意していく。	なし	
姶良カルデラ	桜島 レベル3 (入山規制) 若尊 活火山であることに留意	・桜島の南岳山頂火口では活発な噴火活動が継続していたが、1月中旬頃から噴火活動がやや低下している。しかし、火山ガスの放出量は概ね多い状態が続いていることなどから、今後も南岳山頂火口を中心に、噴火活動が継続すると考えられる。 ・広域のGNSS連続観測でみられている姶良カルデラの地下深部の膨張を示す基線の伸びは、わずかながら継続している。	注意	・カルデラへのマグマ供給を示唆する広範囲な伸びの傾向が認められるが、2018年度の基線長の変動率に有意な変化は認められない。 ・警戒監視の移行判断基準($0.05\text{km}^3/\text{年}$ $\approx 5\text{cm}/\text{年}$)には達していない。 ・監視レベルは、過去3年間のマグマ供給率が約 $0.01\text{km}^3/\text{年}$ であることから、注意を継続する。	・過去の地震活動と比較して有意な変化は認められない。	なし	
阿多カルデラ	開聞岳 活火山であることに留意 池田・山川 活火山であることに留意	・開聞岳および池田・山川において、火山活動の特段の変化はなく、噴火の兆候はみられない。	平常	・カルデラへのマグマ供給を示唆する広範囲な伸びの傾向が認められないことから、カルデラ火山の活動に起因する有意な変化はないと判断している。	・2017年7月の鹿児島湾の地震(M5.3)の余震が認められるものの、過去1年の地震活動と比較して減少傾向にある。	なし	
鬼界	薩摩硫黄島 レベル1 (活火山であることに留意)	・火山活動に特段の変化はなく、静穏に経過しており、噴火の兆候は認められない。 ・GNSS連続観測では、火山活動に伴う特段の変化は認められない。	平常	・カルデラへのマグマ供給を示唆する広範囲な伸びの傾向が認められないことから、カルデラ火山の活動に起因する有意な変化はないと判断している。	・過去の地震活動と比較して有意な変化は認められない。	なし	

※ 本報告における対象火山は、阿蘇カルデラ、加久藤・小林カルデラ、姶良カルデラ、阿多カルデラ及び鬼界の5つのカルデラ火山とする

【参考】モニタリング対象のカルデラ火山



【補足】 国土地理院の地殻変動図



国土地理院: 火山周辺地域の地殻変動(2019年3月)

3. モニタリング確認結果

① 阿蘇カルデラ [活火山に関する公的機関の評価概要]

○阿蘇山

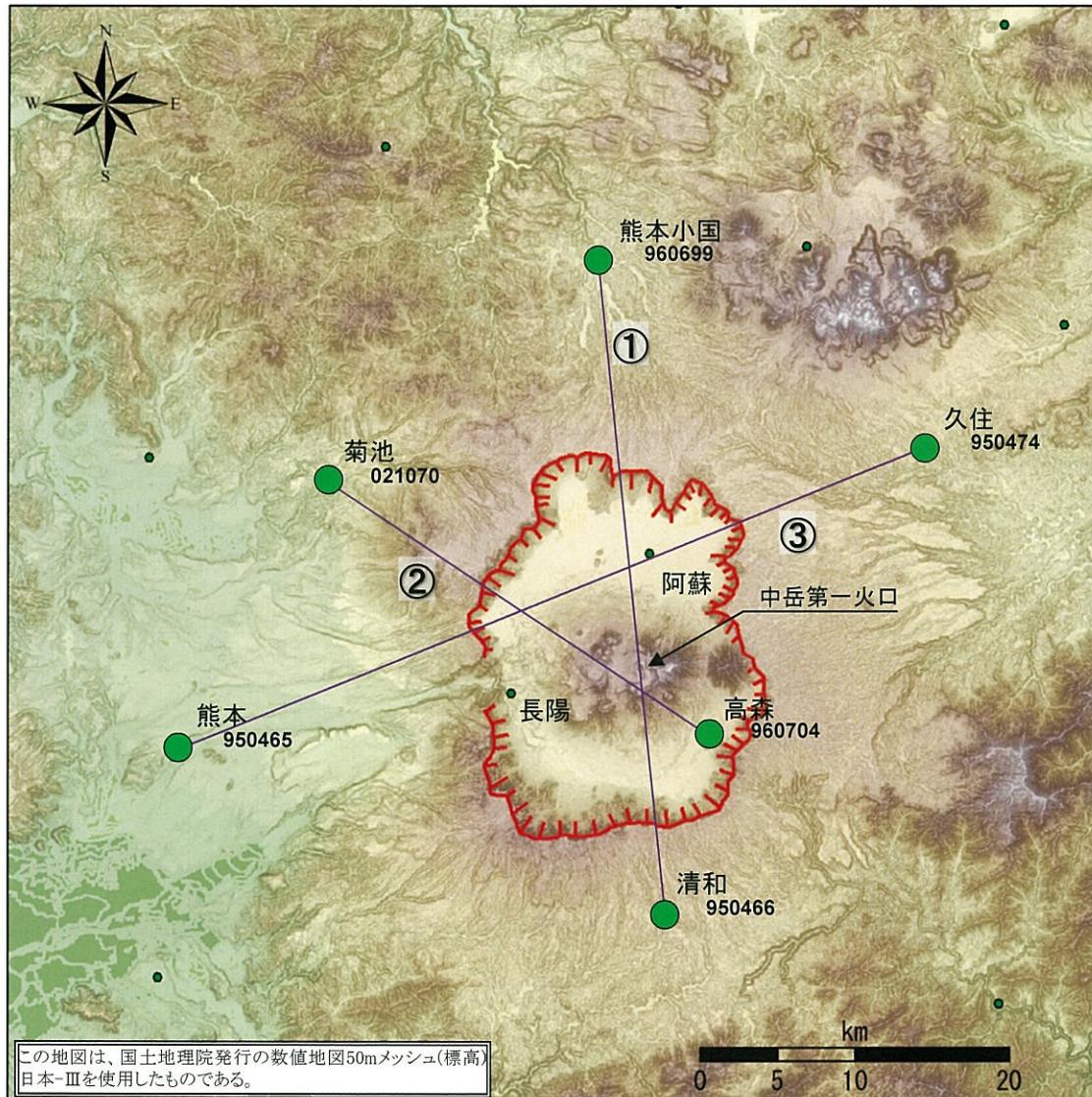
火山性地震や孤立型微動は多い状態で経過しており、中岳第一火口内の湯だまりはわずかに減少し、表面温度はやや上昇している。火山ガス(二酸化硫黄)の放出量や火山性微動の振幅に緩やかな増大傾向がみられていたが、2月に入り、更に増大している。

火山活動はやや高まった状態で経過しているが、GNSS連続観測では、マグマだまりを挟む基線に特段の変化は認められていない。

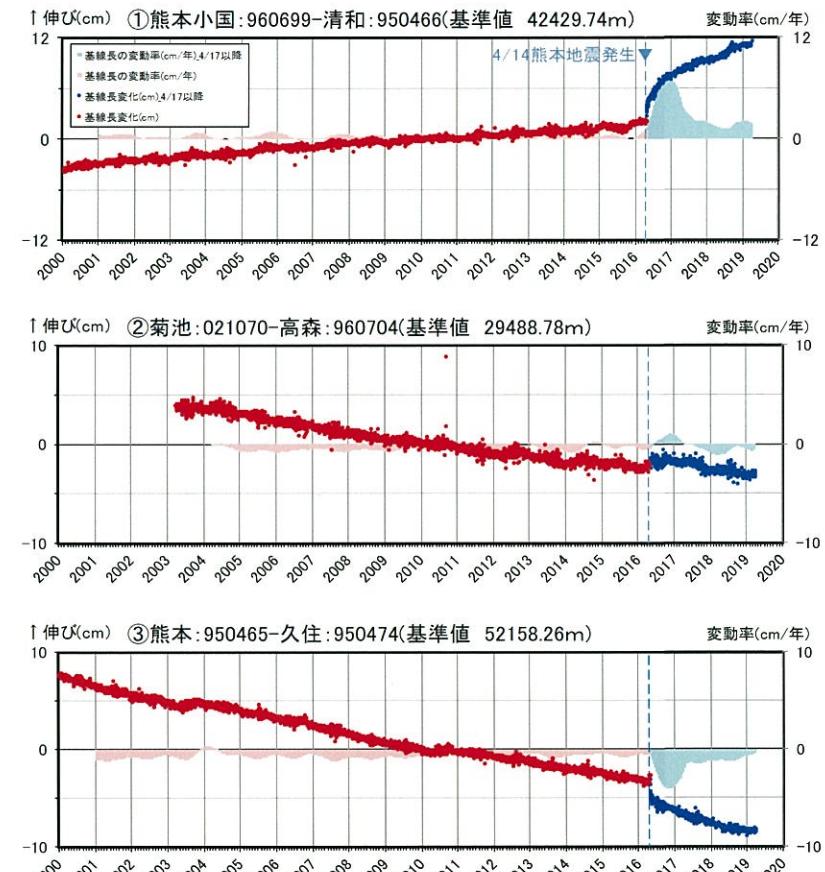
- ・火山ガス(二酸化硫黄)の放出量は、1日当たり500トン～1,800トンと増減を繰り返していたが、2月1日には2,200トンと増加しその後も概ねやや多い状態で経過している。
- ・火山性微動の振幅は概ね小さい状態で経過していたが、2月4日から5日にかけて増大し、その後も変動を伴いながら概ね $1.0 \mu m/s$ (中岳西山腹観測点)で経過している。
- ・火山性地震、孤立型微動は多い状態で経過した。
- ・中岳第一火口内の緑色の湯だまりはわずかに減少し、火口底の9割となっている。湯だまりの表面温度は79°Cで、やや上昇している。
- ・南側火口壁の一部で引き続き認められている熱異常域では、表面温度は長期的に上昇・下降を繰り返しており、600°C前後で推移した。南西側火口壁の熱異常域では、表面温度は350°C前後で推移した。また、中岳第一火口では、2018年5月3日以降、夜間に高感度の監視カメラで火映を時々観測していたが、10月2日以降は認められない。
- ・GNSS連続観測では、火口を挟む基線に緩やかな縮みの傾向がみられている。マグマだまりを挟む基線に特段の変化は認められていない。

① 阿蘇カルデラ [地殻変動: 基線長変化]

- 2018年度の基線長変化は、熊本地震に伴う余効変動が認められるものの、阿蘇カルデラへのマグマ供給を示唆する広範囲な伸びの傾向が認められることから、カルデラ火山の活動に起因する有意な変化はないと判断している。



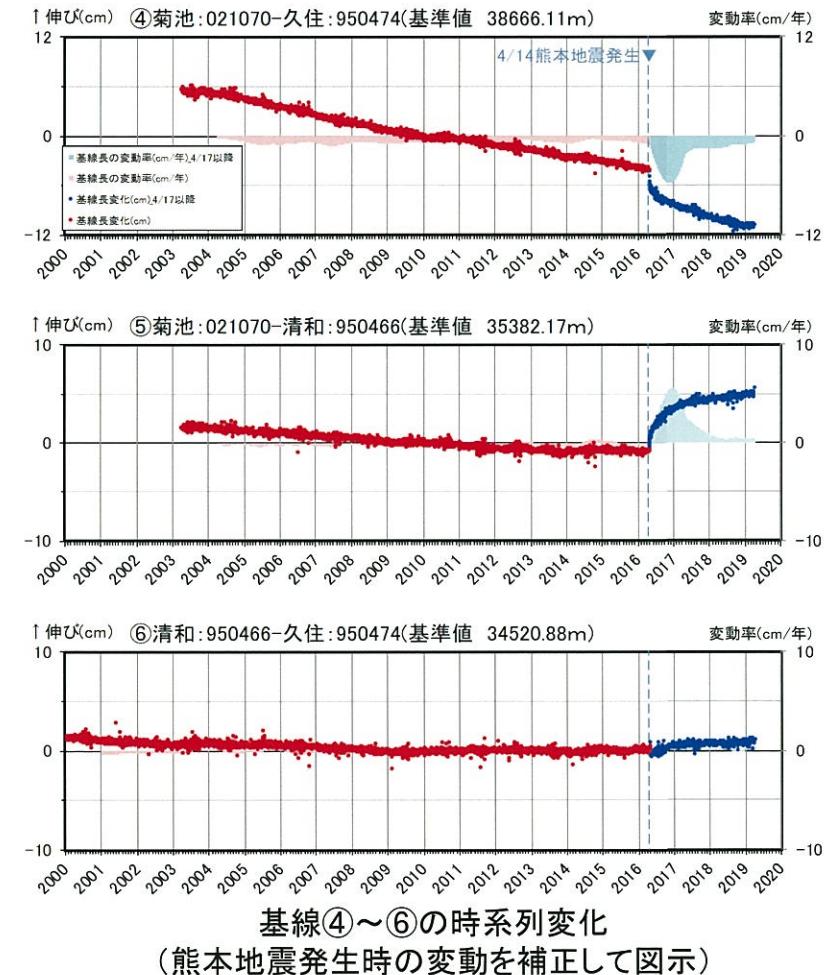
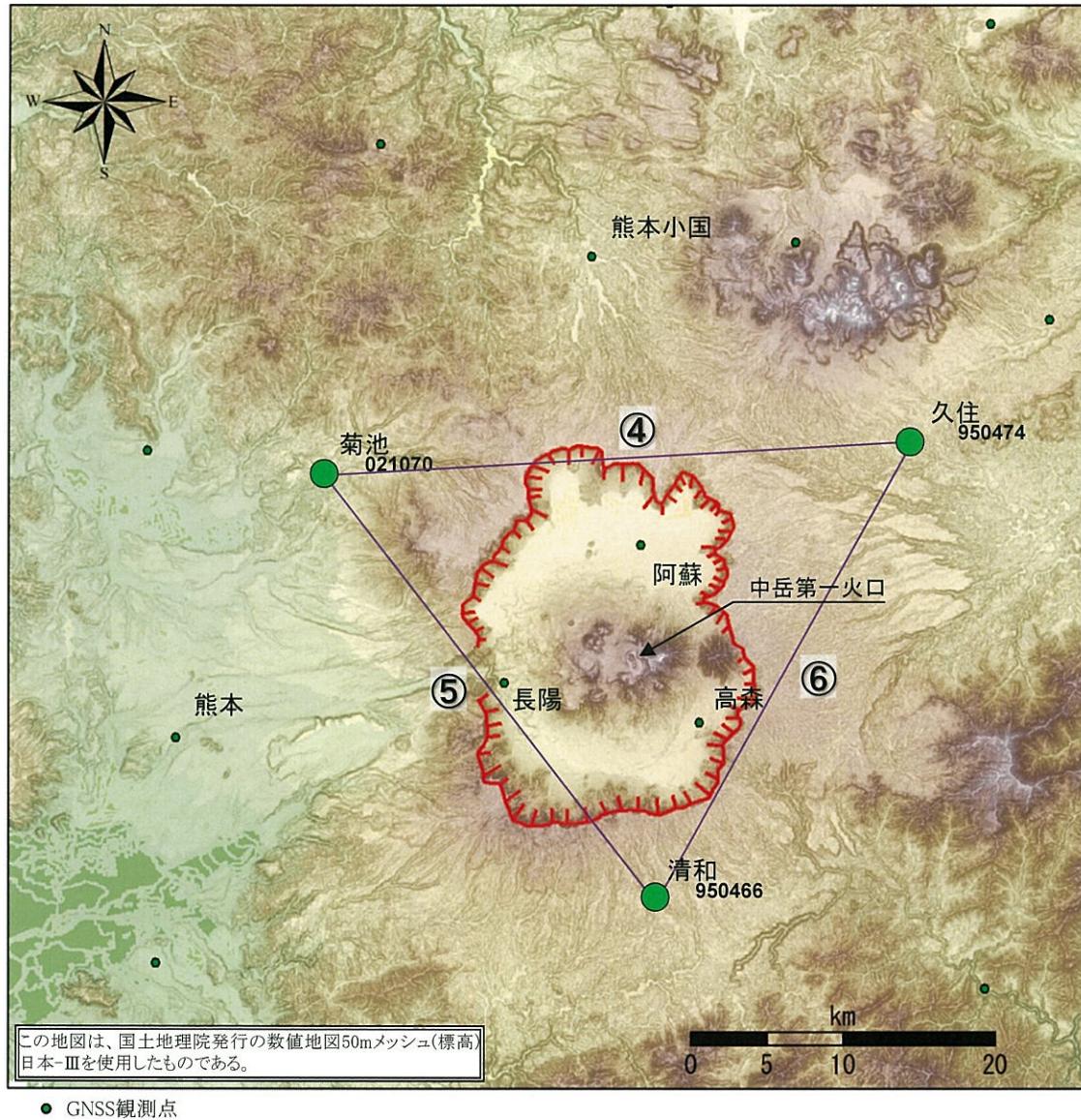
● GNSS観測点



基線①～③の時系列変化
(熊本地震発生時の変動を補正して図示)

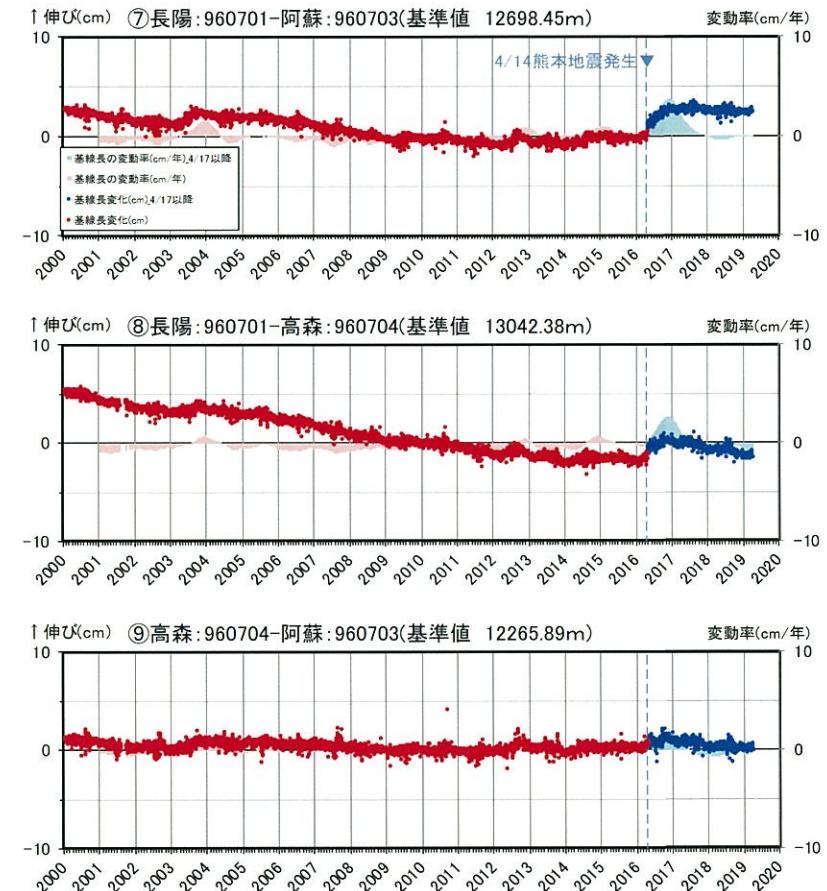
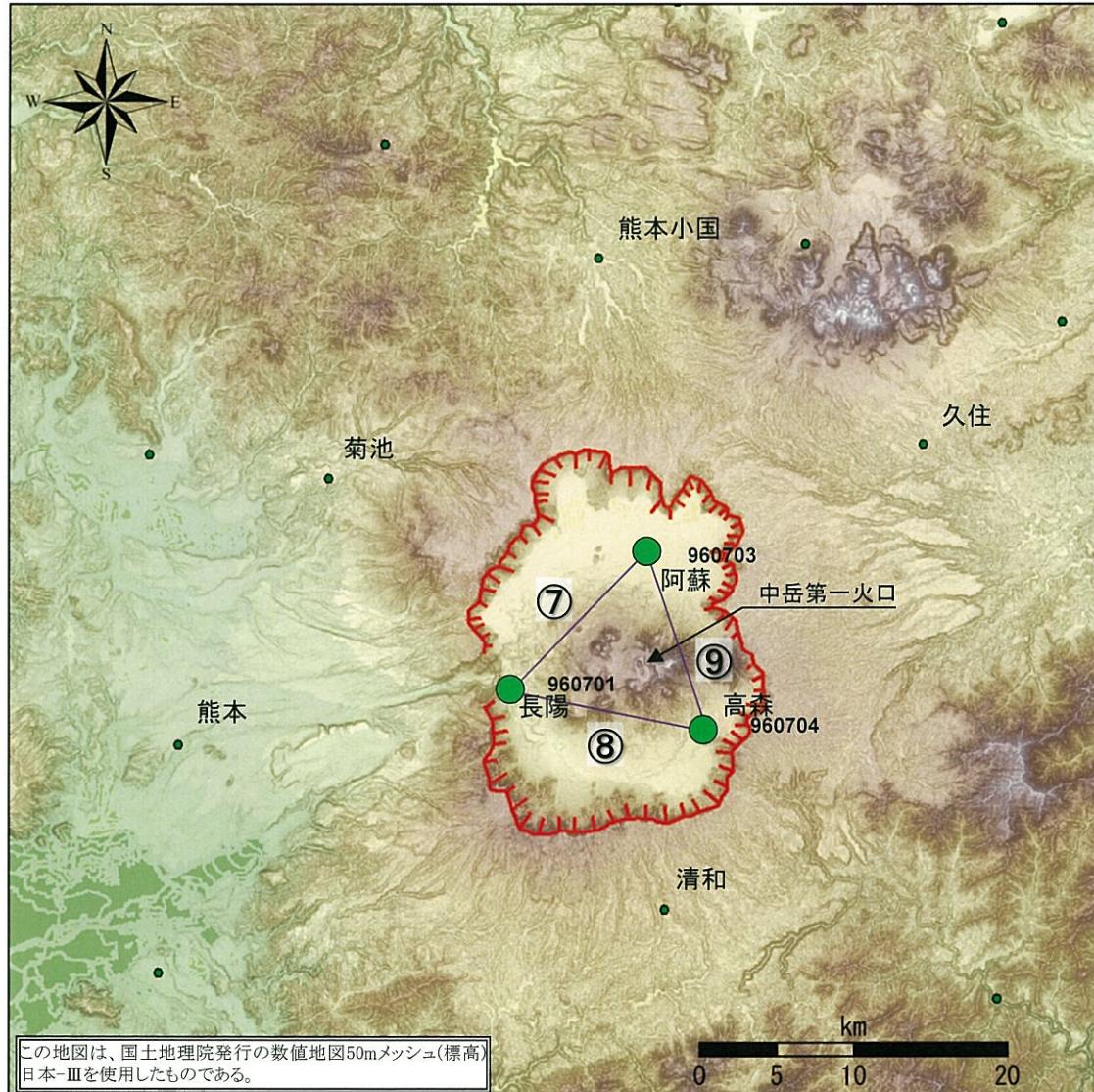
※1 2010年1月1日の基線長を基準値とし、基準値からの変化量を表示
※2 変動率は過去1年間のデータを用いて求めた近似式により算出

① 阿蘇カルデラ [地殻変動: 基線長変化]



※1 2010年1月1日の基線長を基準値とし、基準値からの変化量を表示
※2 変動率は過去1年間のデータを用いて求めた近似式により算出

① 阿蘇カルデラ [地殻変動: 基線長変化]

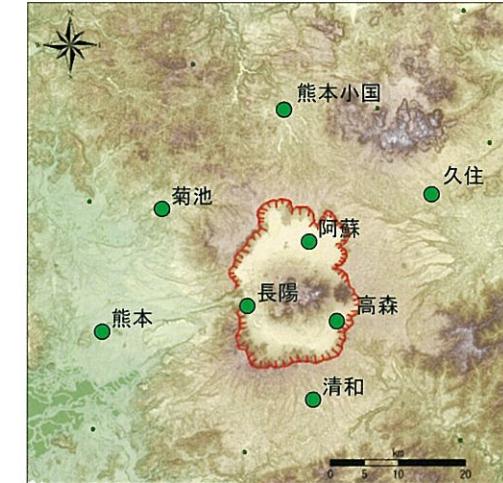
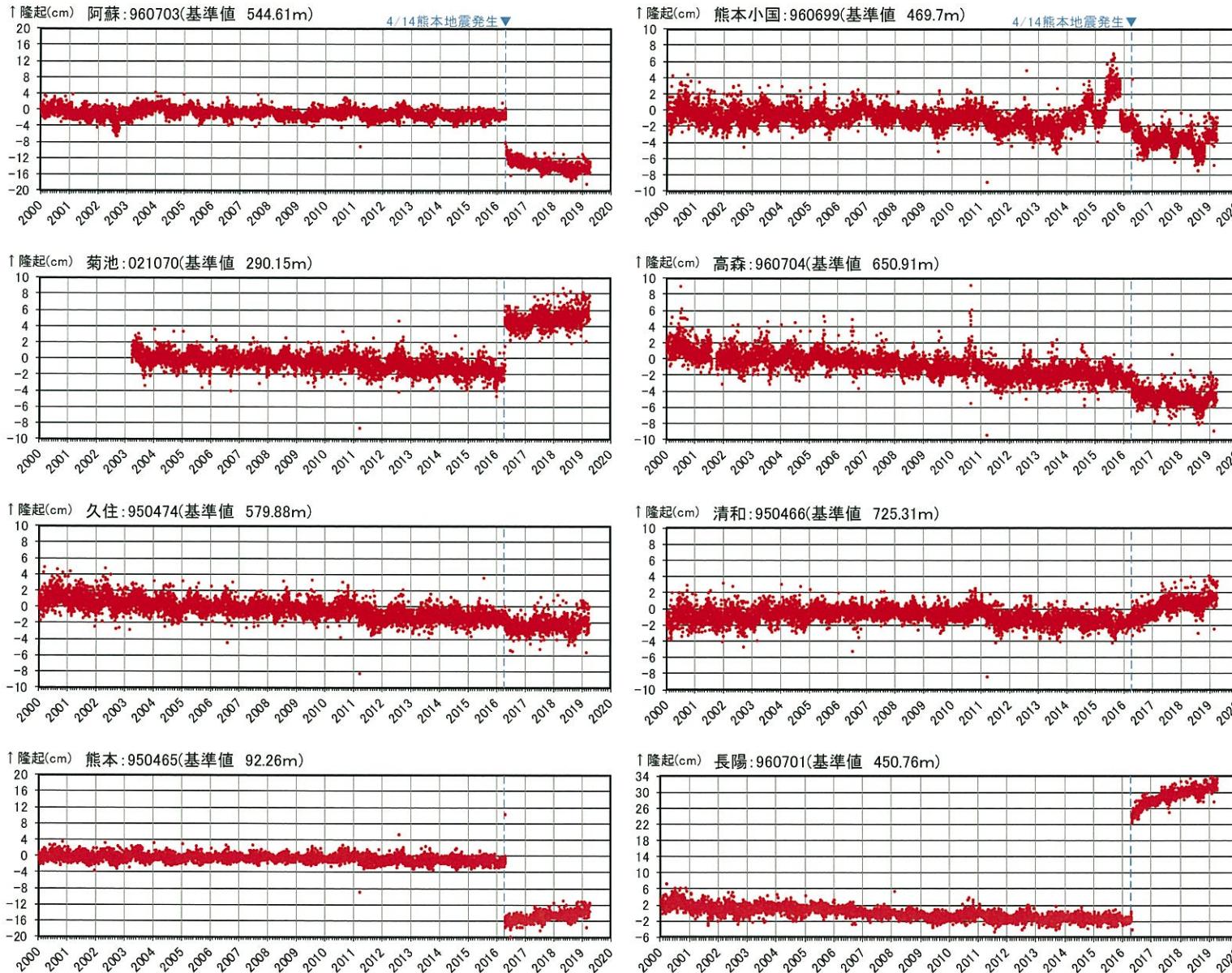


基線⑦～⑨の時系列変化
(熊本地震発生時の変動を補正して図示)

※1 2010年1月1日の基線長を基準値とし、基準値からの変化量を表示
※2 変動率は過去1年間のデータを用いて求めた近似式により算出

① 阿蘇カルデラ [地殻変動: 各観測点の鉛直変動]

- 2018年度の鉛直変動は、熊本地震に伴う余効変動が認められるものの、阿蘇カルデラへのマグマ供給を示唆する広範囲での隆起傾向は認められない。



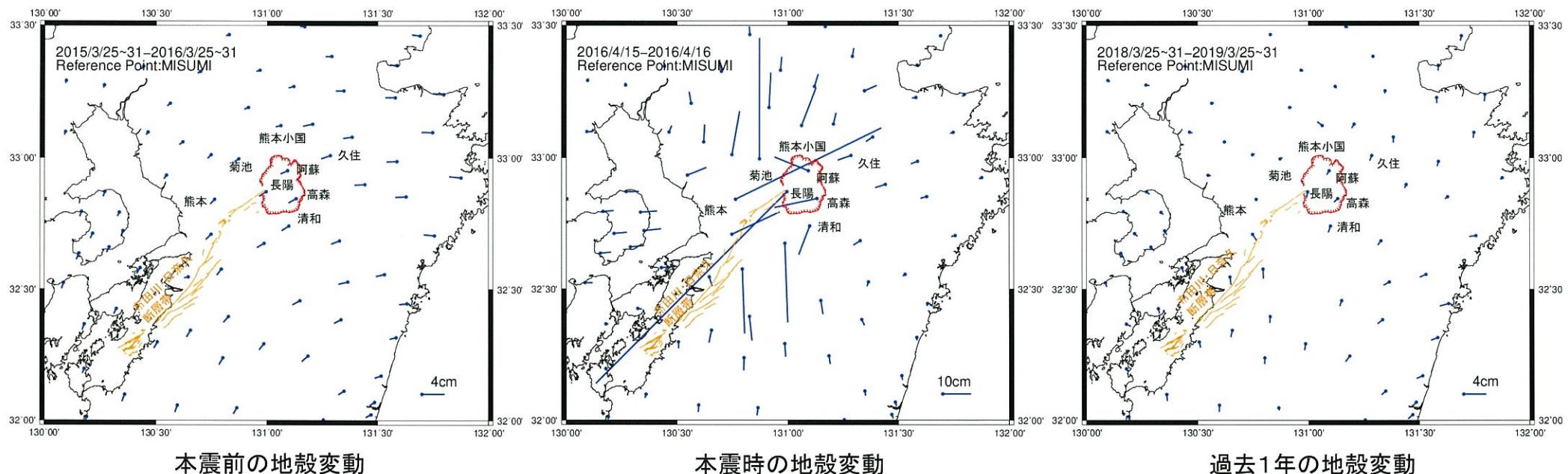
※1 熊本小国の2015年の変動は、電子基準点周辺の樹木により衛星の補足状況が悪くなつたため、大きくなっている。なお、2015年11月に樹木の伐採を実施

※2 2010年1月1日の標高を基準値とし、基準値からの変化量を表示

※3 上の地図は、国土地理院発行の数値地図 50mメッシュ(標高)日本-IIIを使用したものである

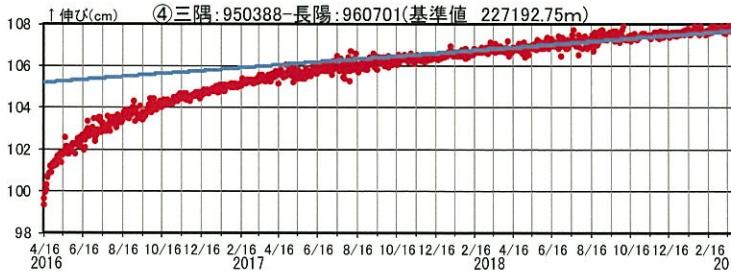
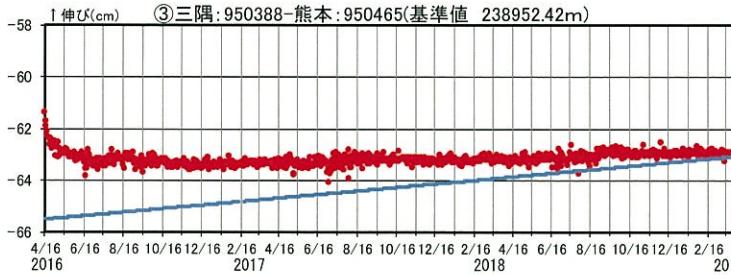
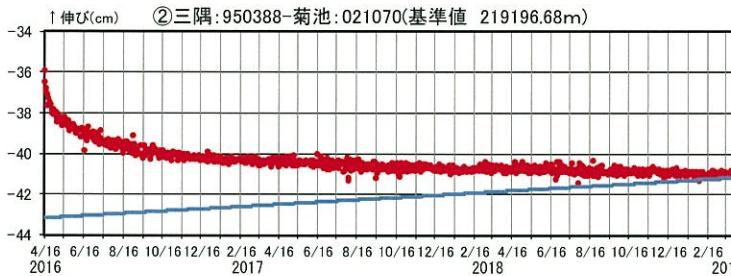
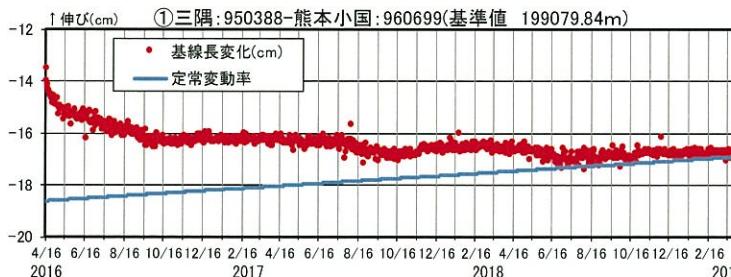
【参考】熊本地震の影響 [地殻変動: 水平変動ベクトル]

- ・熊本地震の本震発生(2016年4月16日M7.3)に伴って、布田川・日奈久断層帯沿いに右横ずれの大きな地殻変動が認められ、断層を境に、北側では北向き、南側では南向きの変動が生じている。
- ・過去1年の地殻変動は、熊本地震の影響による余効変動が小さくなっている。本震前の地殻変動と比較して地震断層北側の一部の点の変動方向は異なるが、地震前の状態に概ね戻っている。

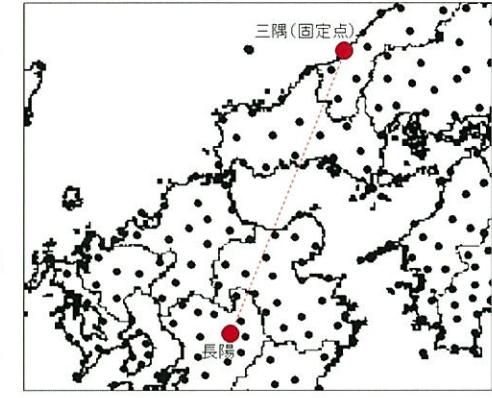
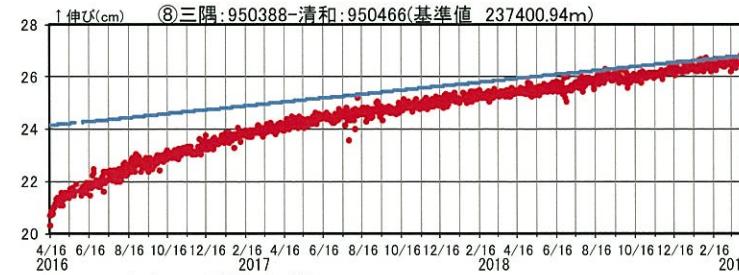
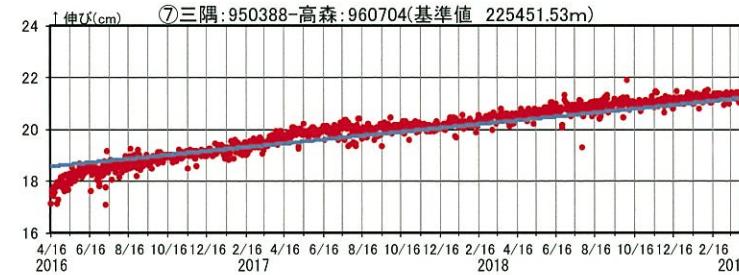
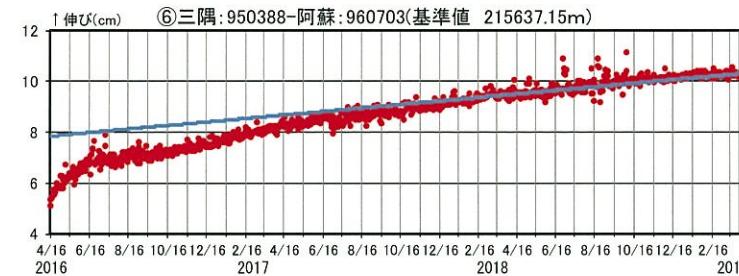
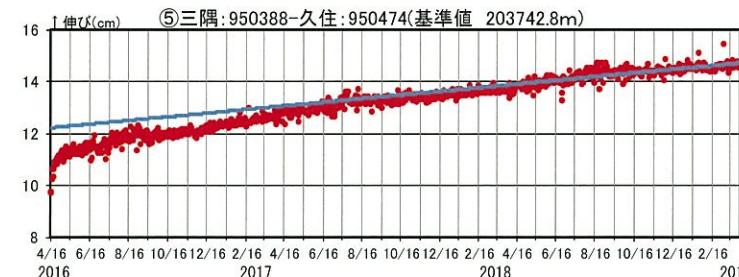


【参考】熊本地震の影響 [地殻変動: 三隅と各観測点の基線長変化]

- 基線長変化は、菊池と熊本を含む基線に熊本地震の余効変動が継続しているものの、ほとんどの基線において定常変動率と過去1年間の基線長変化が同様の傾向を示していることから、地震前の状態に概ね戻っている。



GNSS連続観測による基線長変化【2016年4月16日～2019年3月31日】



電子基準点の位置図

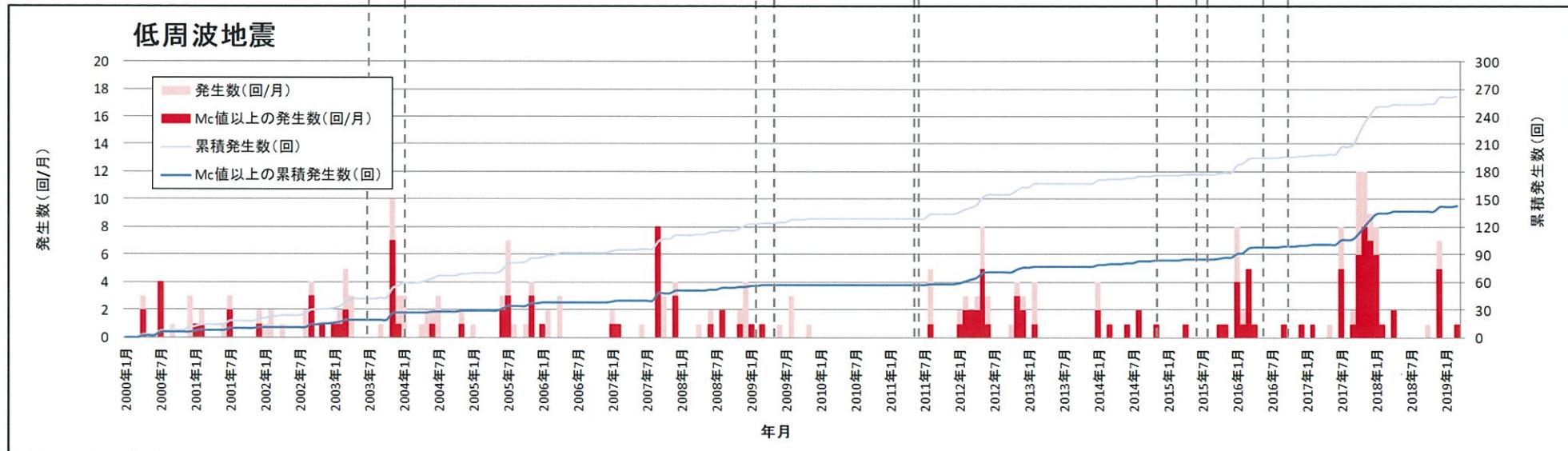
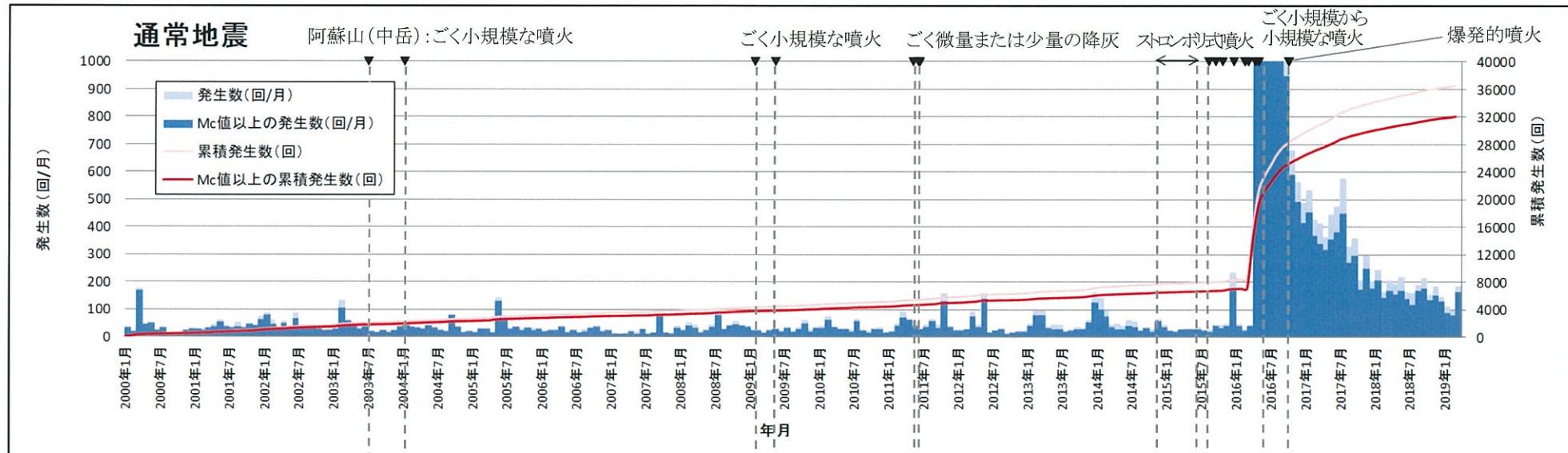
※1 固定点: 三隅(島根県)

※2 定常変動率は熊本地震前(2006年12月18日～2016年3月31日)の基線長変化のグラフの傾きを示す

余 白

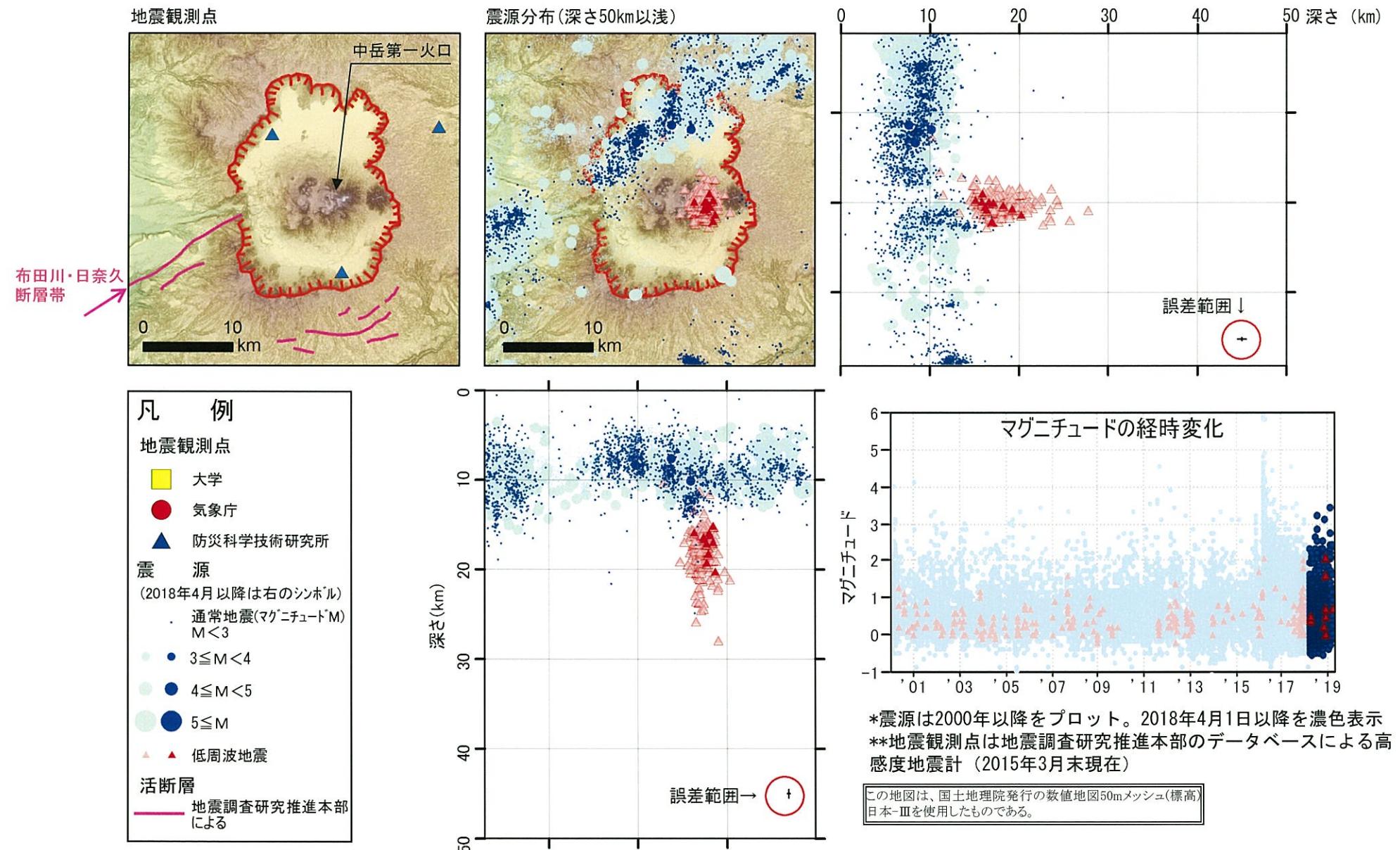
① 阿蘇カルデラ [地震活動: 2000年以降の地震発生数の推移]

- 2018年度の地震活動(発生数、位置、規模等)は、布田川・日奈久断層帯及びその延長部における熊本地震の余震が認められるものの、発生数は過去1年と比較して減少傾向にある。なお、位置と規模に有意な変化は認められない。

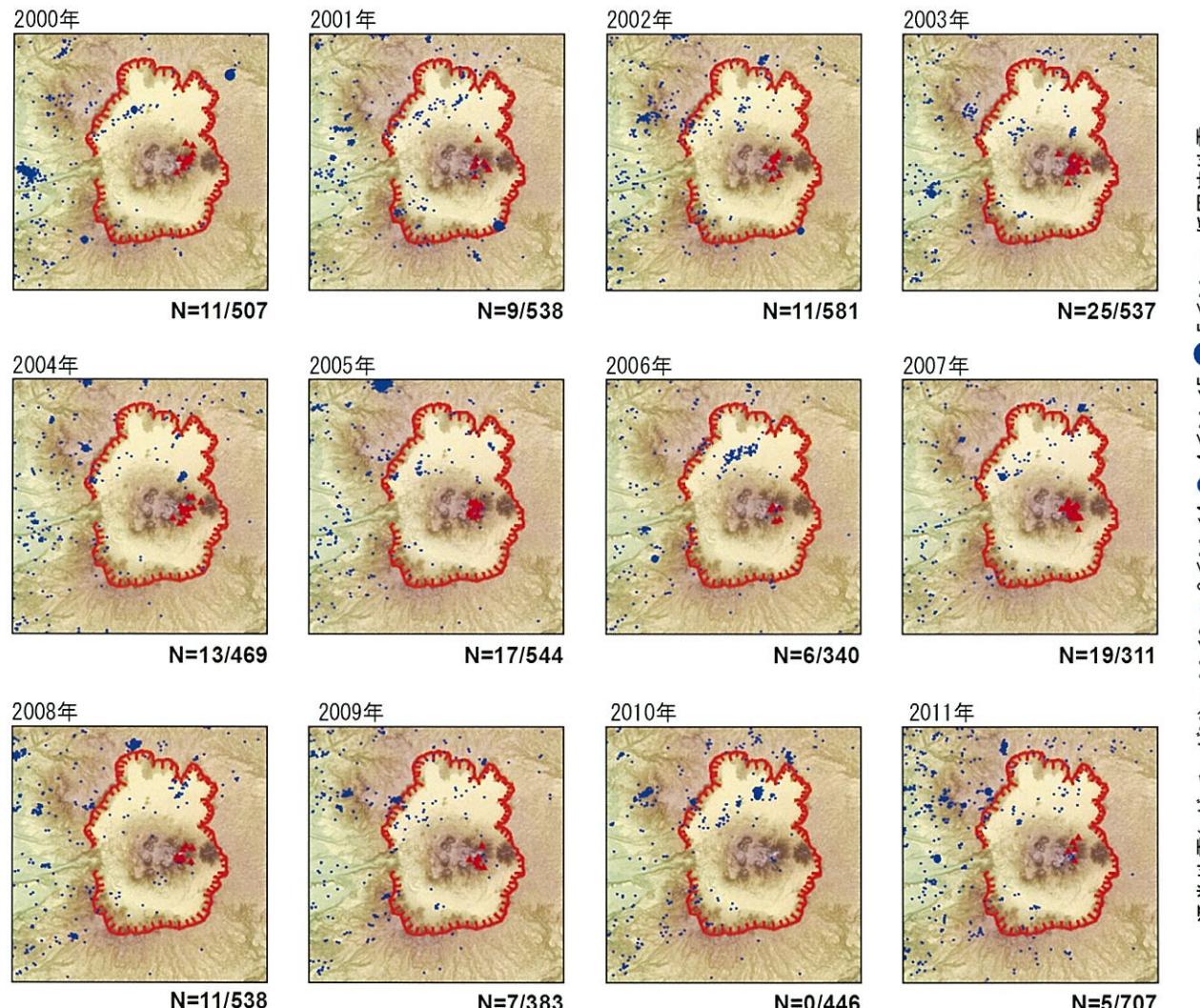


[Mc値(2000~2018年データ使用)] 通常地震 : 0.1 低周波地震 : 0.4

① 阿蘇カルデラ [地震活動: 震源分布とマグニチュードの経時変化]



① 阿蘇カルデラ [地震活動: 2000年以降の地震発生数の推移]



通常地震($M \geq 3$)・ $M < 3$ ● $3 \leq M < 4$ ● $4 \leq M < 5$ ● $5 \leq M$ ▲ 低周波地震

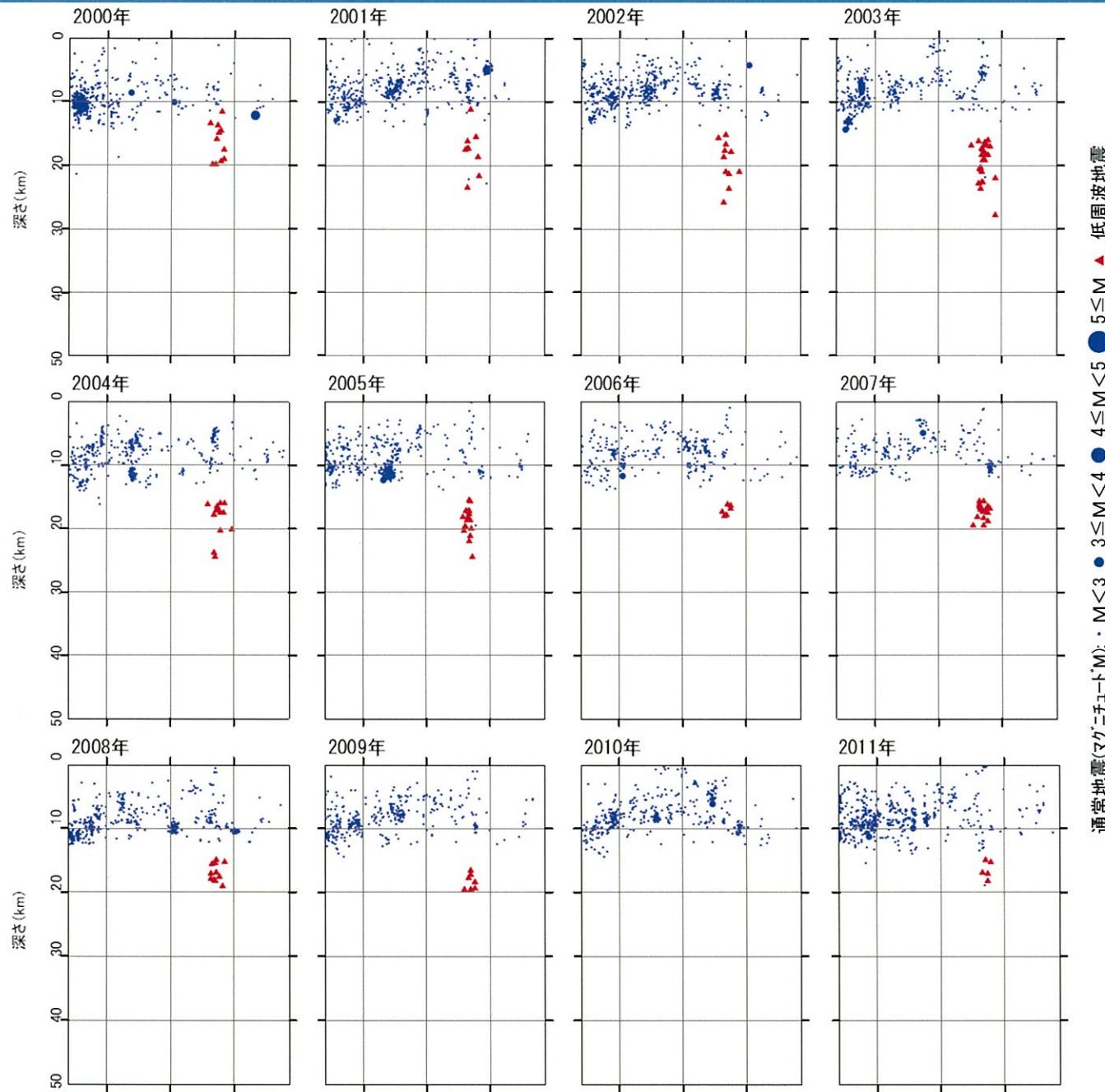
最近の主な噴火

- 2003年7月10日 ごく小規模な噴火
- 2004年1月14日 ごく小規模な噴火
- 2009年2月4日 ごく小規模な噴火
- 2009年5月19日 ごく微量の降灰
- 2011年5月15日～6月9日 ごく少量の火山灰を放出
- 2011年6月15日 ごく少量の降灰

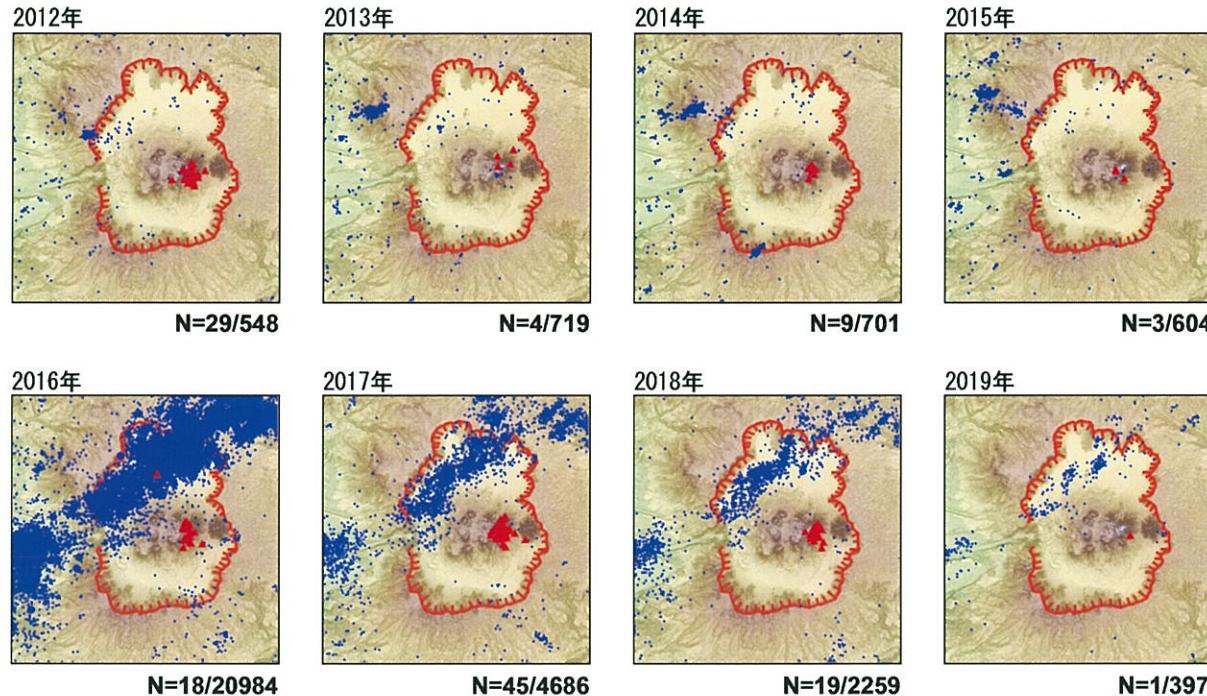
*各図の右下の数値は範囲内での該当年の(低周波地震発生数/総地震発生数)を示す。

この地図は、国土地理院発行の数値地図50mメッシュ(標高)
日本-IIIを使用したものである。

① 阿蘇カルデラ [地震活動: 2000年以降の地震発生数の推移]



① 阿蘇カルデラ [地震活動: 2000年以降の地震発生数の推移]



通常地震(マグニチュードM): N < 3 ● 3 ≤ M < 4 ● 4 ≤ M < 5 ● 5 ≤ M ▲ 低周波地震

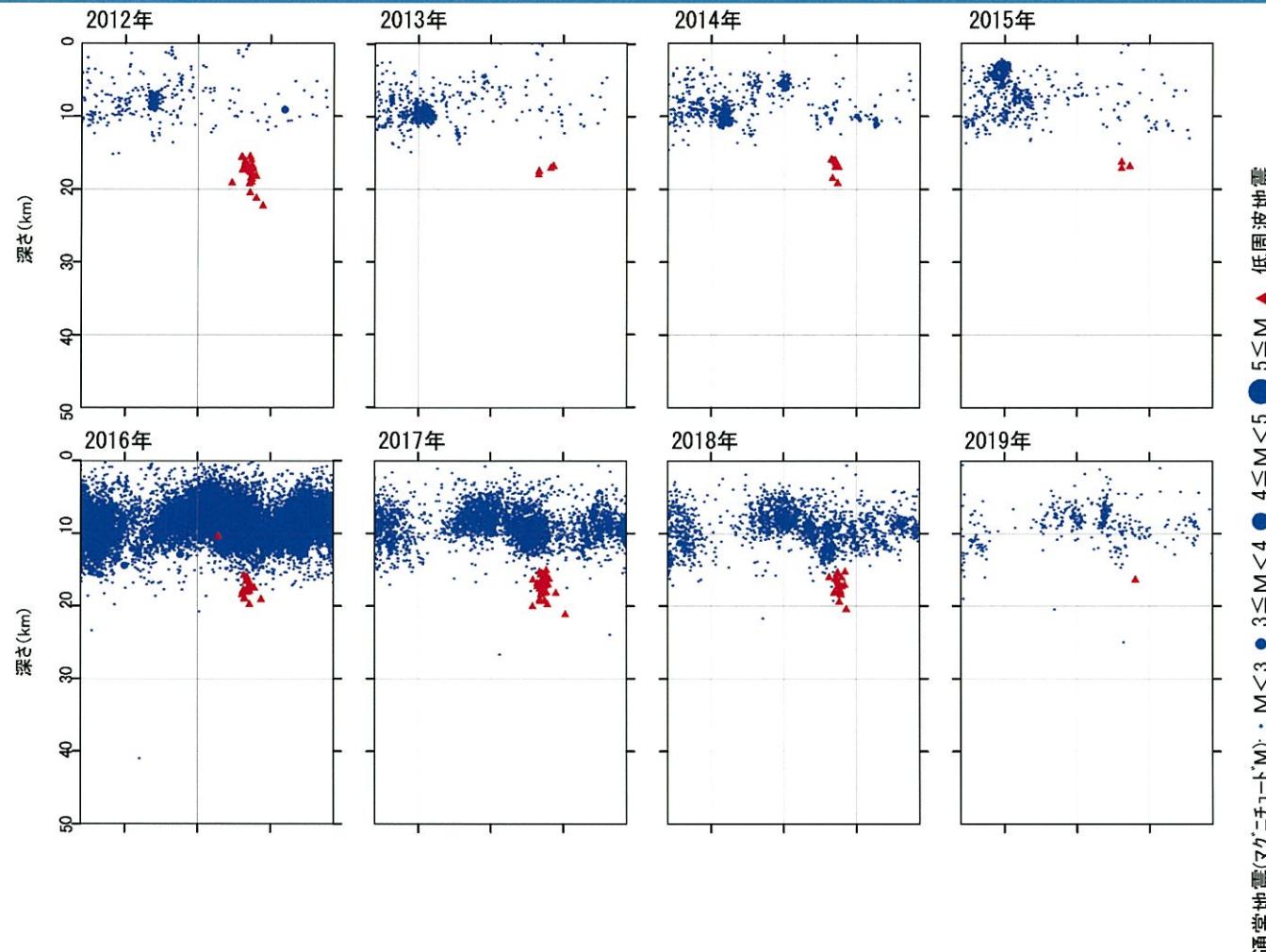
最近の主な噴火

- 2014年11月25日～5月21日 ストロンボリ式噴火
- 2015年8月8日 ごく小規模な噴火
- 2015年9月14日～10月23日 連続的な噴火
- 2015年12月25日 空振を伴う噴火
- 2016年2、3、4、5月 ごく小規模から小規模な噴火
- 2016年10月8日 爆発的噴火

*各図の右下の数値は範囲内での該当年の(低周波地震発生数/総地震発生数)を示す。
ただし、2019年は3月31日までもある。

この地図は、国土地理院発行の数値地図50mメッシュ(標高)
日本-IIIを使用したものである。

① 阿蘇カルデラ [地震活動: 2000年以降の地震発生数の推移]



通常地震(マグニチュードM): • $M < 3$ • $3 \leq M < 4$ • $4 \leq M < 5$ ● $M \geq 5$ ▲ 低周波地震

① 阿蘇カルデラ [まとめ]

【活火山に関する公的機関の評価】

- ・阿蘇山では火山性地震、孤立型微動、火山ガス放出量が多い状態で経過している。
- ・GNSS連続観測では、マグマだまりを挟む基線に特段の変化は認められていない。

【当社の評価(既存観測網によるデータ)】

- ・GNSS連続観測による基線長変化等を確認した結果、2018年度の基線長変化は、熊本地震に伴う余効変動が認められるものの、カルデラ火山の活動に起因する有意な変化は認められない。
- ・地震発生数の推移及び震源分布とマグニチュードの経時変化等を確認した結果、2018年度の地震活動(発生数、位置、規模等)は、熊本地震の余震が認められるものの、発生数は過去1年と比較して減少傾向にある。なお、位置と規模に有意な変化は認められない。

阿蘇カルデラについては、公的機関による発表情報、既存観測網によるデータ等を収集・分析した結果、2018年度は、顕著なマグマ供給率の増加を示唆する地殻変動及び地震活動の有意な変化が認められないことから、活動状況に変化はないと評価した。

余 白

② 加久藤・小林カルデラ [活火山に関する公的機関の評価概要]

○霧島山

広域のGNSS連続観測では、2018年3月の新燃岳の噴火以降、霧島山を挟む基線での伸びは鈍化しているものの継続している。2018年4月以降、硫黄山の周辺部、大幡山、獅子戸岳、韓国岳の周辺などでも地震活動が認められている。

広範囲の地震活動の活発化とGNSS基線の伸長は、霧島山深部のマグマだまりの蓄積を反映していると推定されることから、火山活動の推移を引き続き慎重に監視する必要がある。

【新燃岳】

- ・新燃岳では2018年6月28日以降、噴火は観測されていない。
- ・新燃岳火口直下を震源とする火山性地震は2018年11月中旬頃から少なくなっていたが、2019年2月25日から地震回数が増加し、火山活動がやや高まった状態となっている。
- ・火山ガス(二酸化硫黄)の放出量も、6月以降、概ね少ない状態で推移している。
- ・GNSS連続観測では、2017年7月頃から霧島山を挟む基線での伸びが継続していたが、3月6日から7日にかけて急激な収縮が観測された。3月中旬以降、再び伸びに転じ、霧島山の深い場所でのマグマの蓄積を示すと考えられる基線の伸びは鈍化しているものの継続している。

【御鉢】

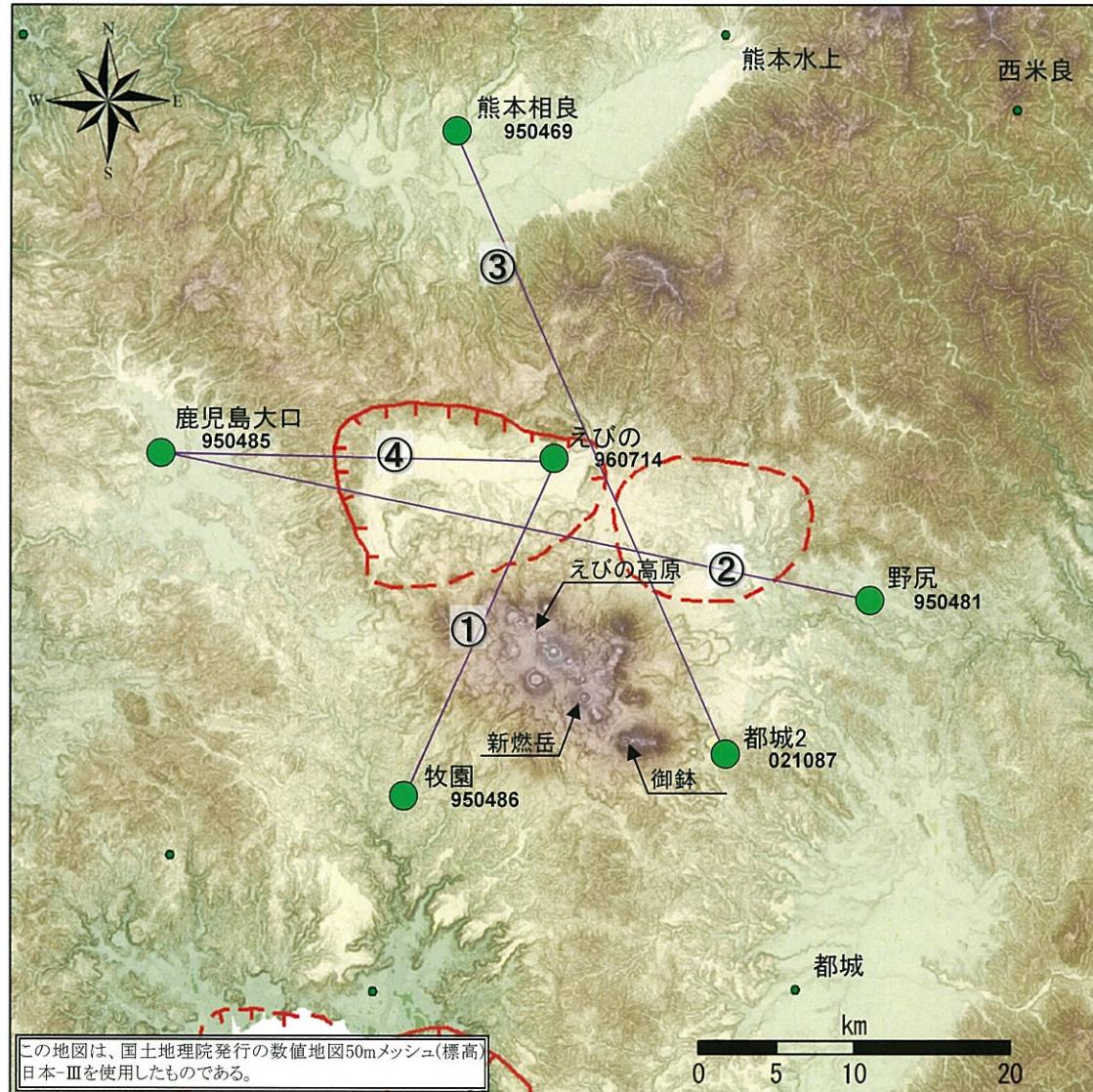
- ・御鉢の南西側が振動源と推定される火山性地震が、2月9日から16日にかけて一時的に増加した。また、継続時間の短い火山性微動も2回発生した。その後、火山性地震は少ない状態で経過し、火山性微動は2月10日以降、観測されていない。
- ・地殻変動観測では、火山活動によると考えられる特段の変化は認められなかった。
- ・噴火の兆候は認められないが、霧島山全体の火山活動が活発であることから、火口内で噴気や火山灰、火山ガス等の規模の小さな噴出現象が突発的に発生する可能性がある。

【えびの高原(硫黄山)周辺】

- ・硫黄山では、2018年4月27日以降、噴火は発生していない。2018年5月下旬以降、噴気・熱泥噴出活動は弱まった状態が続いていたが、9月からやや活発化している。
- ・硫黄山付近では、ごく微小な地震を含む火山性地震は概ねやや多い状態で経過した。また、浅い所を震源とする低周波地震も引き続き発生している。
- ・硫黄山近傍のGNSS基線や精密水準測量結果では、2018年4月19日の噴火に伴い山体の収縮を示す変動がみられたが、6月上旬から再び伸びの傾向が継続している。
- ・硫黄山では、火山活動が高まった状態が継続しており、ごく小規模な噴火の可能性がある。

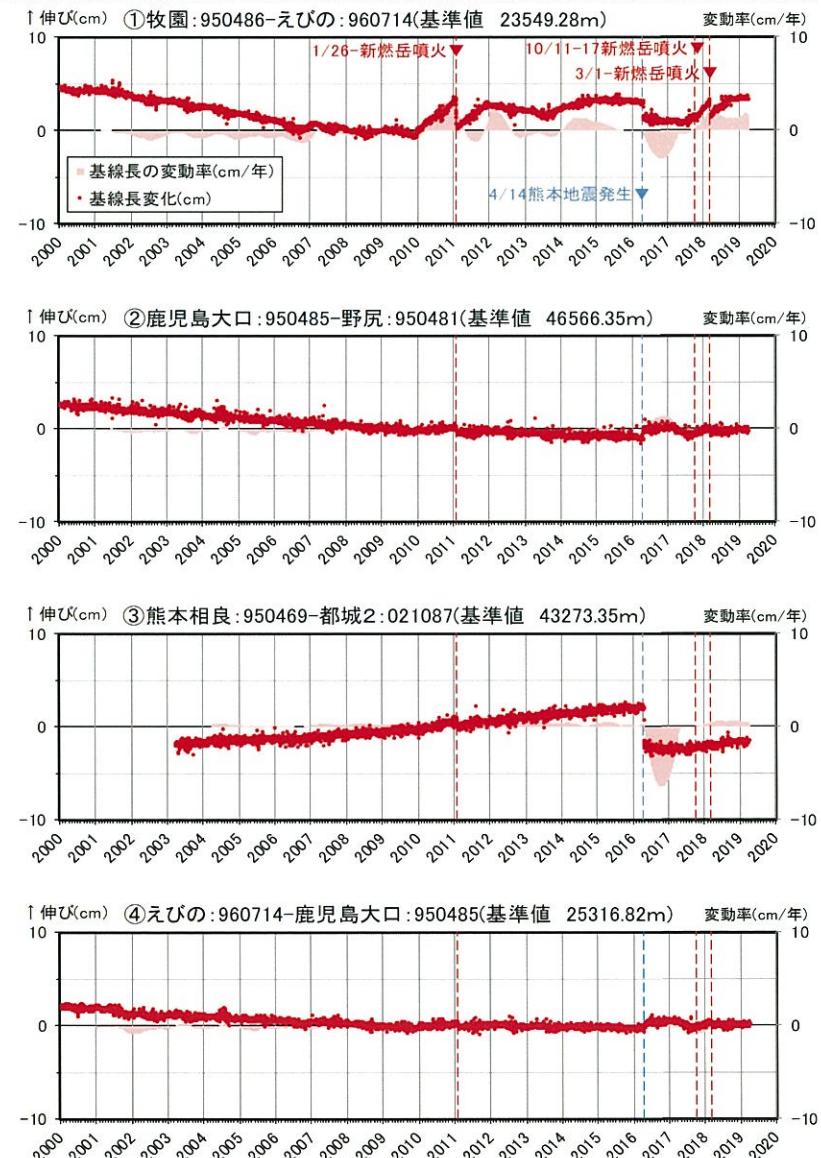
② 加久藤・小林カルデラ [地殻変動: 基線長変化]

- 2018年度の基線長変化は、霧島山の活動に関連した変動が認められるものの、加久藤・小林カルデラへのマグマ供給を示唆する広範囲な伸びの傾向が認められることから、カルデラ火山の活動に起因する有意な変化はないと判断している。



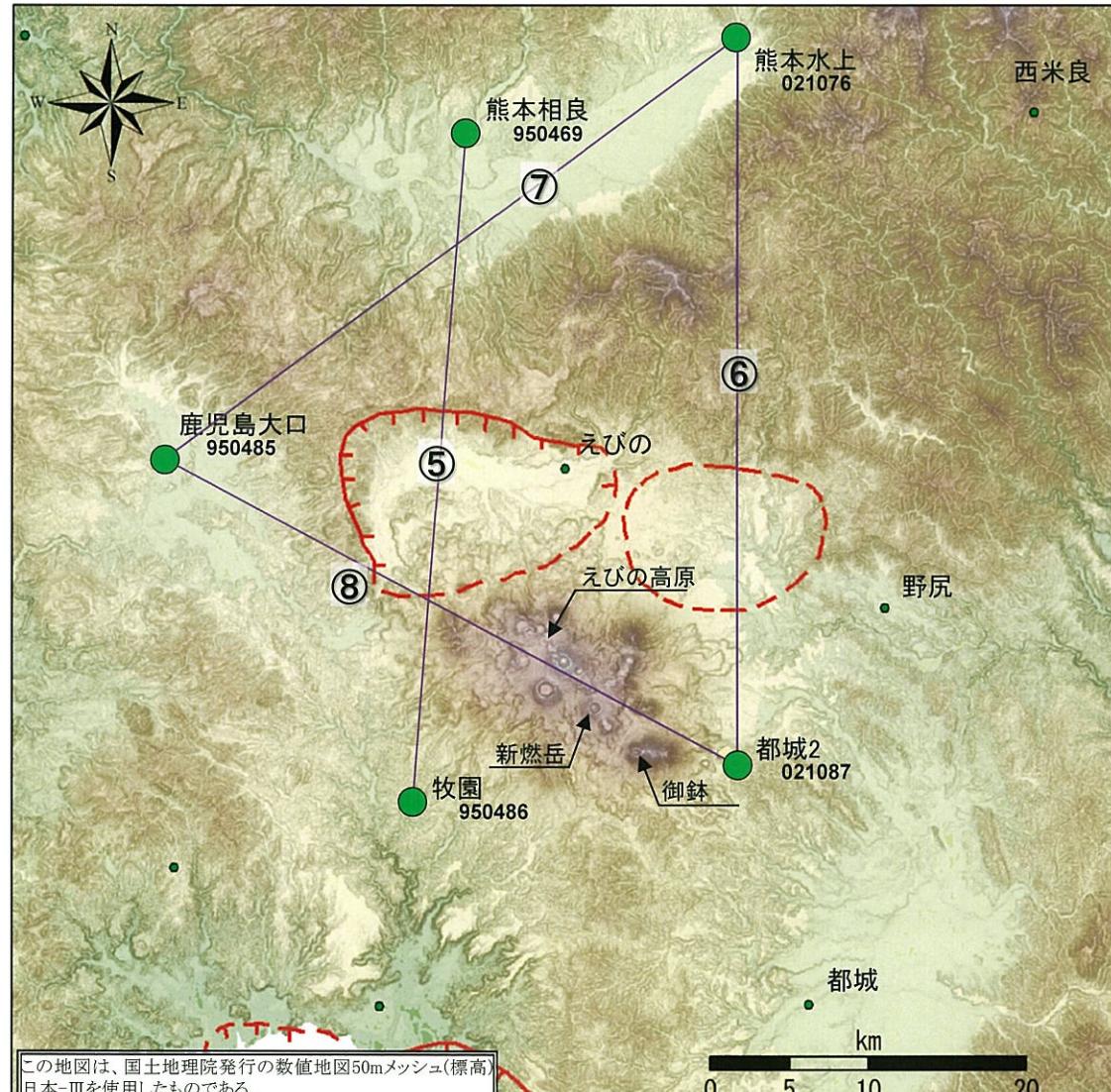
※1 2010年1月1日の基線長を基準値とし、基準値からの変化量を表示

※2 変動率は過去1年間のデータを用いて求めた近似式により算出

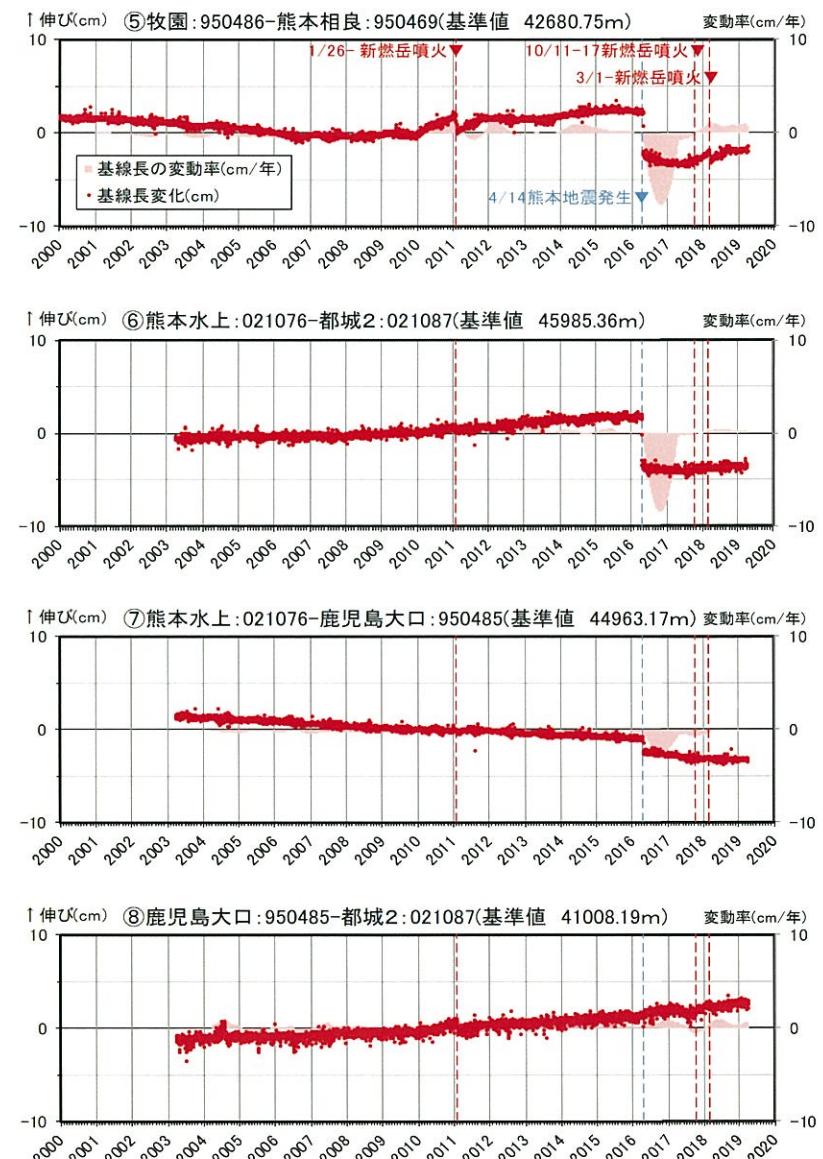


基線①～④の時系列変化

② 加久藤・小林カルデラ [地殻変動: 基線長変化]



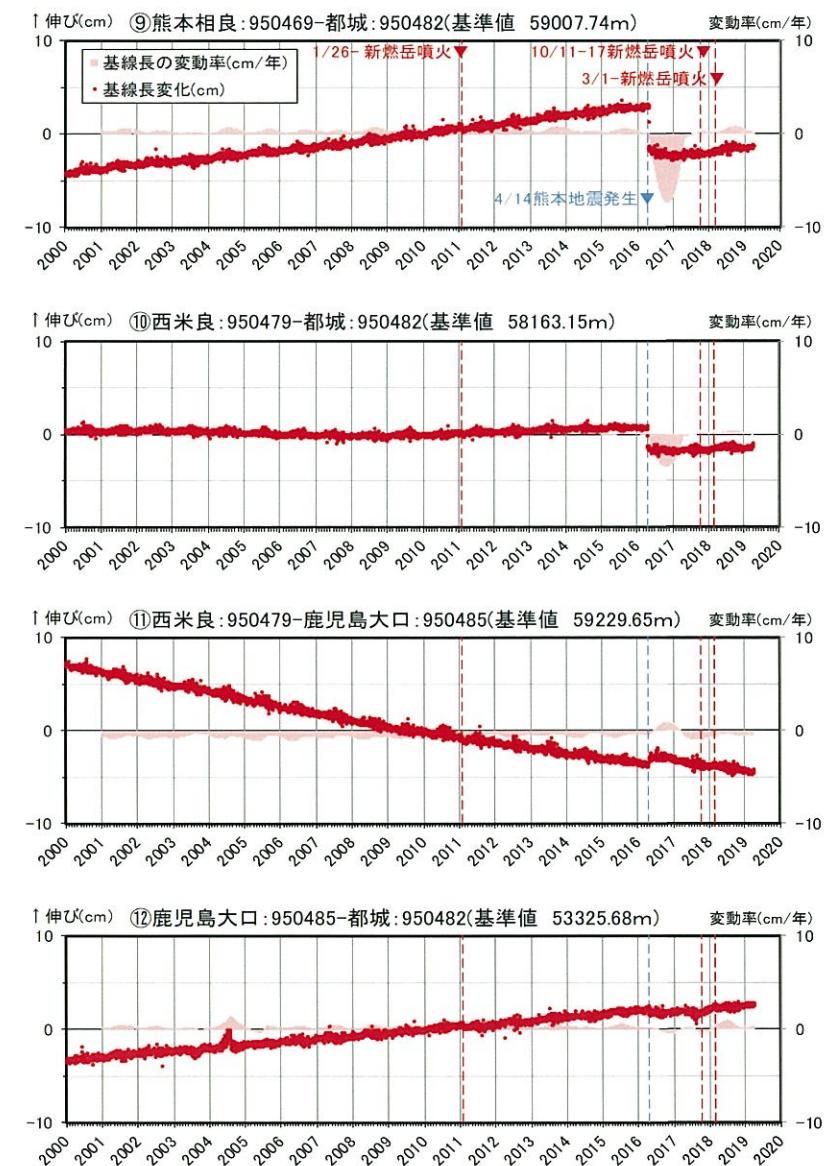
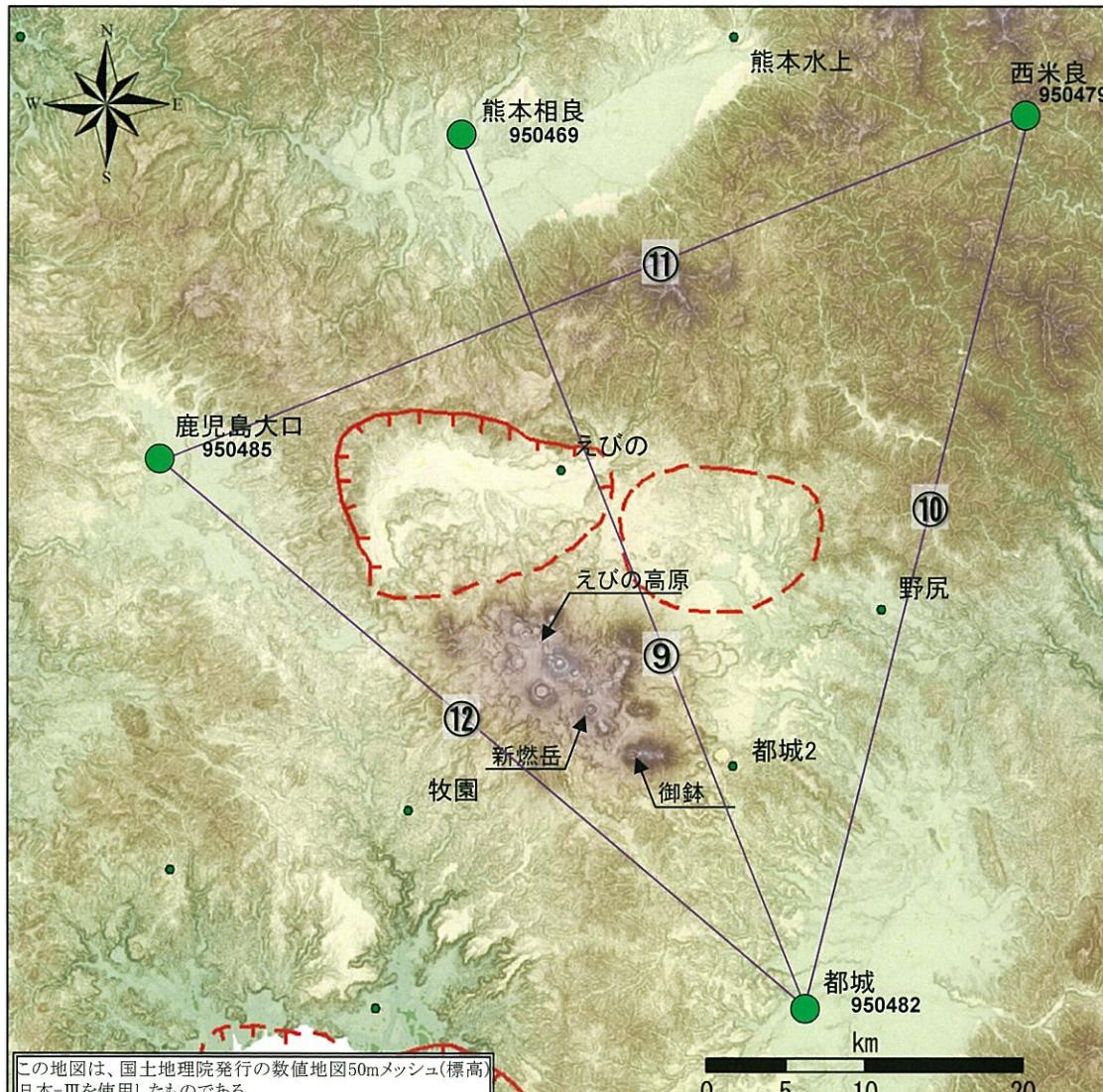
● GNSS観測点



基線⑤～⑧の時系列変化

※1 2010年1月1日の基線長を基準値とし、基準値からの変化量を表示
※2 変動率は過去1年間のデータを用いて求めた近似式により算出

② 加久藤・小林カルデラ [地殻変動: 基線長変化]

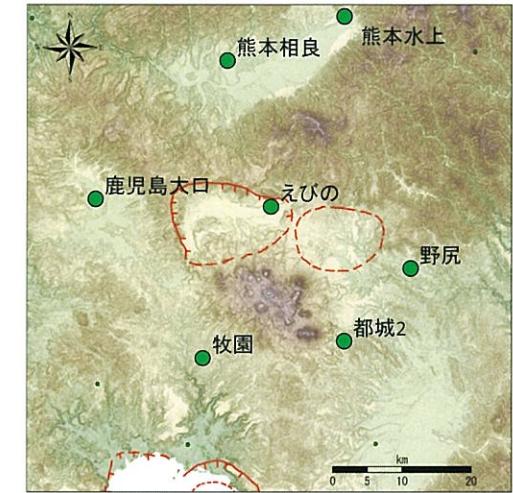
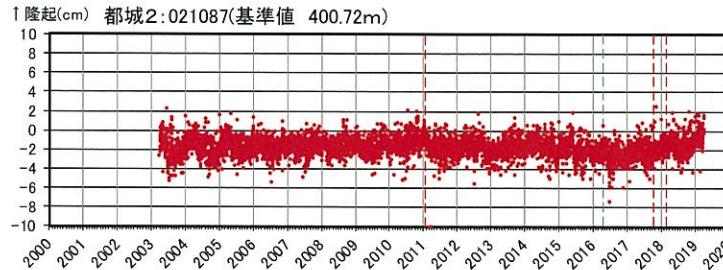
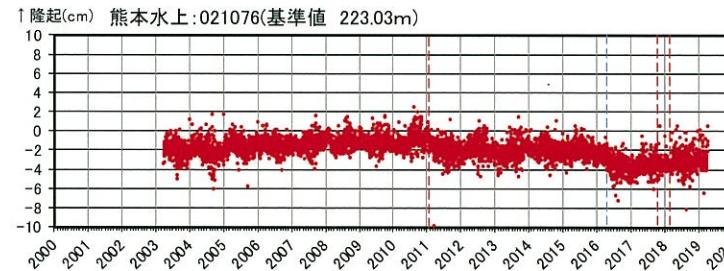
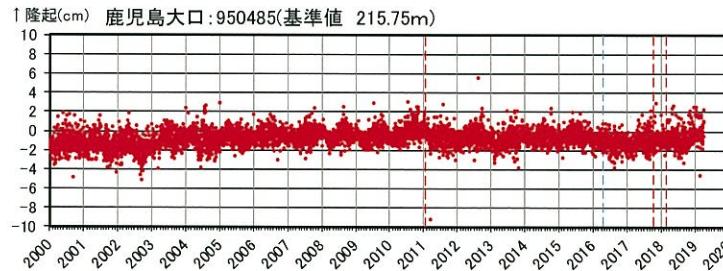
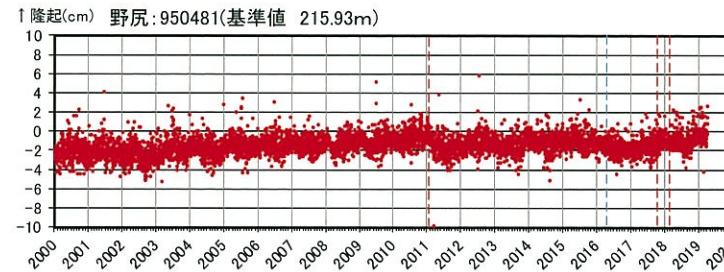
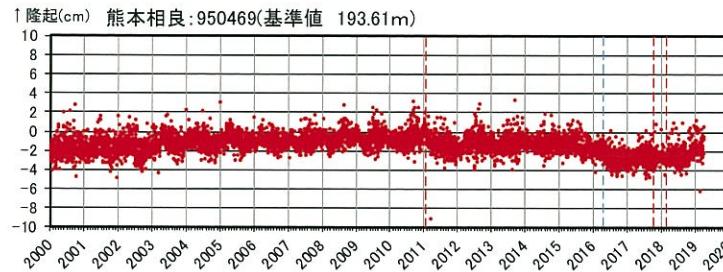
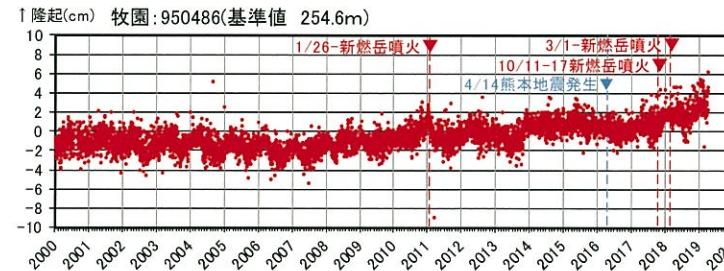
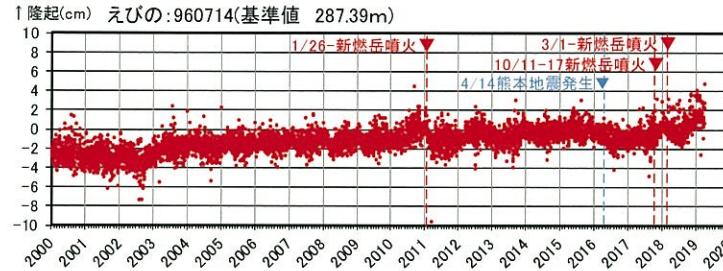


基線⑨～⑫の時系列変化

※1 2010年1月1日の基線長を基準値とし、基準値からの変化量を表示
※2 変動率は過去1年間のデータを用いて求めた近似式により算出

② 加久藤・小林カルデラ [地殻変動: 各観測点の鉛直変動]

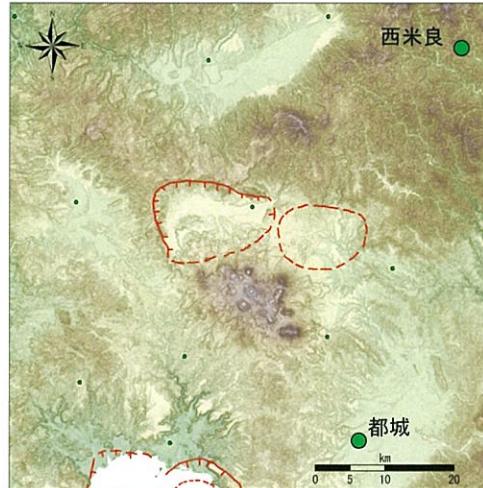
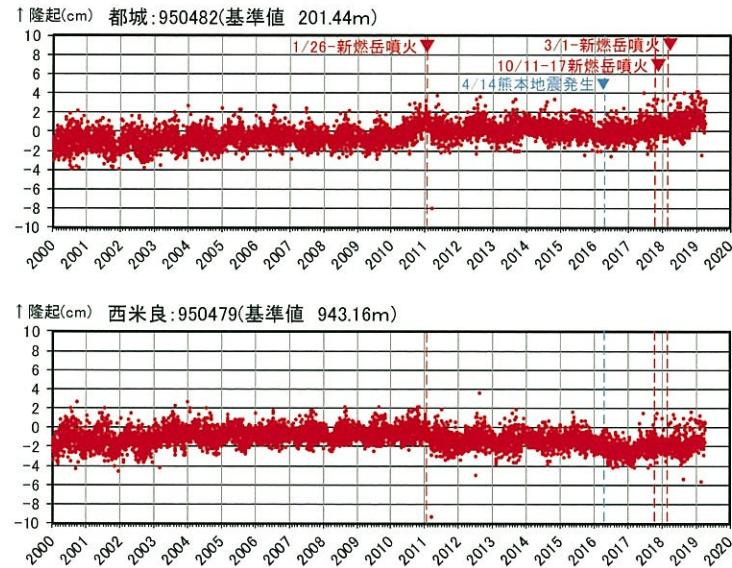
- 2018年度の鉛直変動は、霧島山の活動に関連した変動が認められるものの、加久藤・小林カルデラへのマグマ供給を示唆する広範囲での鉛直傾向は認められない。



※1 2010年1月1日の標高を基準値とし、基準値からの変化量を表示

※2 上の地図は、国土地理院発行の数値地図50mメッシュ(標高)日本-IIIを使用したものである

② 加久藤・小林カルデラ [地殻変動: 各観測点の鉛直変動]

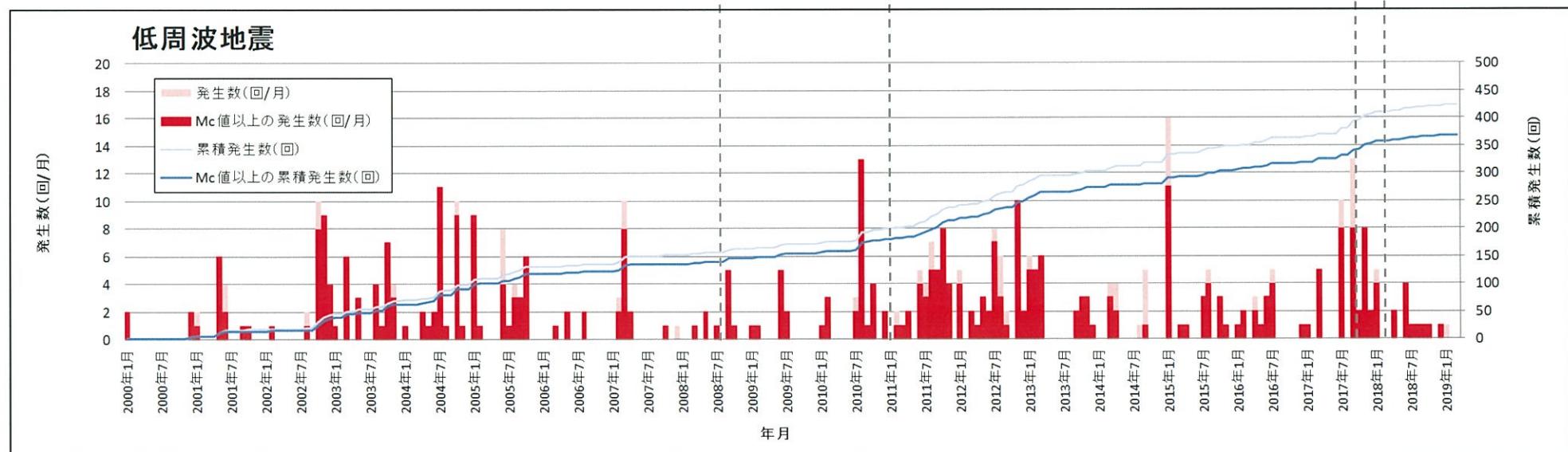
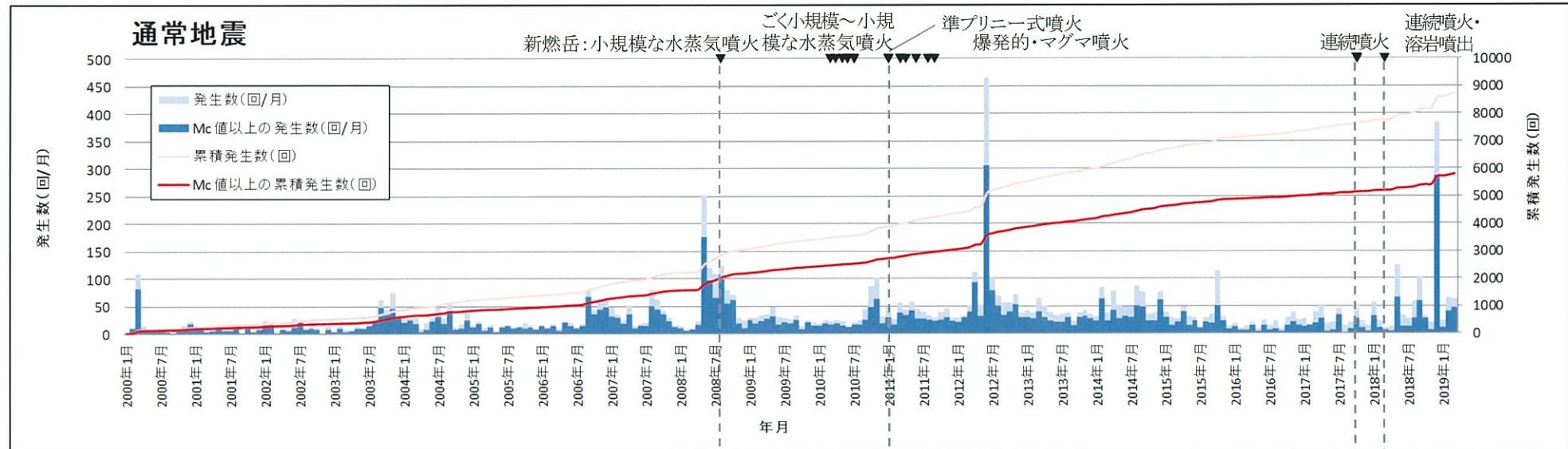


※1 2010年1月1日の標高を基準値とし、基準値からの変化量を表示

※2 上の地図は、国土地理院発行の数値地図50mメッシュ(標高)日本-IIIを使用したものである

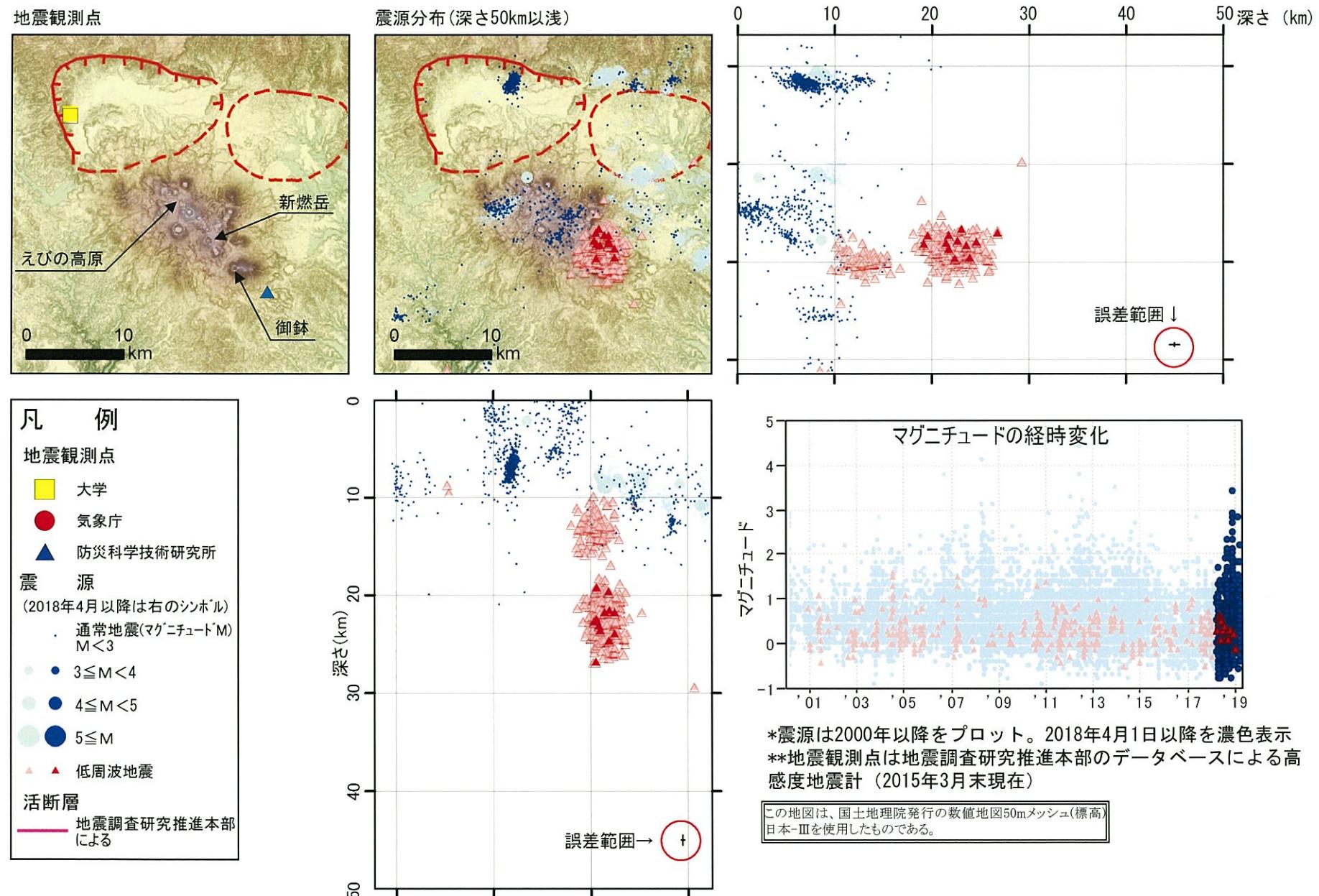
② 加久藤・小林カルデラ [地震活動: 2000年以降の地震発生数の推移]

- 2018年度の地震活動(発生数、位置、規模等)は、2018年12月に最大M3.4の地震が発生したものの、現在は地震前の状態に戻っている。しかしながら、この地震は加久藤カルデラ内で発生したことから、今後の地震活動に留意していく。

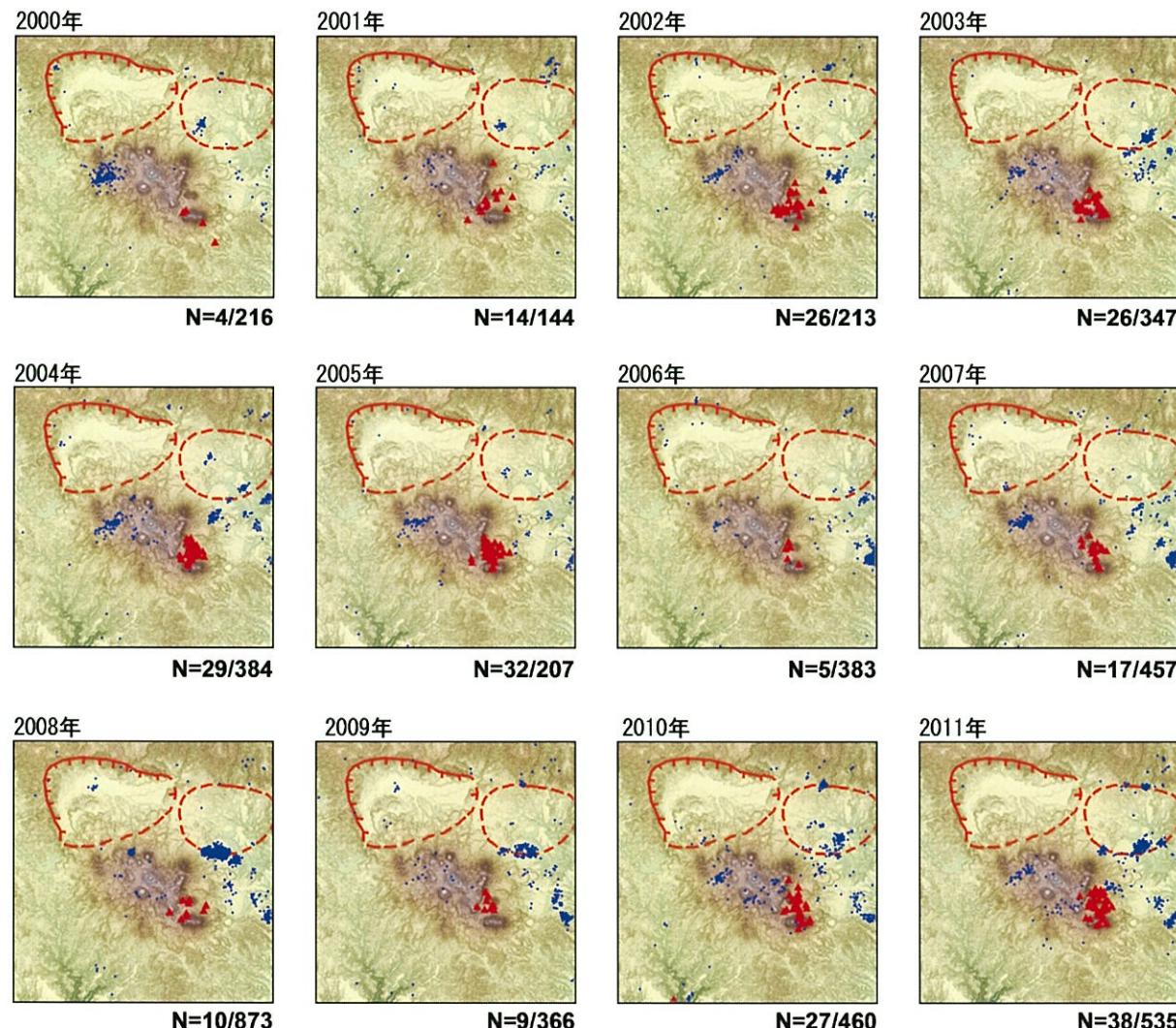


[Mc値(2000~2018年データ使用)] 通常地震 : 0.3 低周波地震 : 0.0

② 加久藤・小林カルデラ [地震活動:震源分布とマグニチュードの経時変化]



② 加久藤・小林カルデラ [地震活動:2000年以降の地震発生数の推移]



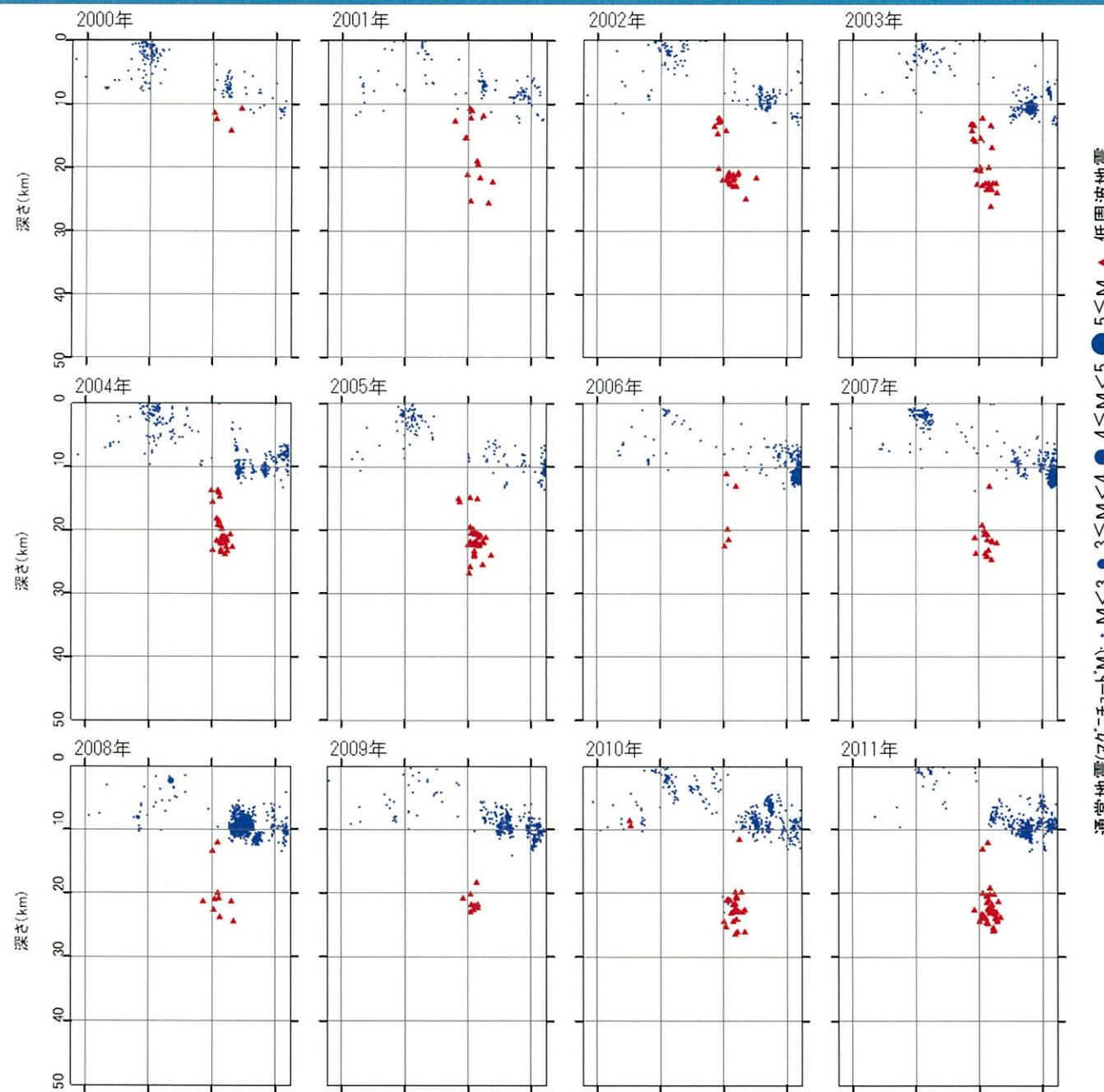
最近の主な噴火

- 2008年 小規模:水蒸気噴火
- 8月22日 新燃岳、小林市方面へ降灰
- 2010年 水蒸気噴火
- 3月30日、4月17日、5月27日、6月27日、6月28日
- 7月5日、7月10日
- 新燃岳でごく小規模～小規模噴火を繰り返す
- 2011年 中規模:マグマ水蒸気噴火
- 1月19日 小規模な噴火
- 1月26日～27日 準プリニー式噴火
- 1月27日～3月1日 ブルカノ式噴火

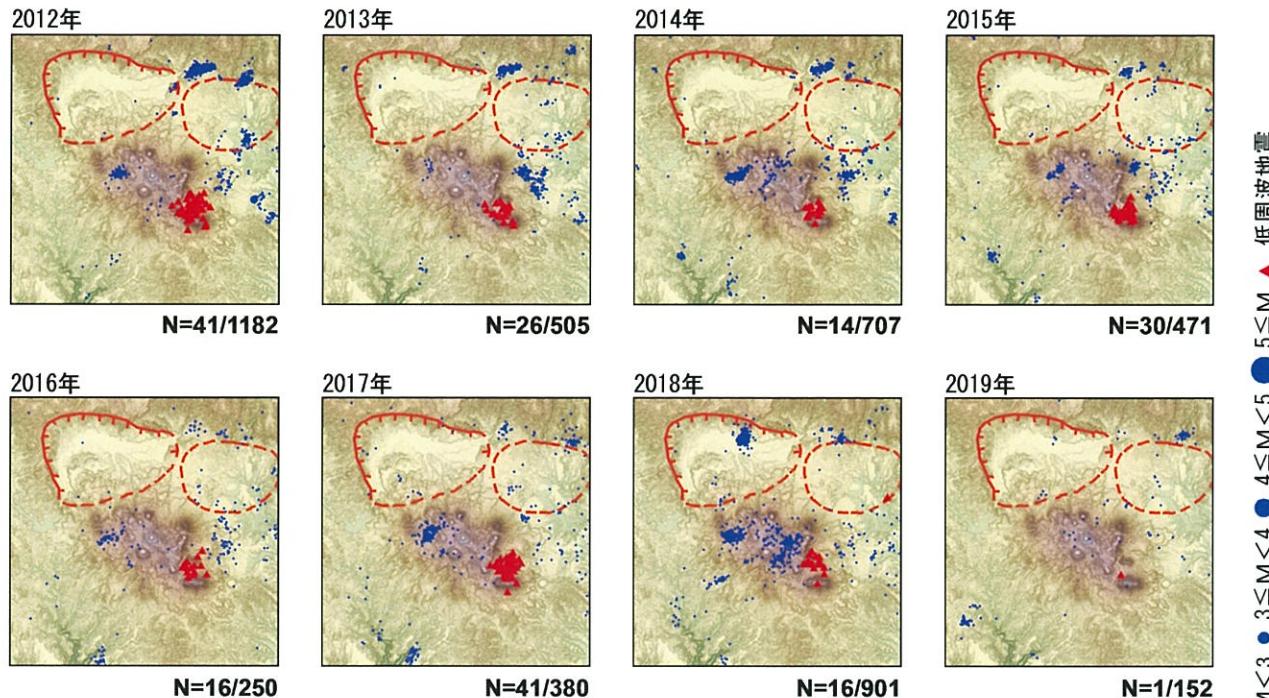
*各図の右下の数値は範囲内での該当年の(低周波地震発生数/総地震発生数)を示す。

この地図は、国土地理院発行の数値地図50mメッシュ(標高)
日本-IIIを使用したものである。

② 加久藤・小林カルデラ [地震活動: 2000年以降の地震発生数の推移]



② 加久藤・小林カルデラ [地震活動: 2000年以降の地震発生数の推移]



通常地震(マグニチュードM): • M<3 ● 3≤M<4 ● 4≤M<5 ● 5≤M ▲ 低周波地震

最近の主な噴火

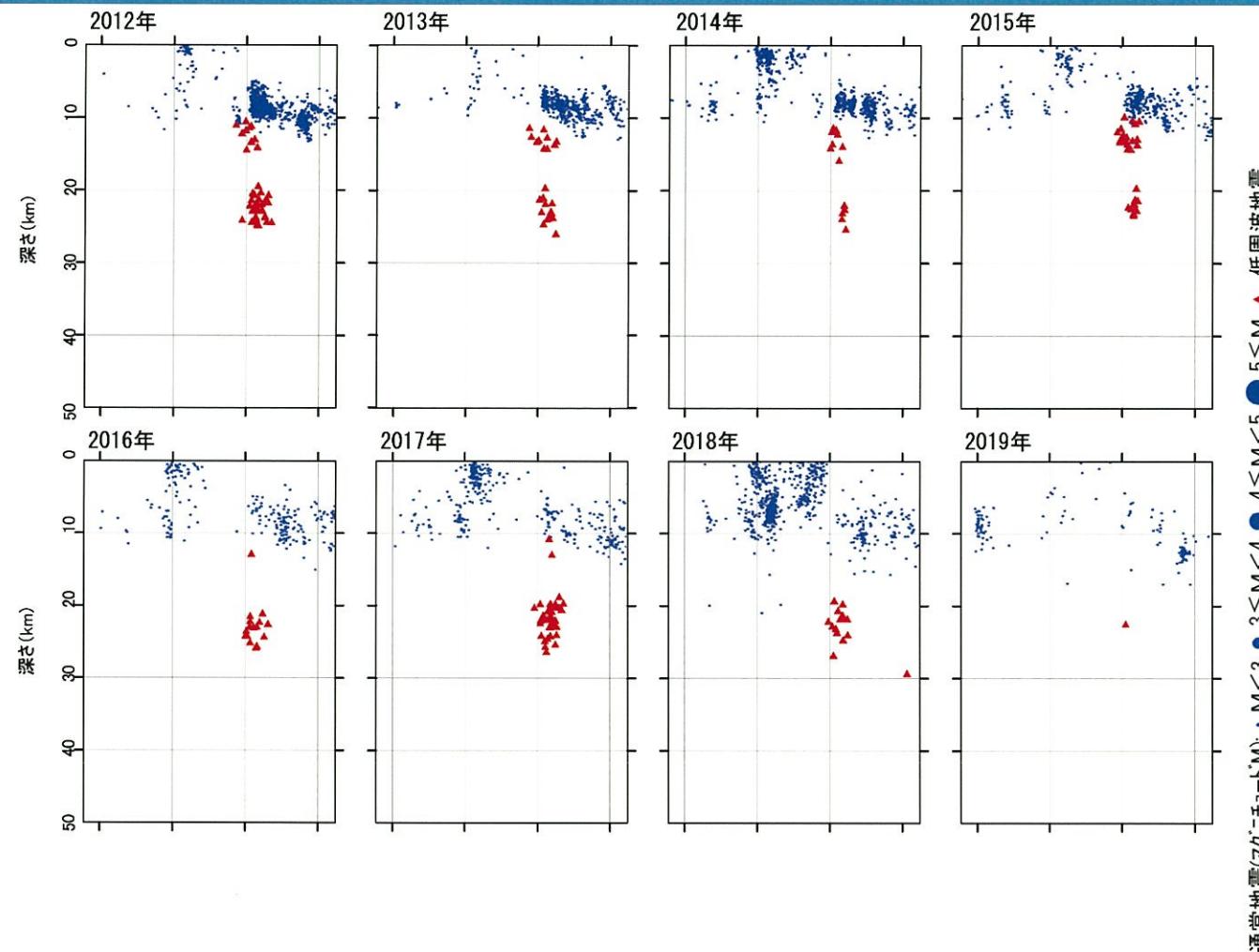
- 2017年 10月11日～17日 小規模噴火
- 2018年 3月1日～ 小規模噴火
- 2018年 3月6日～ 爆発的噴火、溶岩蓄積・流出
- 2018年 3月25日 小規模火碎流発生
- 2018年 4月5日 小規模火碎流発生

(6月28日以降、噴火は観測されていない)

*各図の右下の数値は範囲内での該当年の(低周波地震発生数/総地震発生数)を示す。
ただし、2019年は3月31日までもある。

この地図は、国土地理院発行の数値地図50mメッシュ(標高)
日本-IIIを使用したものである。

② 加久藤・小林カルデラ [地震活動: 2000年以降の地震発生数の推移]



② 加久藤・小林カルデラ [まとめ]

【活火山に関する公的機関の評価】

- ・広域のGNSS連続観測では、2018年3月の新燃岳の噴火以降、霧島山を挟む基線での伸びは鈍化しているものの継続している。
- ・広範囲の地震活動の活発化とGNSS基線の伸長は、霧島山深部のマグマだまりの蓄積を反映していると推定されることから、火山活動の推移を引き続き慎重に監視する必要がある。

【当社の評価】

- ・GNSS連続観測による基線長変化等を確認した結果、2018年度の基線長変化は、霧島火山の活動に関連した変動が認められるものの、カルデラ火山の活動に起因する有意な変化は認められない。
- ・地震発生数の推移及び震源分布とマグニチュードの経時変化等を確認した結果、2018年度の地震活動(発生数、位置、規模等)は、2018年12月に最大M3.4の地震が発生したものの、現在は地震前の状態に戻っている。しかしながら、この地震は加久藤カルデラ内で発生したことから、今後の地震活動に留意していく。

加久藤・小林カルデラについては、公的機関による発表情報、既存観測網によるデータ等を収集・分析した結果、2018年度は、顕著なマグマ供給率の増加を示唆する地殻変動及び地震活動の有意な変化が認められることから、活動状況に変化はないと評価した。

余 白

③ 姶良カルデラ [活火山に関する公的機関の評価概要]

○桜島

桜島の南岳山頂火口では活発な噴火活動が継続していたが、1月中旬頃から噴火活動がやや低下している。しかし、火山ガス(二酸化硫黄)の放出量は概ね多い状態が続いていることなどから、今後も南岳山頂火口を中心に、噴火活動が継続すると考えられる。

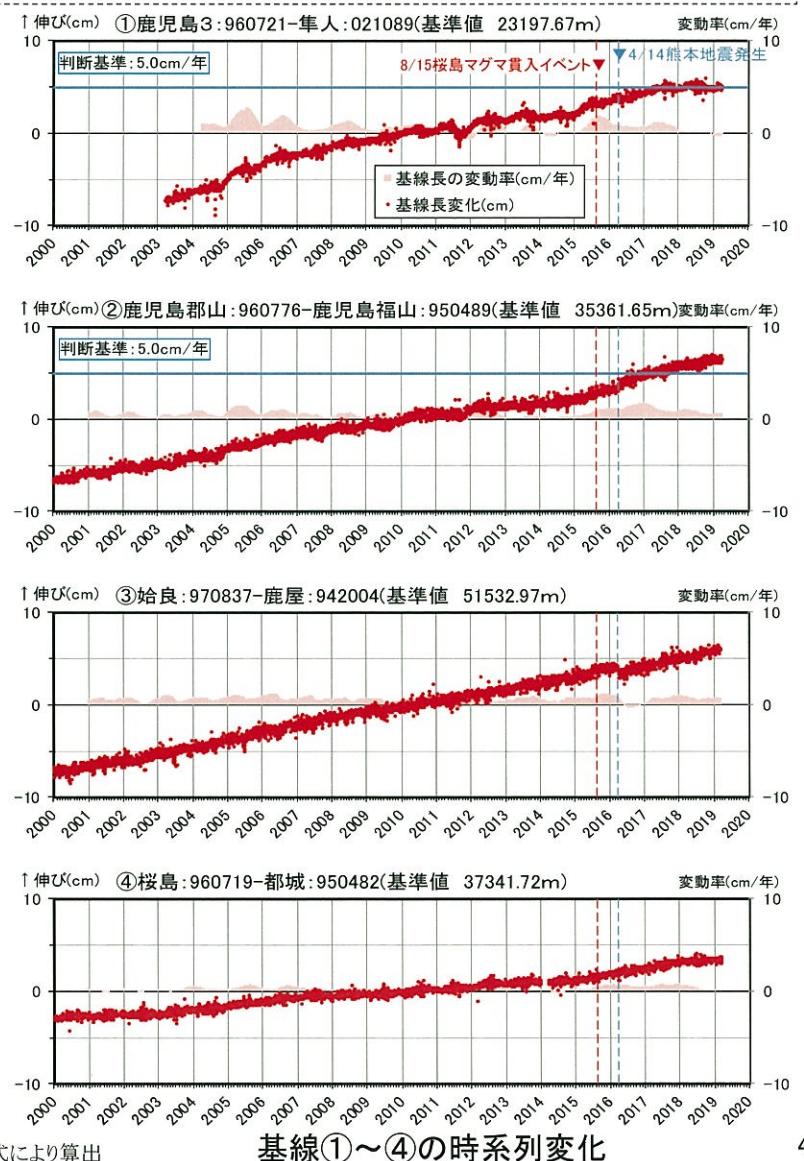
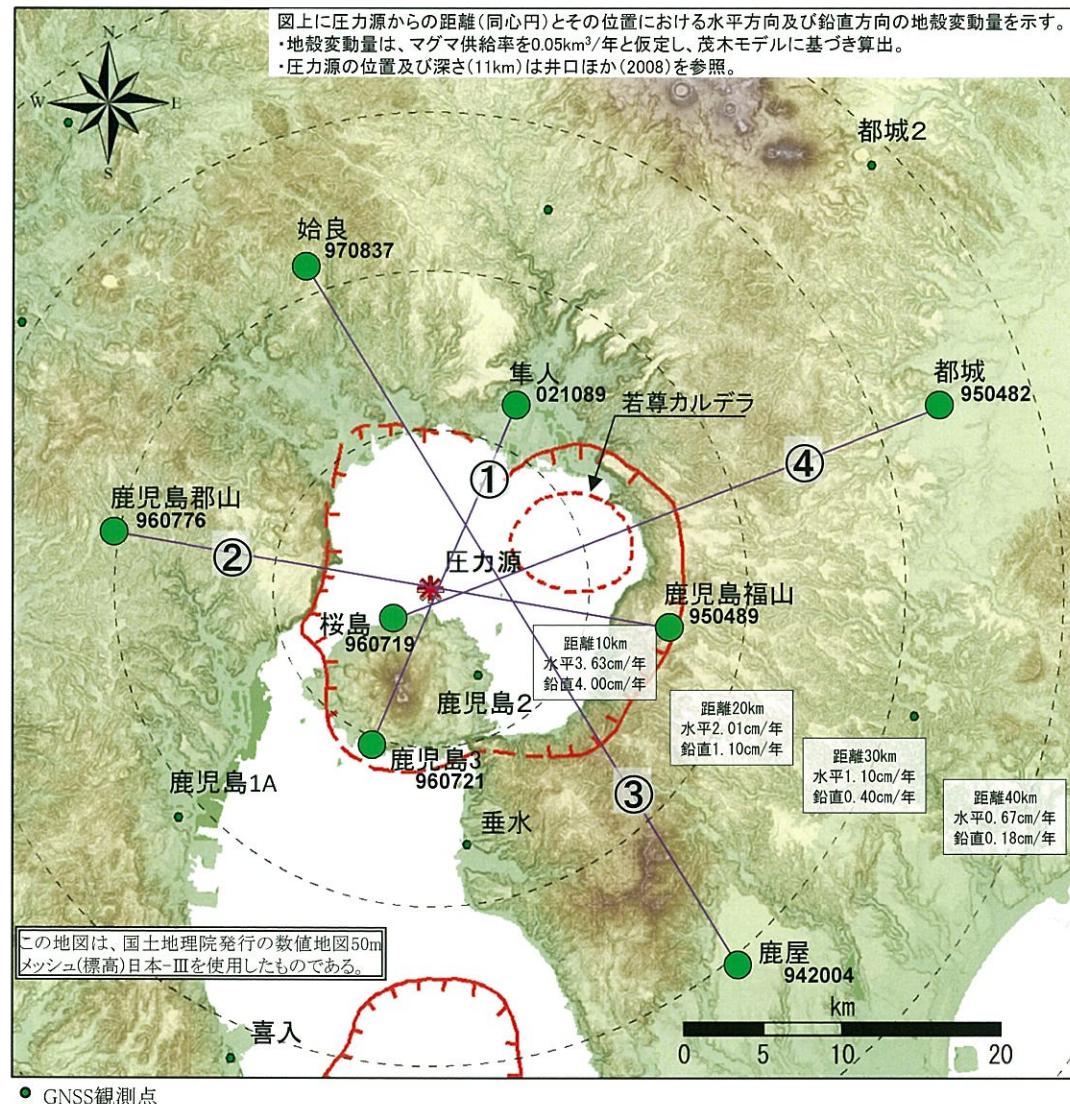
- ・南岳山頂火口での爆発的噴火は10月なし、11月2回、12月34回、1月6回、2月8回(17日まで)発生した。11月14日の爆発的噴火では、噴煙は最高で火口縁上4,000mまで上がり雲に入った。大きな噴石は4合目(南岳山頂火口より1,300~1,700m)まで達した。
- ・昭和火口では2018年4月4日以降、ごく小規模な噴火も発生していない。
- ・南岳山頂火口では、夜間に高感度の監視カメラで火映を時々観測した。
- ・火山ガス(二酸化硫黄)の1日あたりの放出量は、2018年11月以降増加し、12月は1,800~4,500トンと非常に多くなった。1月は1,800~2,300トン、2月も3,000トンと概ね多い状態が続いている。
- ・鹿児島県が実施している降灰の観測データから推定した桜島の火山灰月別噴出量は、2018年9月約8万トン、10月約4万トン、11月約9万トン、12月約16万トン、1月5万トンと前回(6月~8月)と比べて同程度であった。
- ・火山性地震は概ね少ない状態で経過した。火山性微動は時々発生した。
- ・桜島島内の地殻変動観測では収縮がみられている。
- ・広域のGNSS連続観測でみられている姶良カルデラ(鹿児島湾奥部)の地下深部の膨張を示す基線の伸びは、わずかながら継続している。

○若尊

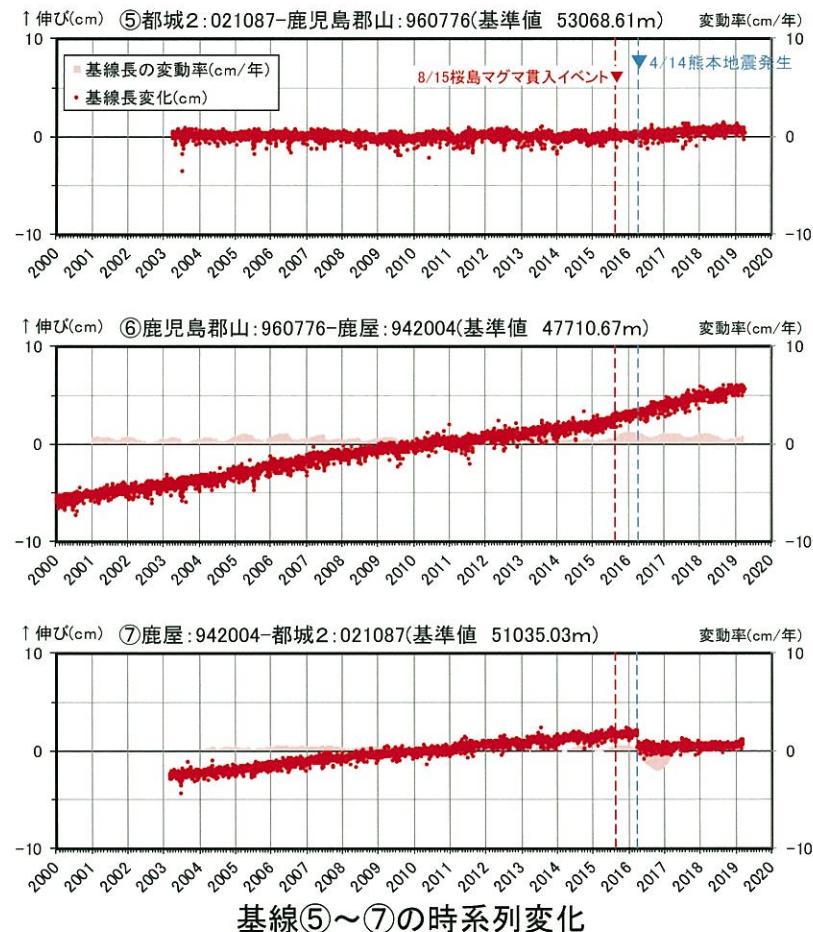
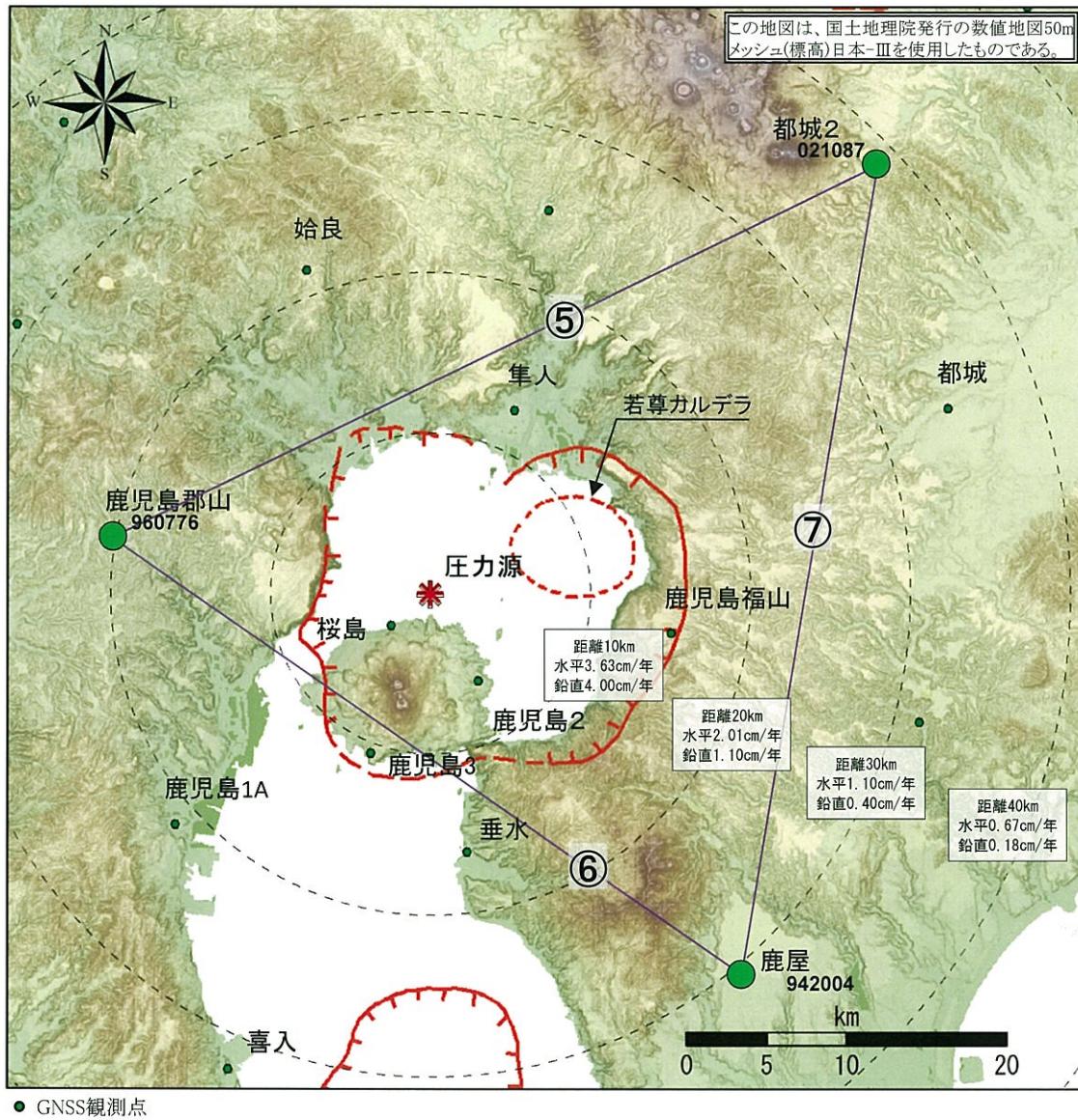
- ・若尊の周辺領域で時々地震が発生した。その他の火山活動に特段の変化はなく、噴火の兆候はみられない。

③ 姶良カルデラ [地殻変動: 基線長変化]

- ・姶良カルデラ周辺の多くの基線で、マグマ供給を示唆する広範囲な伸びの傾向が認められるが、2018年度の基線長の変動率に有意な変化は認められない。
- ・基線①、②の変動率は、警戒監視の移行判断基準値（マグマ供給率 $0.05\text{km}^3/\text{年}$ ＝基線長変動率 $5\text{cm}/\text{年}$ ）に達していない。
- ・なお、基線①、②の変動率から求めた、過去3年間のマグマ供給率は約 $0.01\text{km}^3/\text{年}$ であることから、監視レベルは「注意」を継続する。



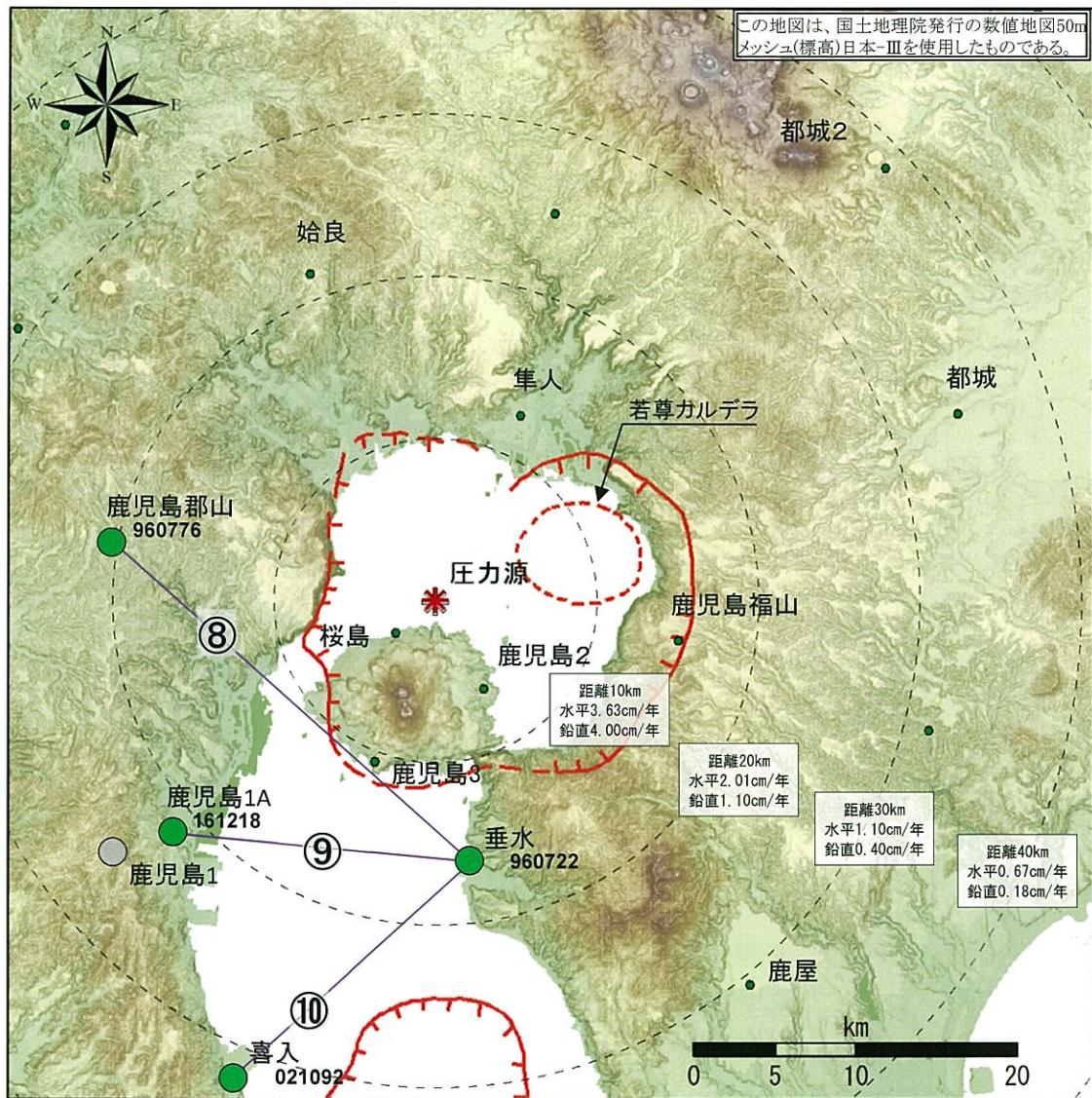
③ 姶良カルデラ [地殻変動: 基線長変化]



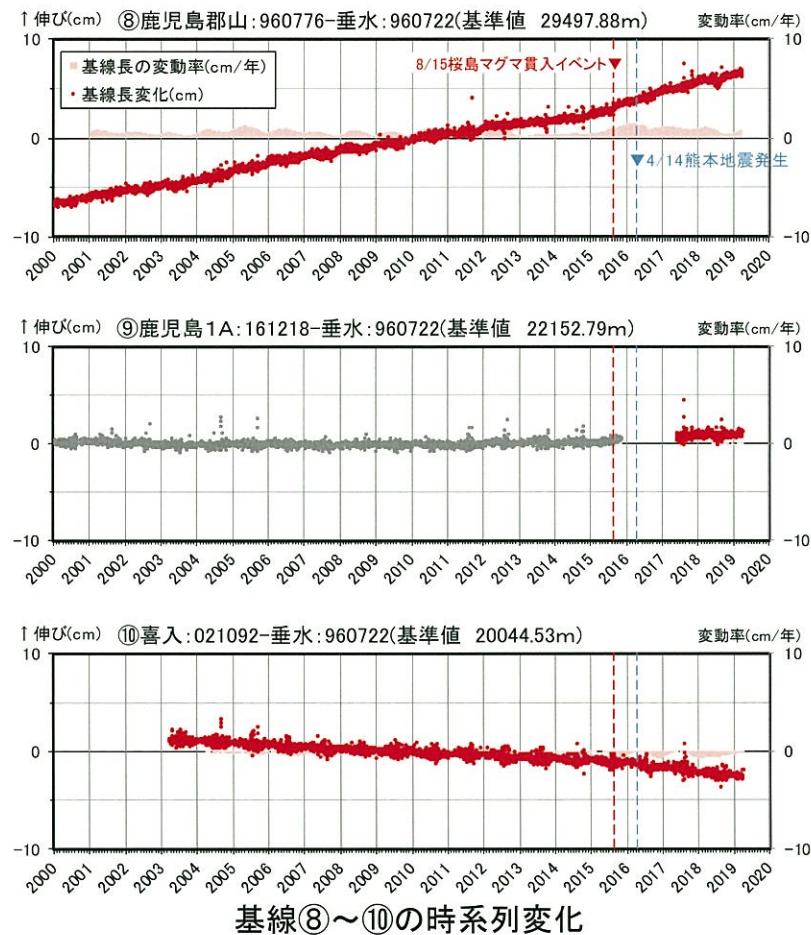
※1 2010年1月1日の基線長を基準値とし、基準値からの変化量を表示

※2 変動率は過去1年間のデータを用いて求めた近似式により算出

③ 姶良カルデラ [地殻変動: 基線長変化]



● GNSS観測点



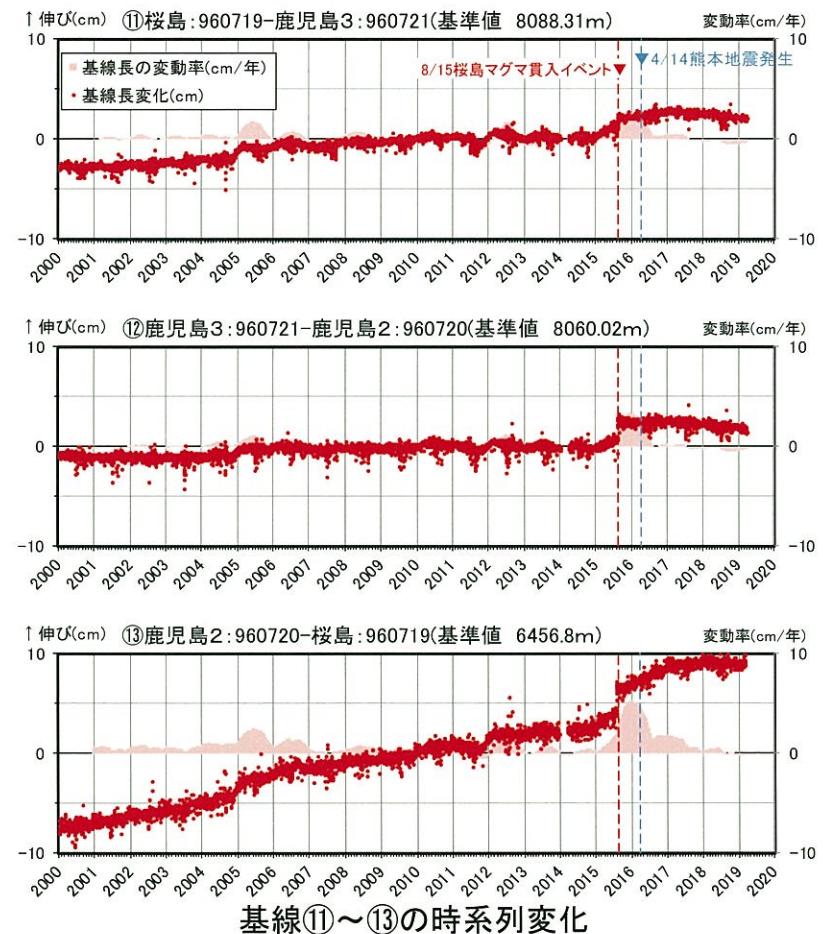
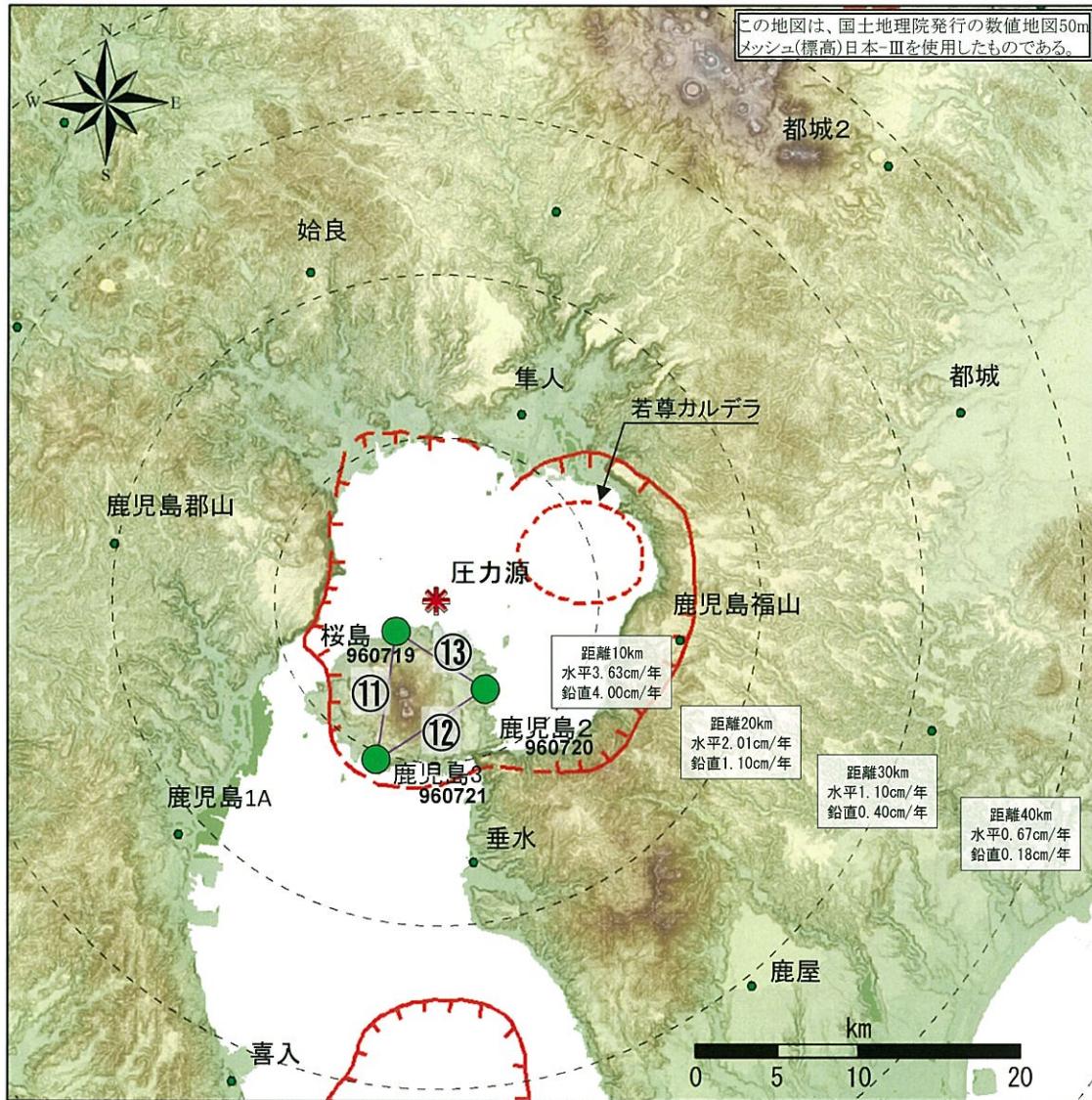
基線⑧～⑩の時系列変化

※1 鹿児島1地点については、観測設備の不具合により、2015年11月5日以降データが取得できない状態であったが、2017年5月23日以降、移設して鹿児島1Aとして観測を開始。2000年から2015年は鹿児島1-垂水の基線長変化の観測データ（灰色）。

※2 2010年1月1日の基線長を基準値とし、基準値からの変化量を表示

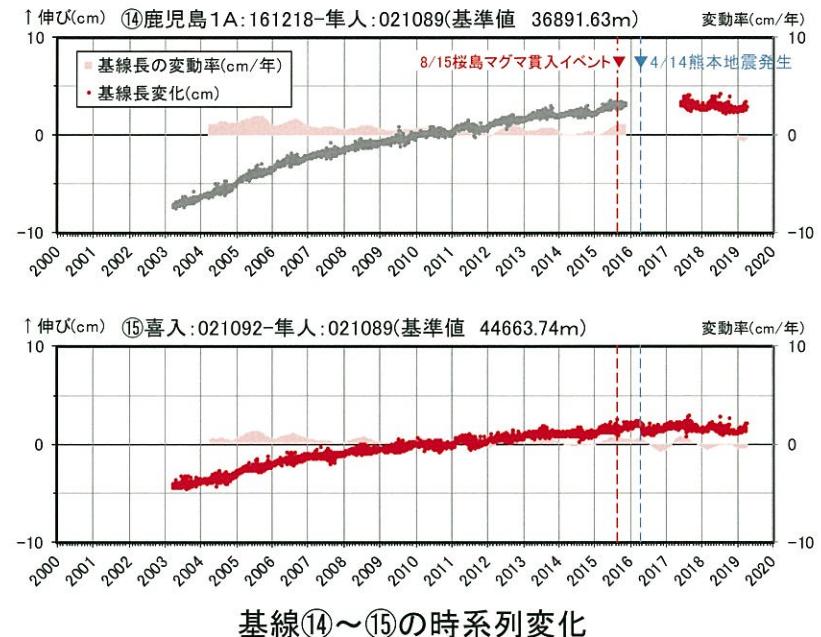
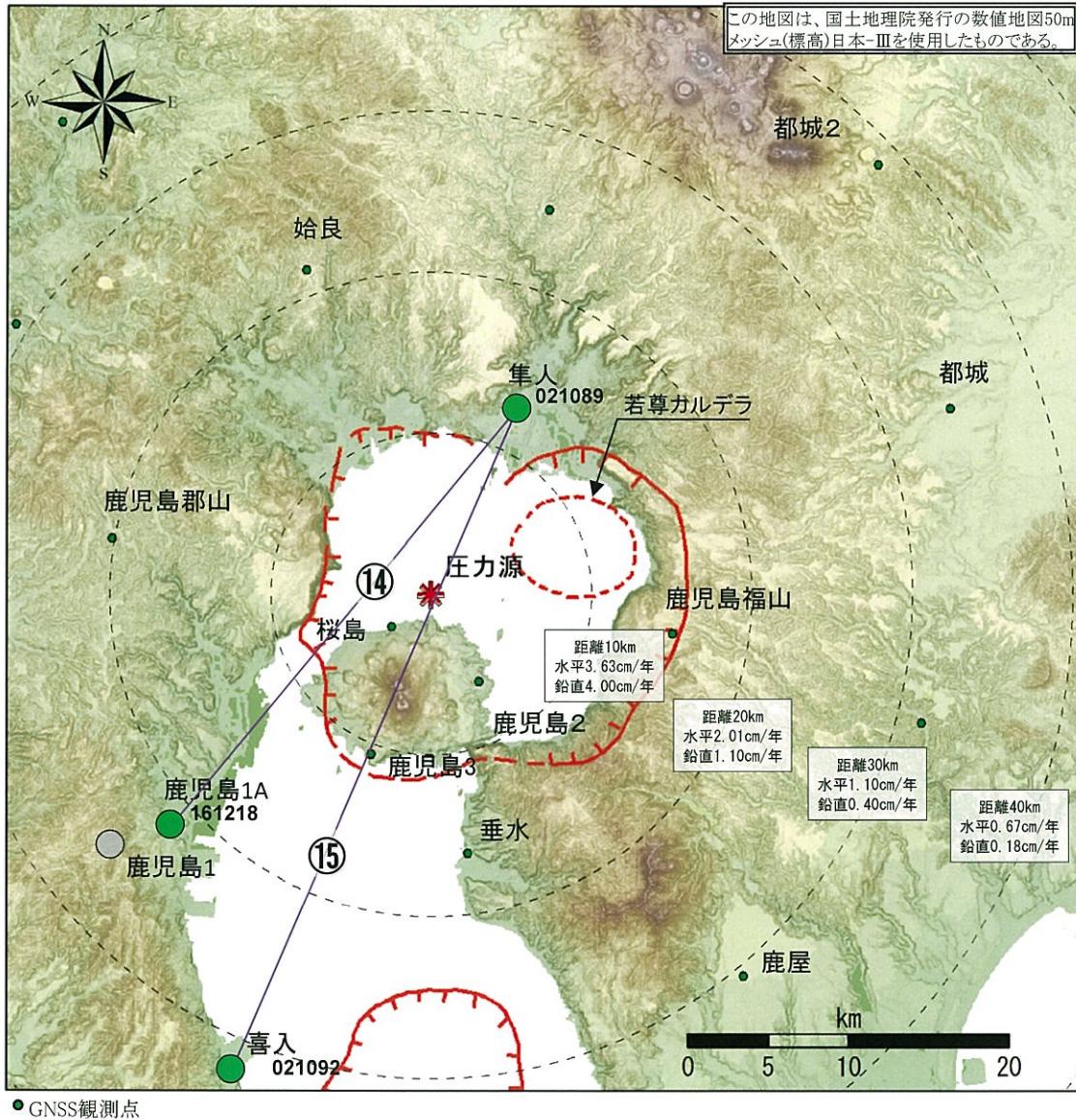
※3 変動率は過去1年間のデータを用いて求めた近似式により算出

③ 姶良カルデラ [地殻変動: 基線長変化]



※1 2010年1月1日の基線長を基準値とし、基準値からの変化量を表示
※2 変動率は過去1年間のデータを用いて求めた近似式により算出

③ 姶良カルデラ [地殻変動: 基線長変化]

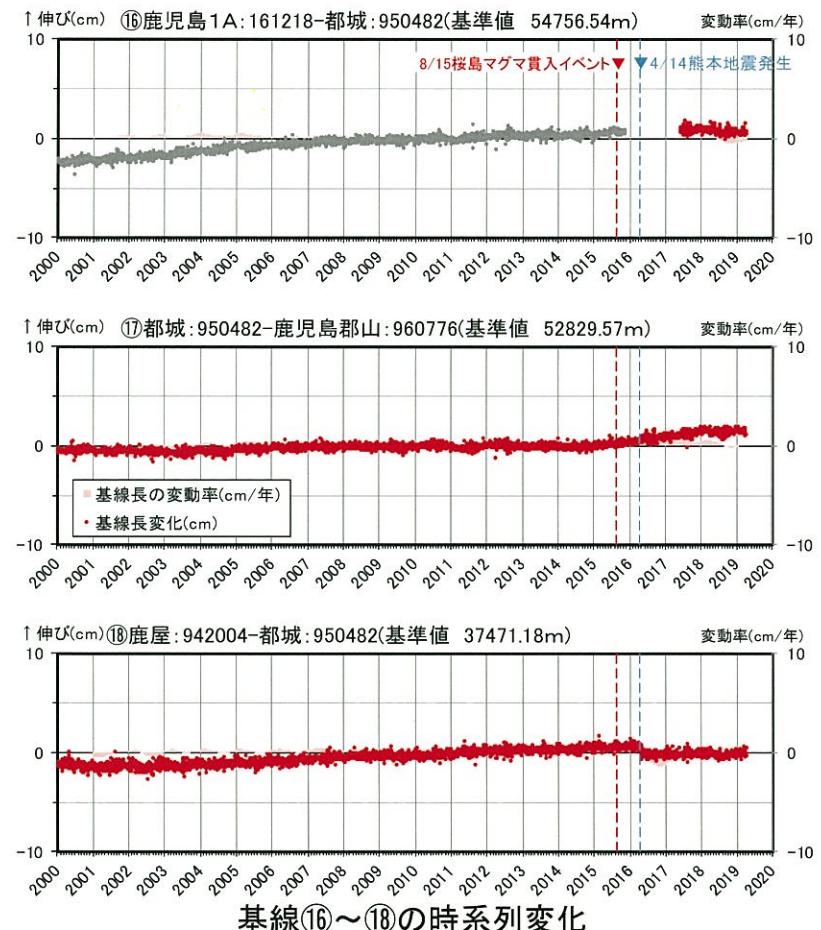
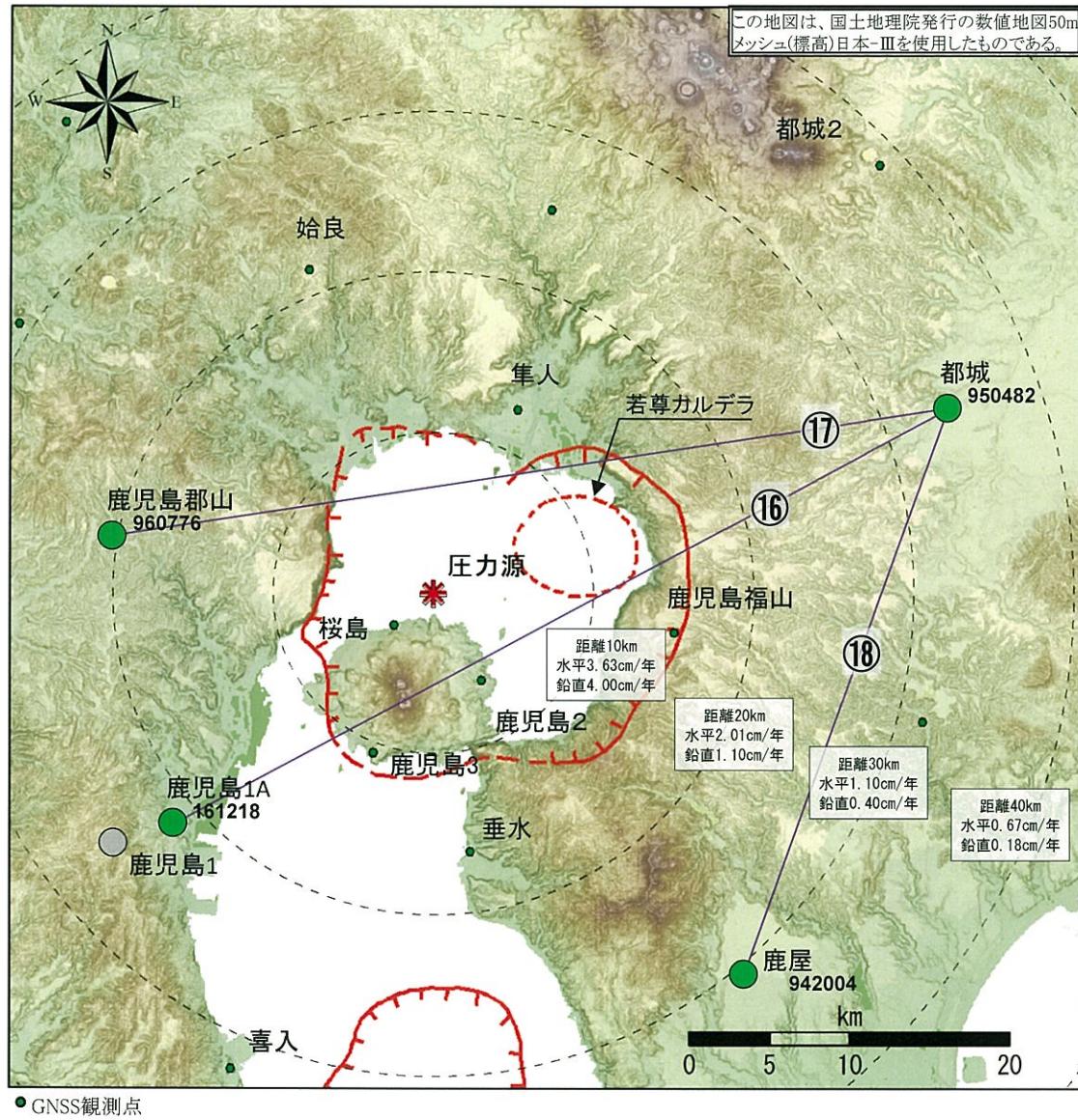


※1 鹿児島1地点については、観測設備の不具合により、2015年11月5日以降データが取得できない状態であったが、2017年5月23日以降、移設して鹿児島1Aとして観測を開始。2000年から2015年は鹿児島1-垂水の基線長変化の観測データ(灰色)。

※2 2010年1月1日の基線長を基準値とし、基準値からの変化量を表示

※3 変動率は過去1年間のデータを用いて求めた近似式により算出

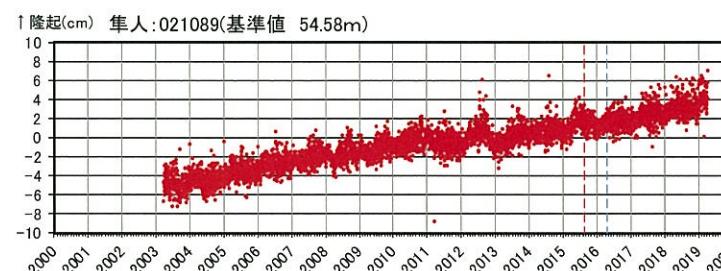
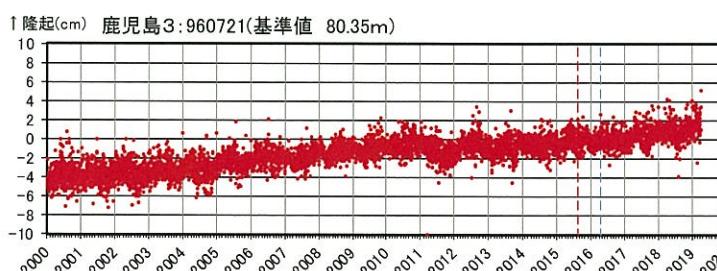
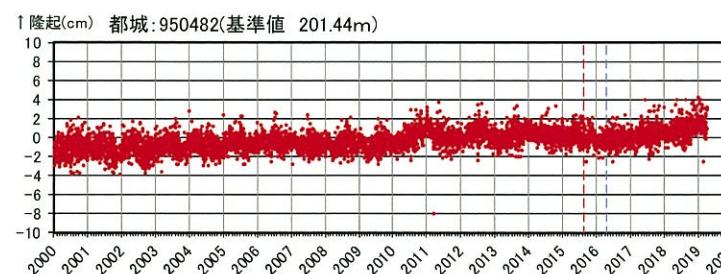
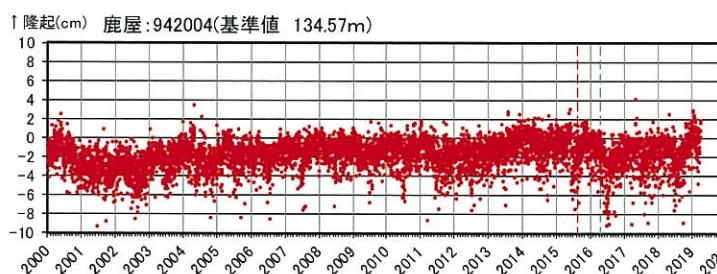
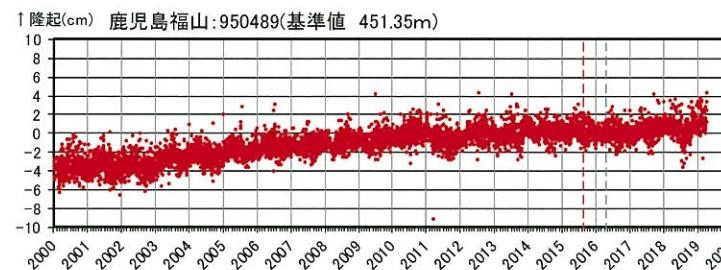
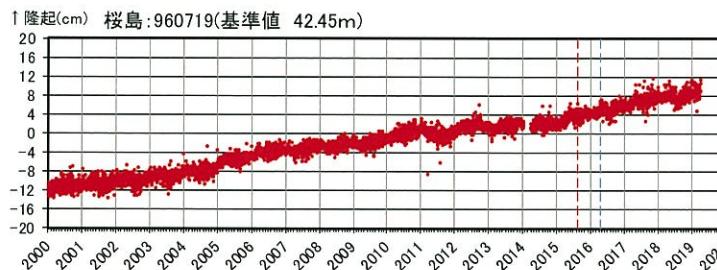
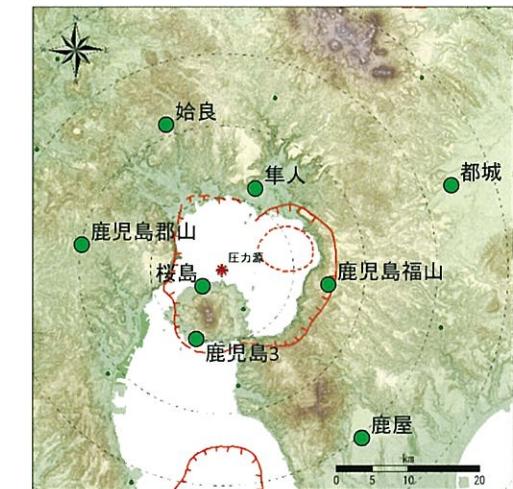
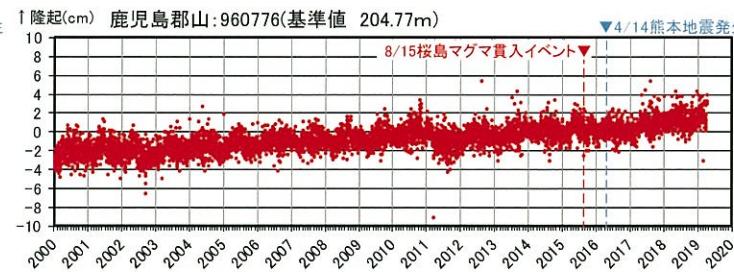
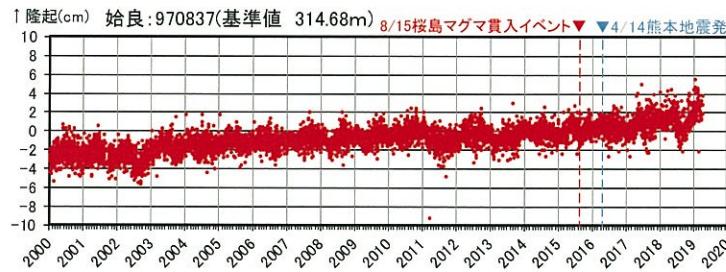
③ 姶良カルデラ [地殻変動: 基線長変化]



※1 2010年1月1日の基線長を基準値とし、基準値からの変化量を表示
※2 変動率は過去1年間のデータを用いて求めた近似式により算出

③ 姶良カルデラ [地殻変動: 各観測点の鉛直変動]

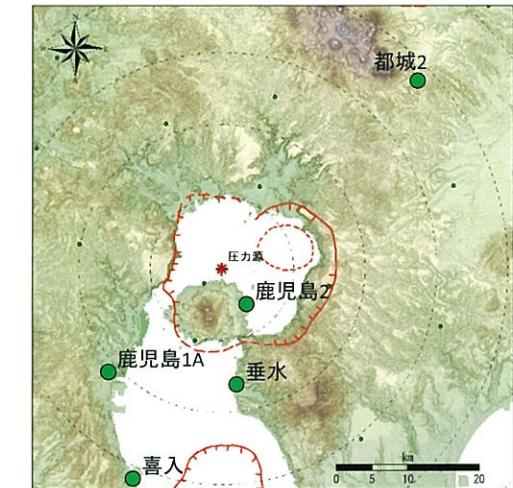
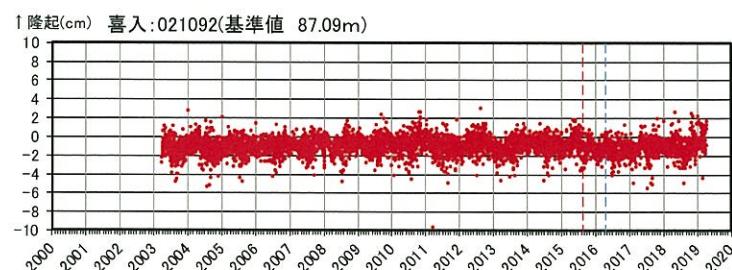
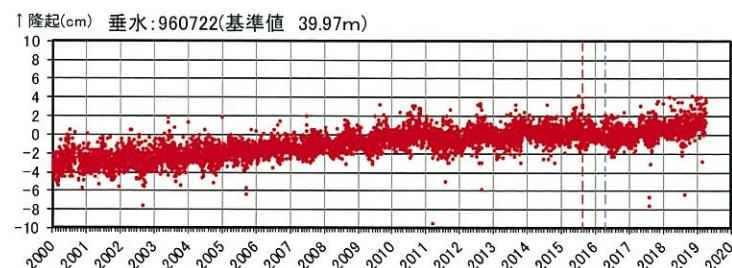
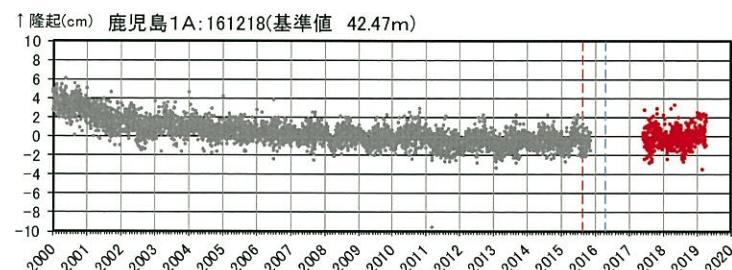
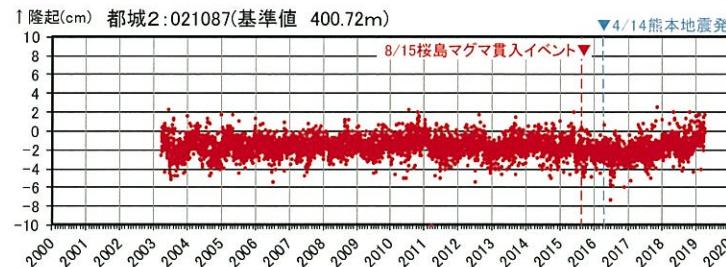
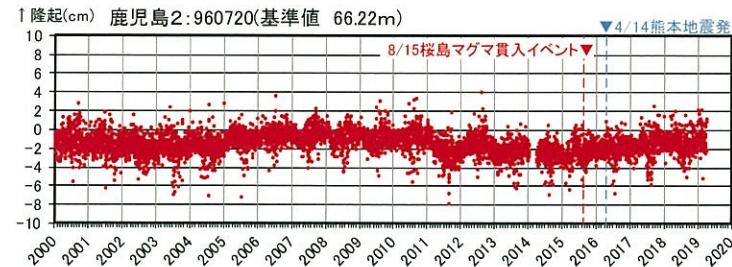
- 2018年度の鉛直変動は、姶良カルデラ周辺の多くの点でマグマ供給を示唆する広範囲での隆起傾向が認められるが、過去と比較して有意な変化は認められない。



※1 2010年1月1日の標高を基準値とし、基準値からの変化量を表示

※2 上の地図は、国土地理院発行の数値地図50mメッシュ(標高)日本-IIIを使用したものである

③ 姶良カルデラ [地殻変動: 各観測点の鉛直変動]



※1 鹿児島1地点については、観測設備の不具合により、2015年11月5日以降データが取得できない状態であったが、2017年5月23日以降、移設して鹿児島1Aとして観測を開始。2000年から2015年は鹿児島1の観測データ(灰色)。鹿児島1Aの基準値は観測期間の平均値。

※2 2010年1月1日の標高を基準値とし、基準値からの変化量を表示

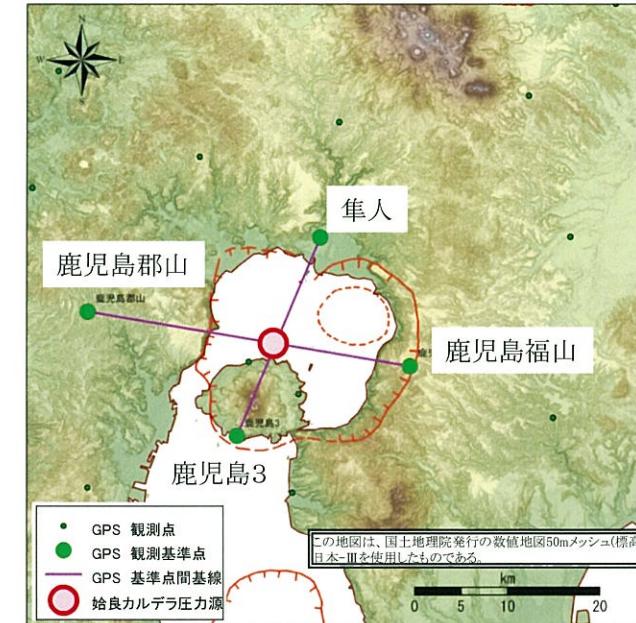
※3 上の地図は、国土地理院発行の数値地図50mメッシュ(標高)日本-IIIを使用したものである

③ 始良カルデラ [監視レベルの移行判断基準と監視体制]

監視体制の移行基準値(0.05km³/年)を始良カルデラに適用した場合、水平方向の地殻変動の変動率はKozono et al., 2013の式から5cm/年に相当する(圧力源上を通る2測線から算出)。

供給率と水平変位量との関係式(Kozono et al., 2013)

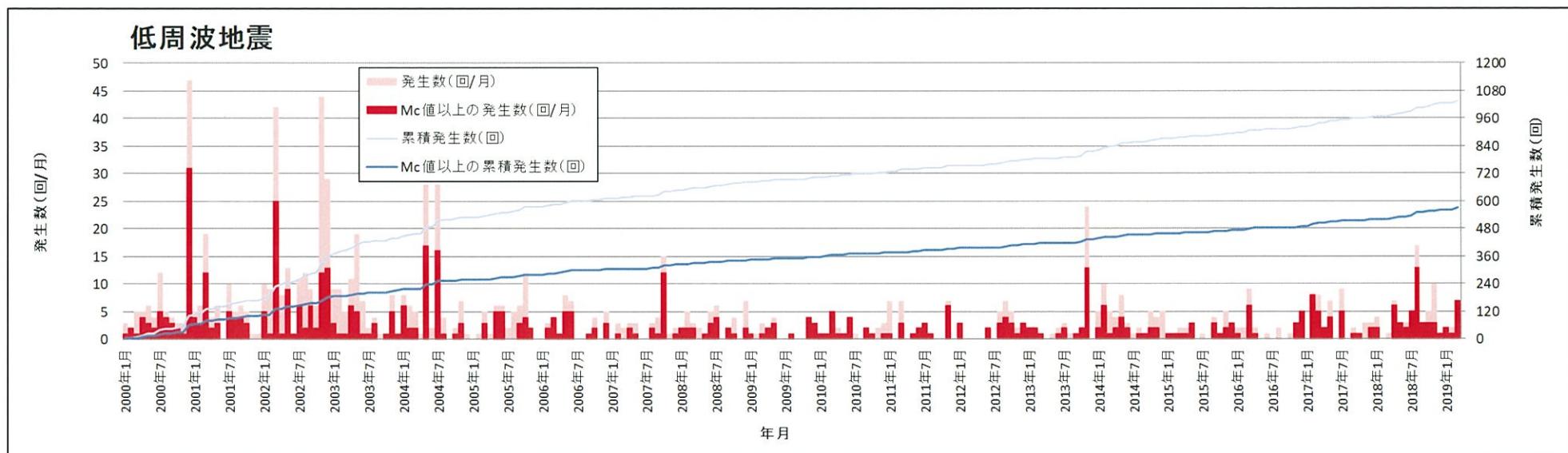
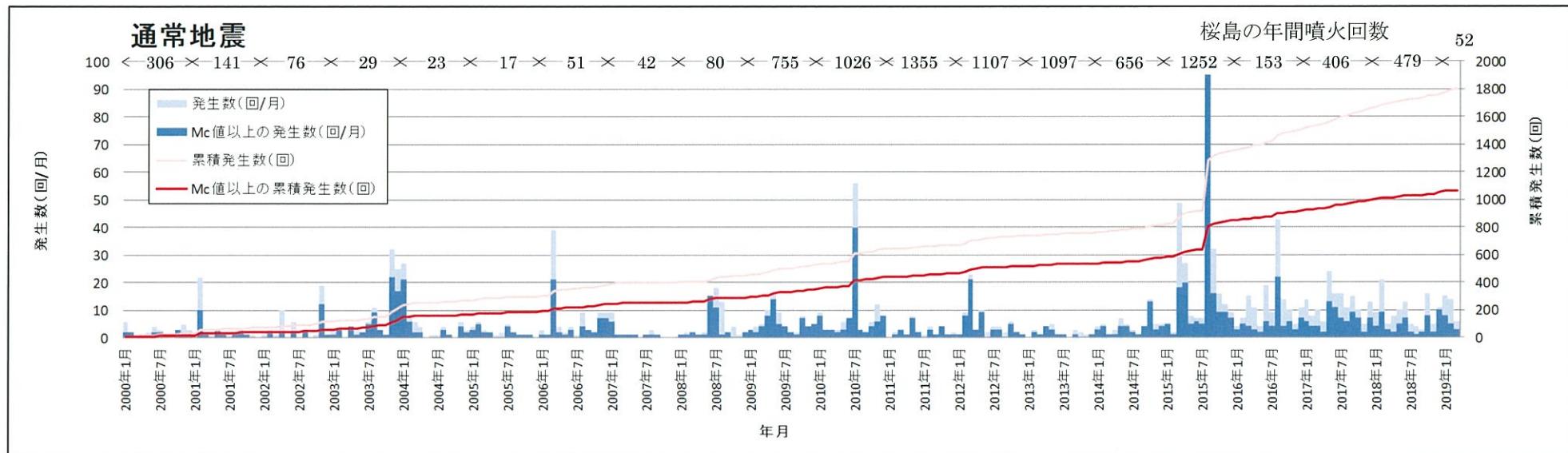
$$\begin{aligned}\Delta V_G &= \frac{\pi}{1-\nu} \frac{(r^2 + d^2)^{3/2}}{d} u_z \\ &= \frac{\pi}{1-\nu} \frac{(r^2 + d^2)^{3/2}}{r} u_r \\ &= \frac{\pi}{3(1-\nu)} \frac{(r^2 + d^2)^{5/2}}{rd} \frac{\partial u_z}{\partial r},\end{aligned}$$



項目	単位	観測点				備考	
		鹿児島3 ⇄ 隼人	鹿児島福山 ⇄ 鹿児島郡山				
入力値	ΔV_G 体積変化 (マグマ供給率)	km ³ /年	0.05			Druitt et al. (2012) を参照	
	ν ポアソン比	-	0.25			江頭ほか (1997) を参照	
	r 圧力源から観測点までの水平投影距離	km	10.6	12.6	15.2	20.1	井口ほか (2008) を参照
	d 圧力源の深さ	km	11.0			井口ほか (2013) を参照	
出力値	Ur	各地点 基線長間 (2地点の計) 平均 (2つの基線長)	3.5	3.2	2.7	2.0	
	-		6.8		4.7		
	-		5.7 (≈ 5.0 が移行判断基準値)				

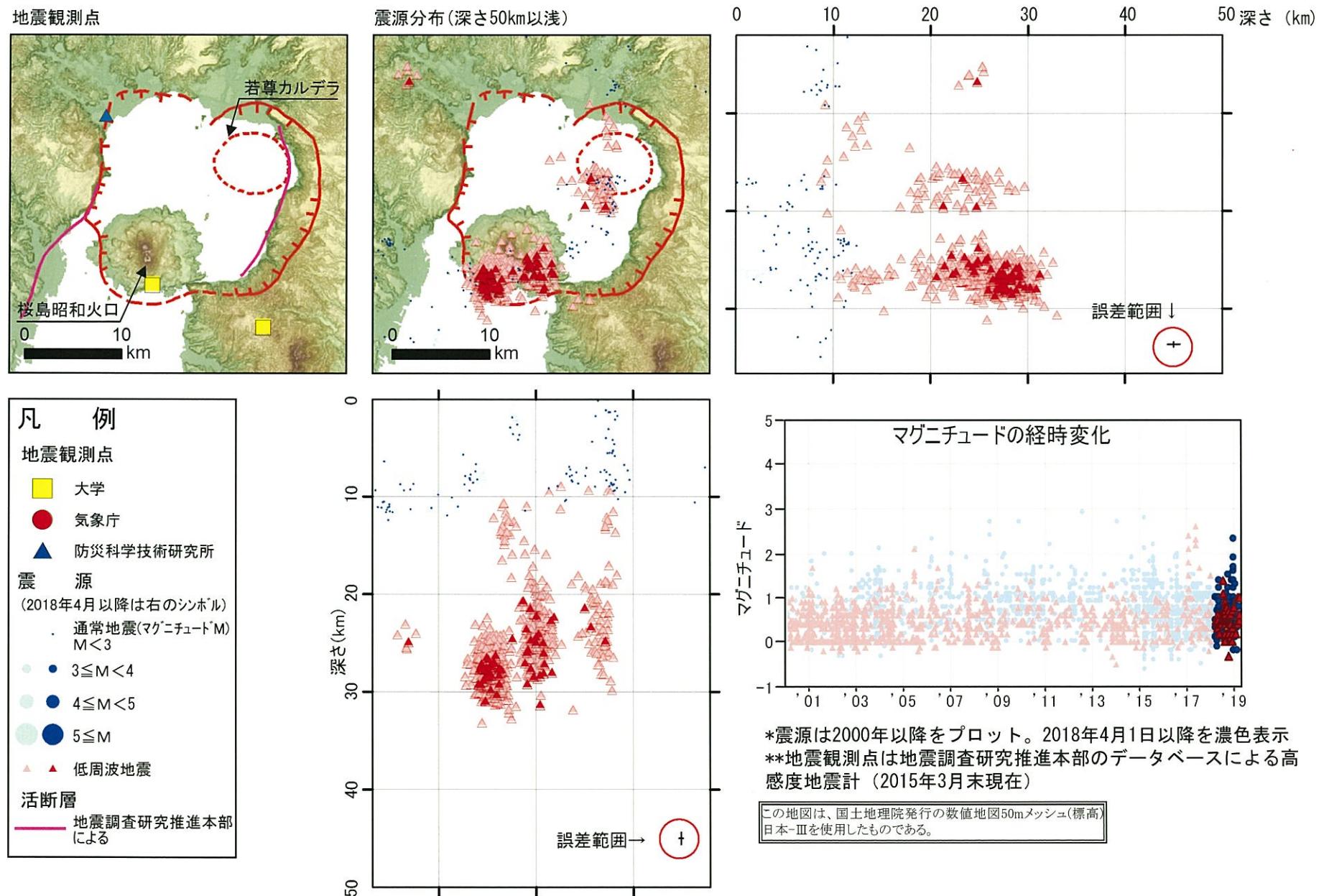
③ 姶良カルデラ [地震活動: 2000年以降の地震発生数の推移]

- 2018年度の地震活動(発生数、位置、規模等)は、過去と比較して有意な変化は認められない。

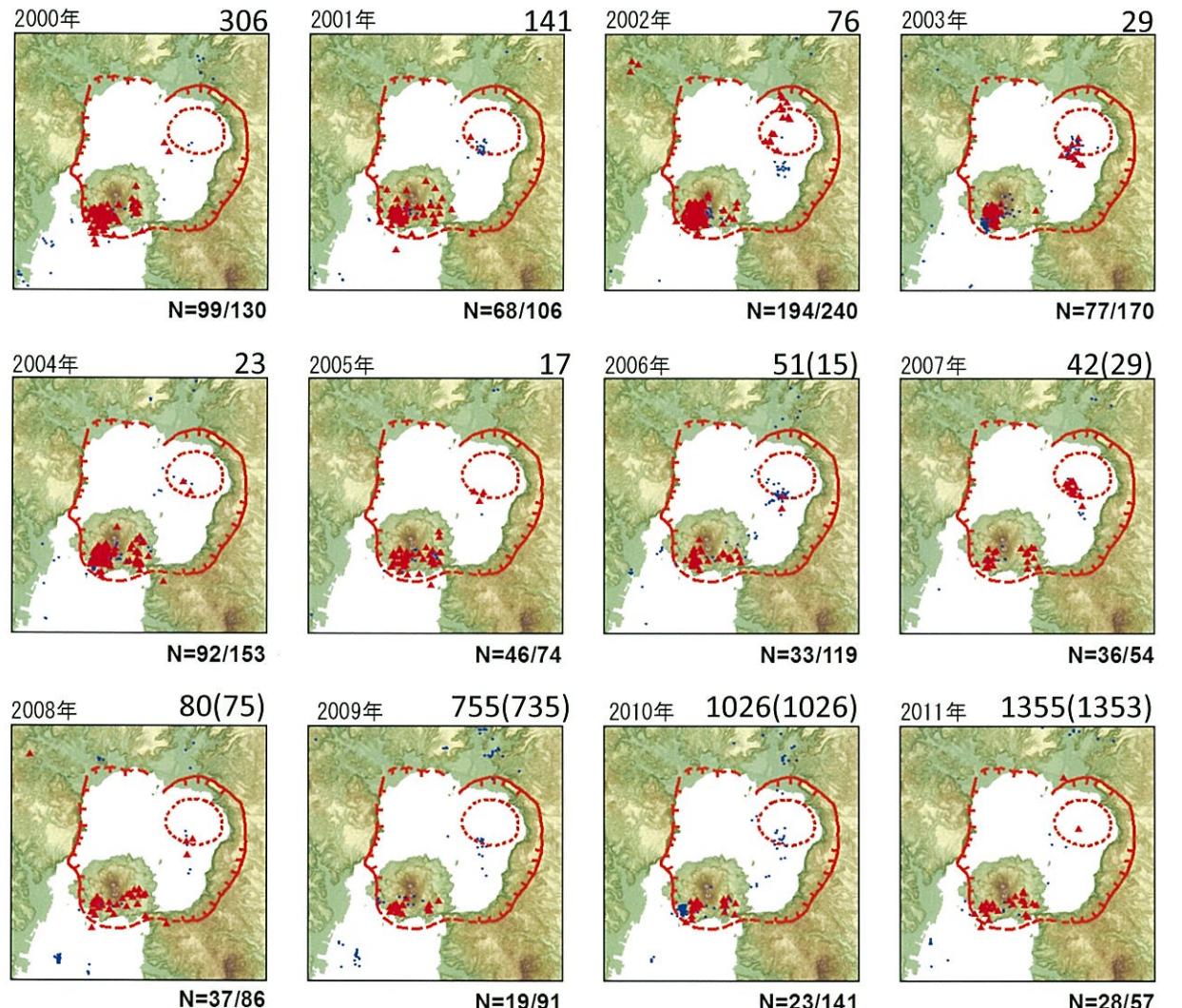


[Mc値(2000~2018年データ使用)] 通常地震 : 0.6 低周波地震 : 0.4

③ 姶良カルデラ [地震活動: 震源分布とマグニチュードの経時変化]



③ 姶良カルデラ [地震活動: 2000年以降の地震発生数の推移]



最近の主な噴火

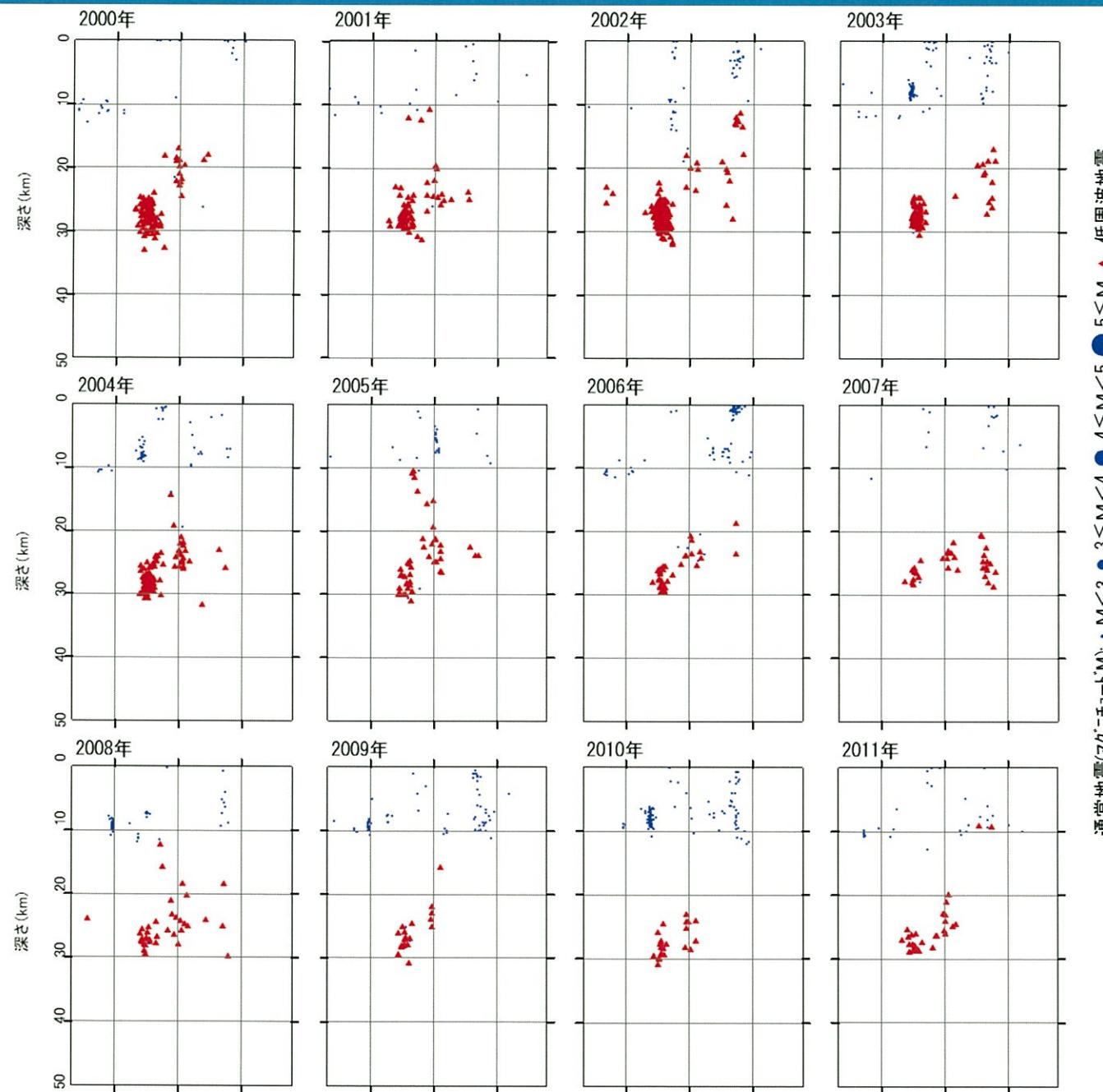
1955年以降、噴火(ブルカノ式噴火、連続噴火)が継続している。噴火は南岳山頂で発生していたが、2006年以降昭和火口でも噴火が発生するようになった。2009年以降は噴火回数がやや多い状態が継続した。

*各図の右下の数値は範囲内での該当年の(低周波地震発生数/総地震発生数)を示す。

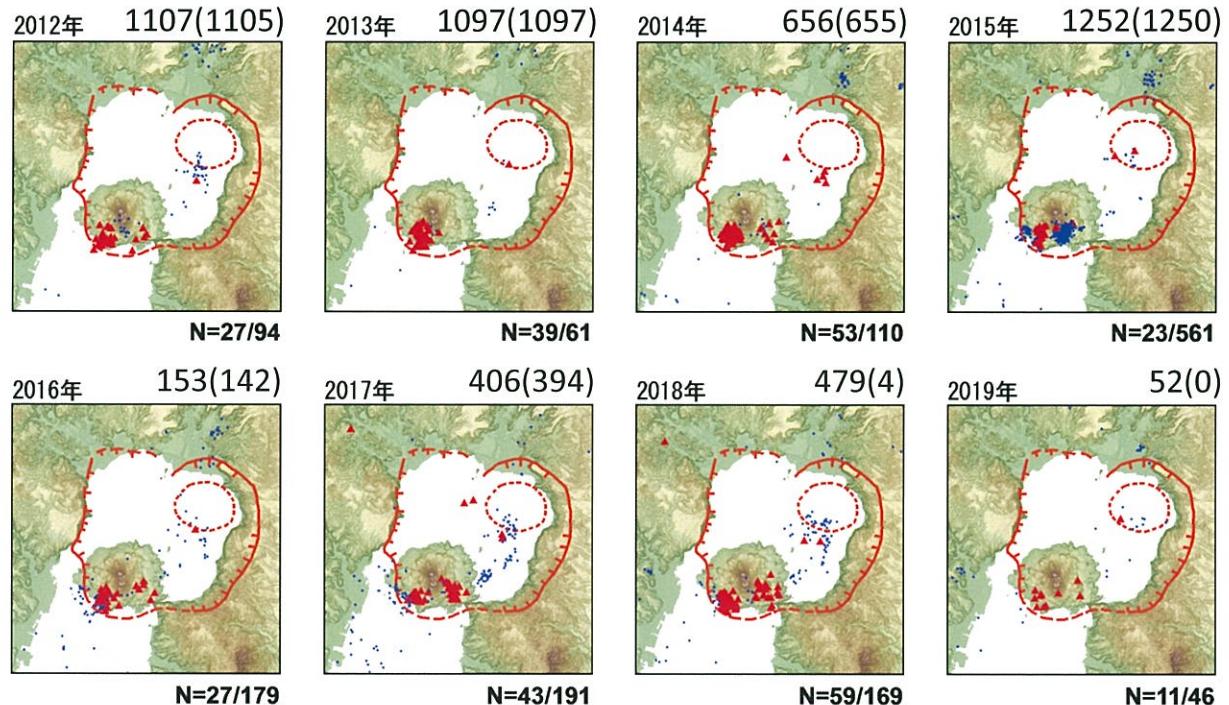
* *各図の右上の数値は桜島の噴火回数、カッコ内は昭和火口における噴火回数。

この地図は、国土地理院発行の数値地図50mメッシュ(標高)
日本-IIIを使用したものである。

③ 始良カルデラ [地震活動: 2000年以降の地震発生数の推移]



③ 始良カルデラ [地震活動: 2000年以降の地震発生数の推移]



通常地震(マグニチュードM): M < 3 ● 3 ≤ M < 4 ● 4 ≤ M < 5 ● 5 ≤ M ▲

最近の主な噴火

2009年以降は噴火回数がやや多い状態が継続していたが、2015年9月29日以降は、南岳山頂火口も含めて噴火は観測されていないが、2016年2月以降は爆発的噴火や小規模な噴火が時々発生した。南岳山頂火口では2018年3月以降噴火が継続している。一方、昭和火口では噴火は非常に少ない。

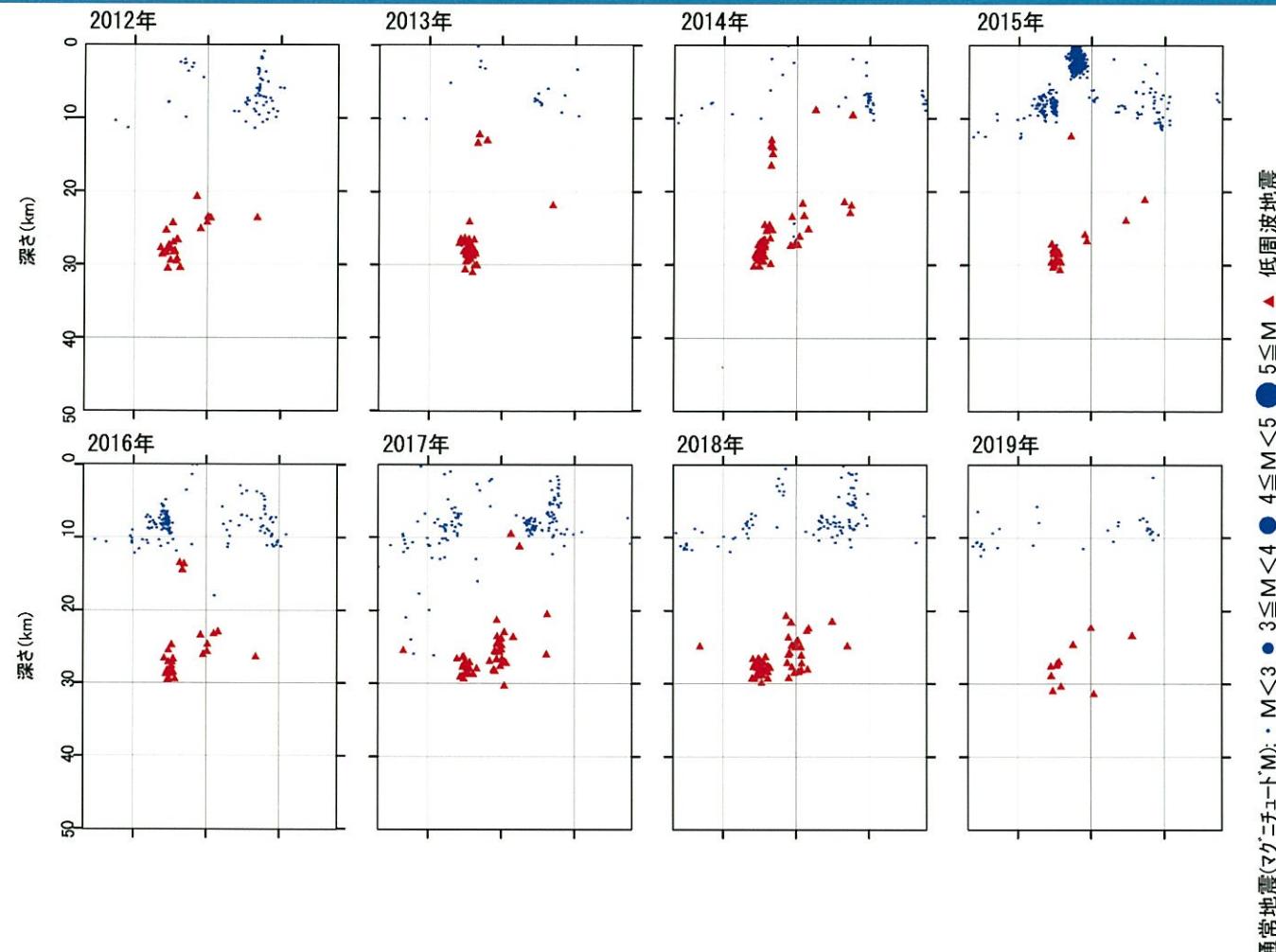
*各図の右下の数値は範囲内での該当年の(低周波地震発生数/総地震発生数)を示す。

ただし、2019年は3月31日までのもの

* *各図の右上の数値は桜島の噴火回数、カッコ内は昭和火口における噴火回数。

この地図は、国土地理院発行の数値地図50mメッシュ(標高)
日本-IIIを使用したものである。

③ 始良カルデラ [地震活動: 2000年以降の地震発生数の推移]



③ 姶良カルデラ [まとめ]

【活火山に関する公的機関の評価】

- ・桜島の南岳山頂火口では活発な噴火活動が継続していたが、1月中旬頃から噴火活動がやや低下している。しかし、火山ガスの放出量は概ね多い状態が続いていることなどから、今後も南岳山頂火口を中心に、噴火活動が継続すると考えられる。
- ・広域のGNSS連続観測でみられている姶良カルデラ(鹿児島湾奥部)の地下深部の膨張を示す基線の伸びは、わずかながら継続している。

【当社の評価】

- ・GNSS連続観測による基線長変化等を確認した結果、2018年度の基線長の変動率は、これまでと同様にマグマ供給を示唆する変動が認められるものの、監視体制の移行判断基準($0.05\text{km}^3/\text{年} \doteq 5\text{cm}/\text{年}$)を十分下回っている。
- ・地震発生数の推移及び震源分布とマグニチュードの経時変化等を確認した結果、2018年度の地震活動(発生数、位置、規模等)は、過去と比較して有意な変化は認められない。

姶良カルデラについては、公的機関による発表情報、既存観測網によるデータ等を収集・分析した結果、これまでと同様にマグマ供給を示唆する変動が認められるものの、2018年度は、顕著なマグマ供給率の増加を示唆する地殻変動及び地震活動の有意な変化が認められないことから、活動状況に変化ないと評価した。

監視体制は、マグマ供給を示唆する変動が引き続き認められることから、現状の注意時体制を継続する。

余 白

④ 阿多カルデラ [活火山に関する公的機関の評価概要]

○開聞岳

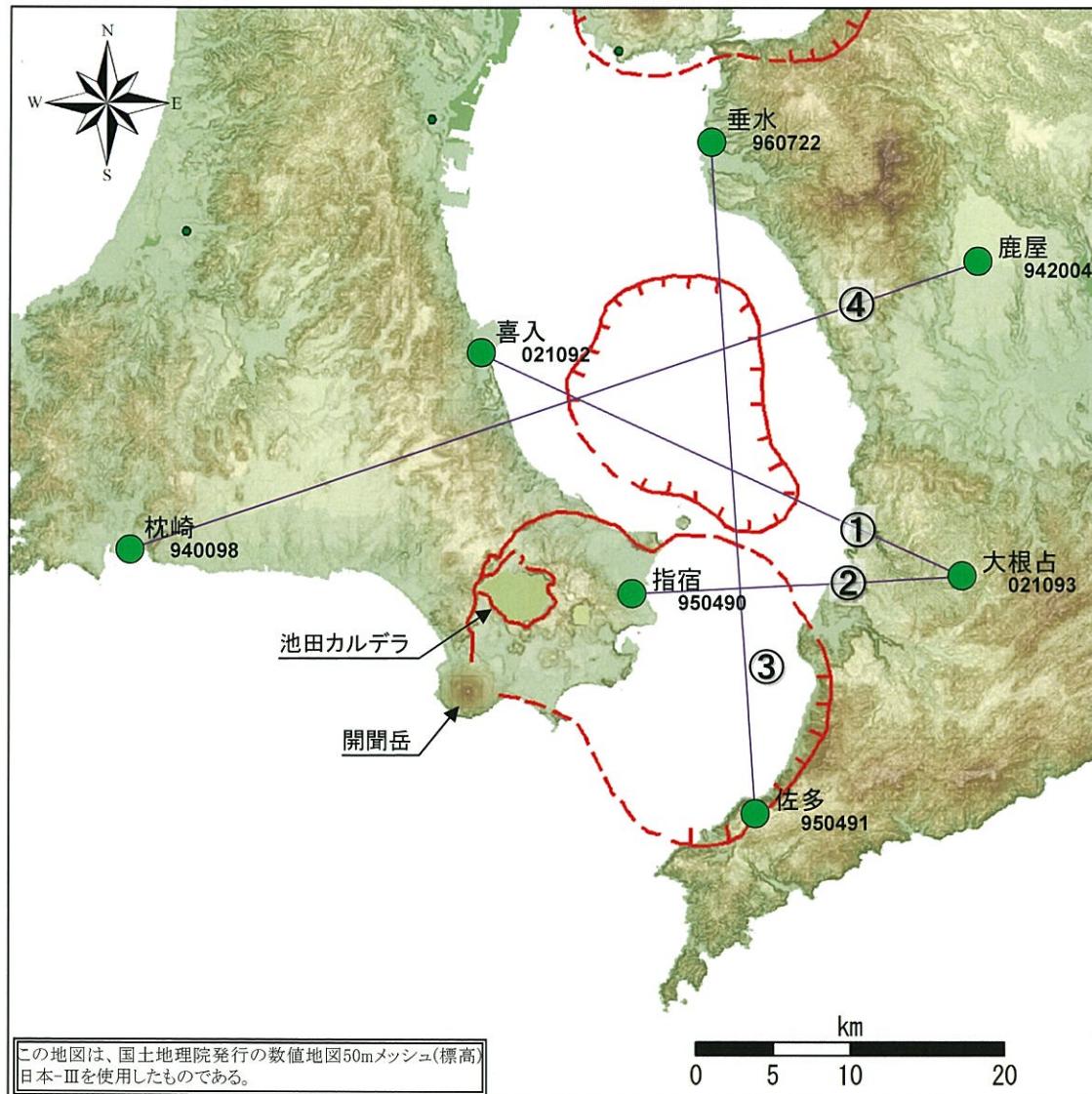
- ・火山活動に特段の変化はなく、静穏に経過しており、噴火の兆候はみられない。

○池田・山川

- ・火山活動に特段の変化はなく、静穏に経過しており、噴火の兆候はみられない。

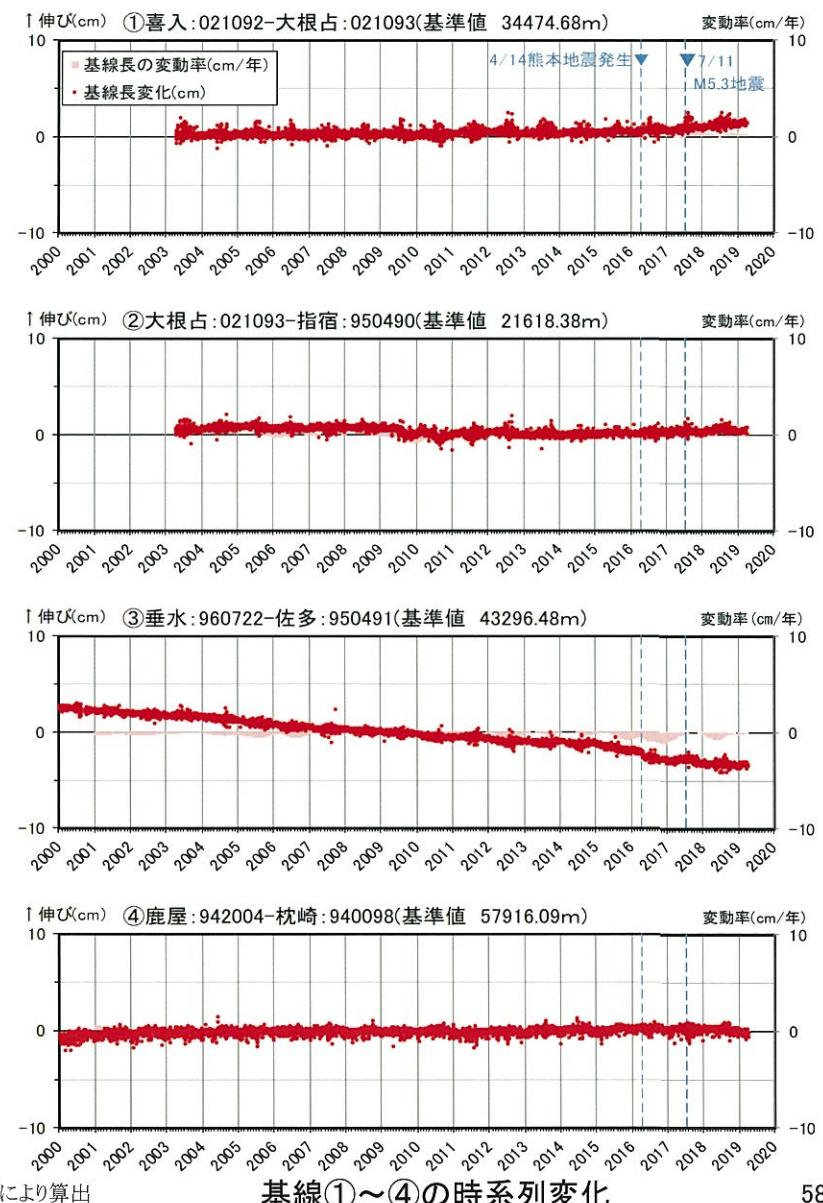
④ 阿多カルデラ [地殻変動: 基線長変化]

- 2018年度の基線長変化は、阿多カルデラへのマグマ供給を示唆する広範囲な伸びの傾向が認められないことから、カルデラ火山の活動に起因する有意な変化はないと判断している。



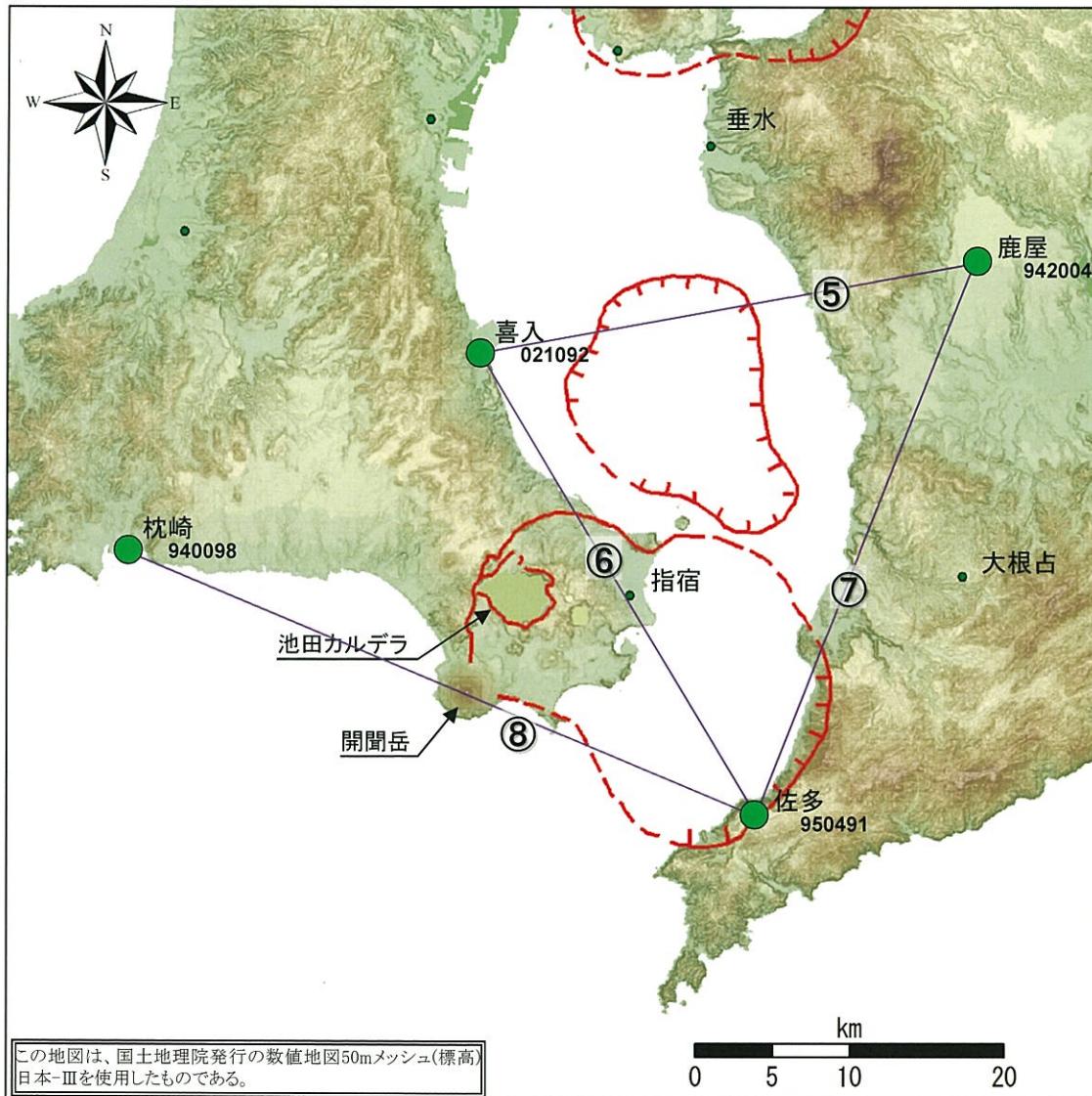
● GNSS観測点

※1 2010年1月1日の基線長を基準値とし、基準値からの変化量を表示 ※2 変動率は過去1年間のデータを用いて求めた近似式により算出

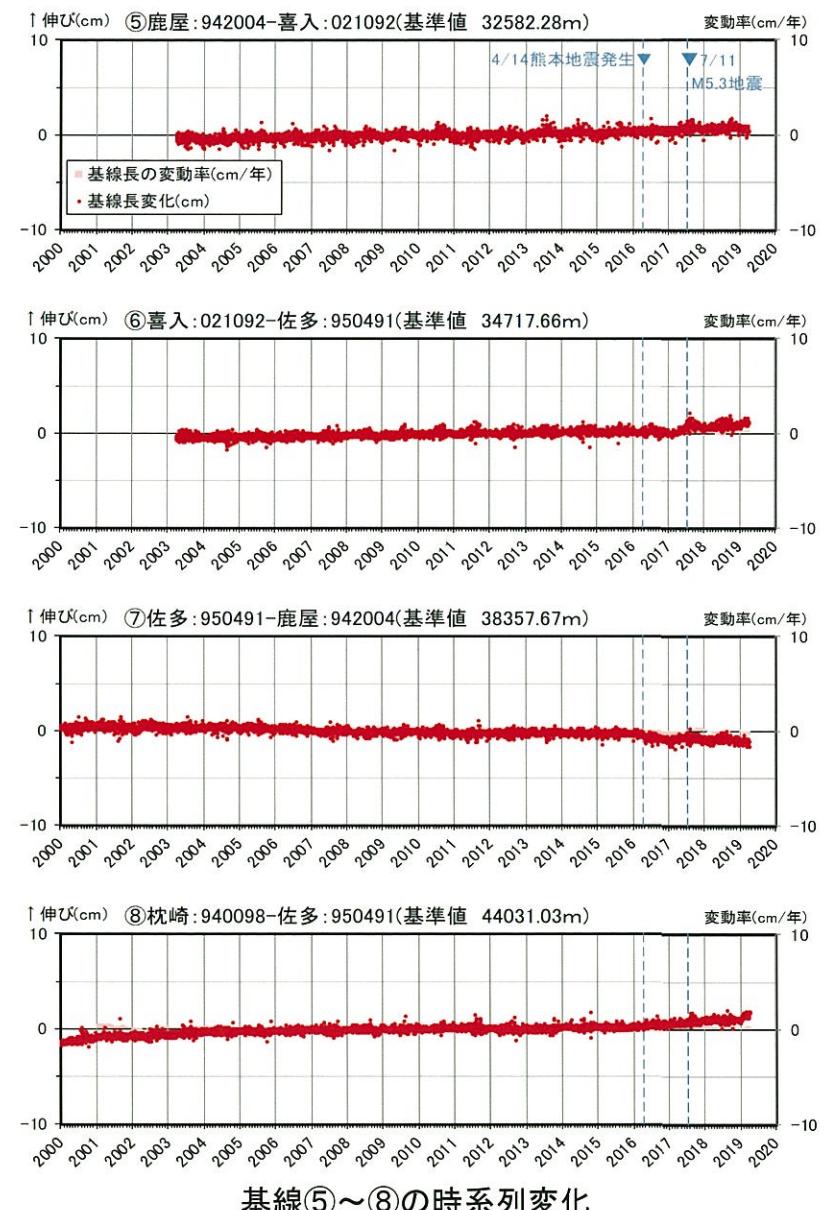


基線①～④の時系列変化

④ 阿多カルデラ [地殻変動: 基線長変化]



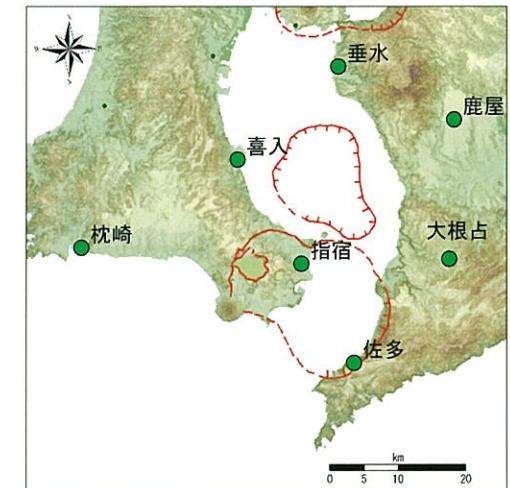
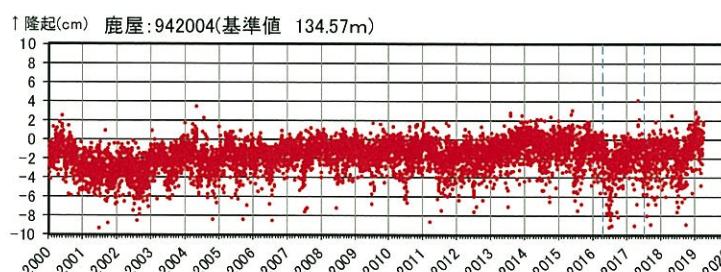
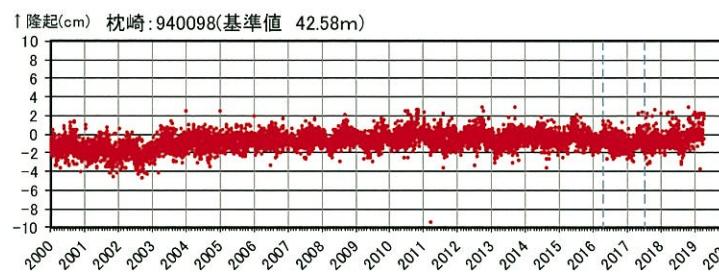
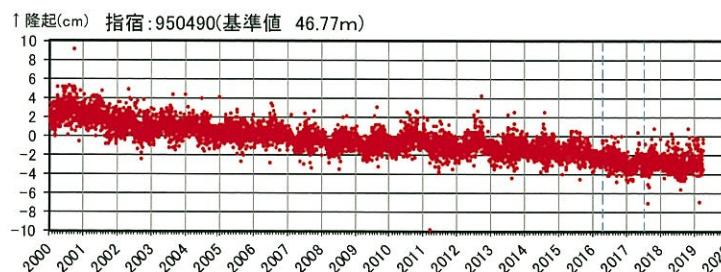
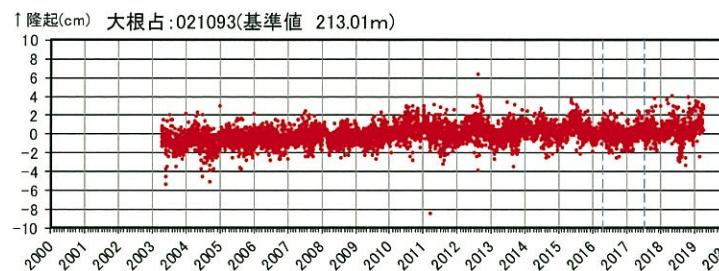
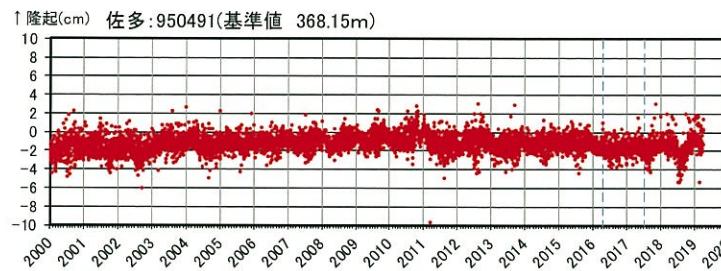
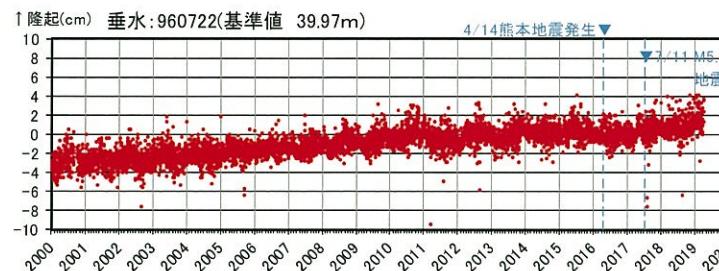
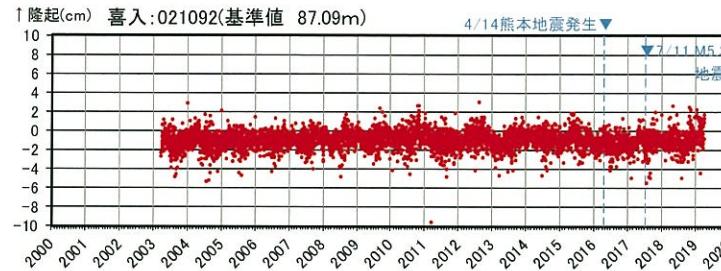
● GNSS観測点



※1 2010年1月1日の基線長を基準値とし、基準値からの変化量を表示
※2 变动率は過去1年間のデータを用いて求めた近似式により算出

④ 阿多カルデラ [地殻変動: 各観測点の鉛直変動]

- 2018年度の鉛直変動は、阿多カルデラへのマグマ供給を示唆する広範囲での隆起傾向は認められない。

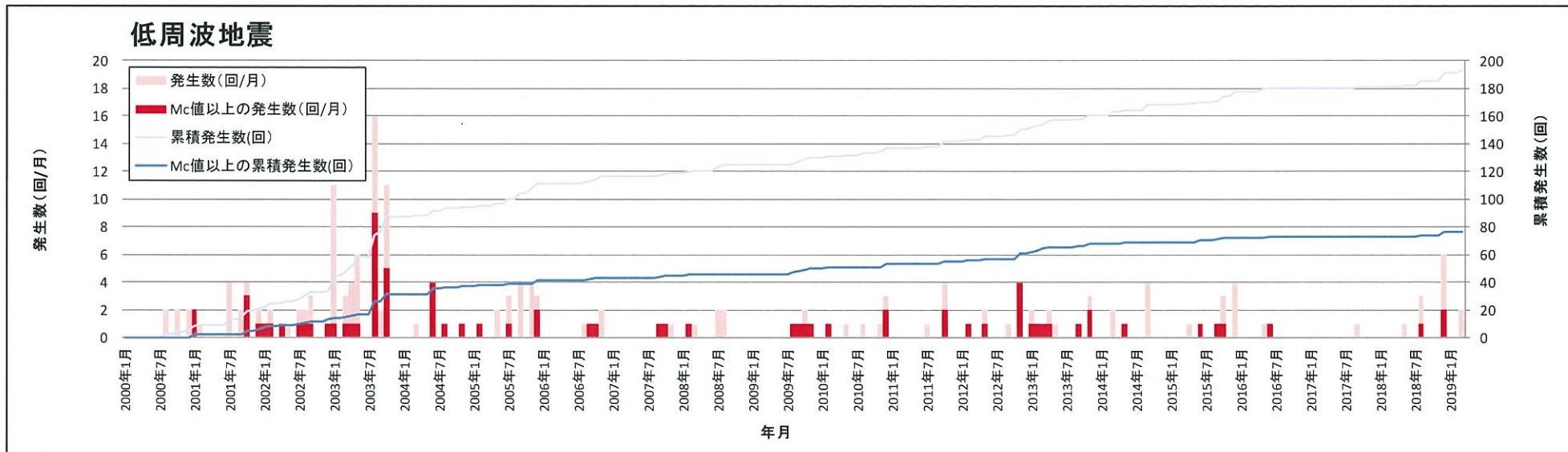
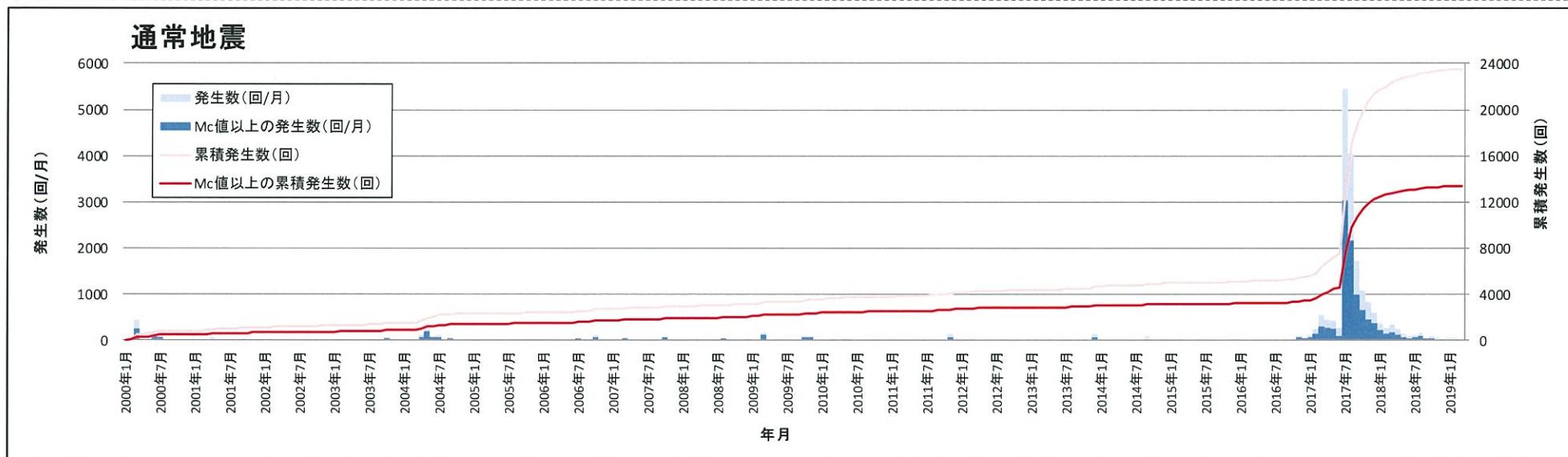


※1 2010年1月1日の標高を基準値とし、基準値からの変化量を表示

※2 上の地図は、国土地理院発行の数値地図50mメッシュ(標高)日本-IIIを使用したものである

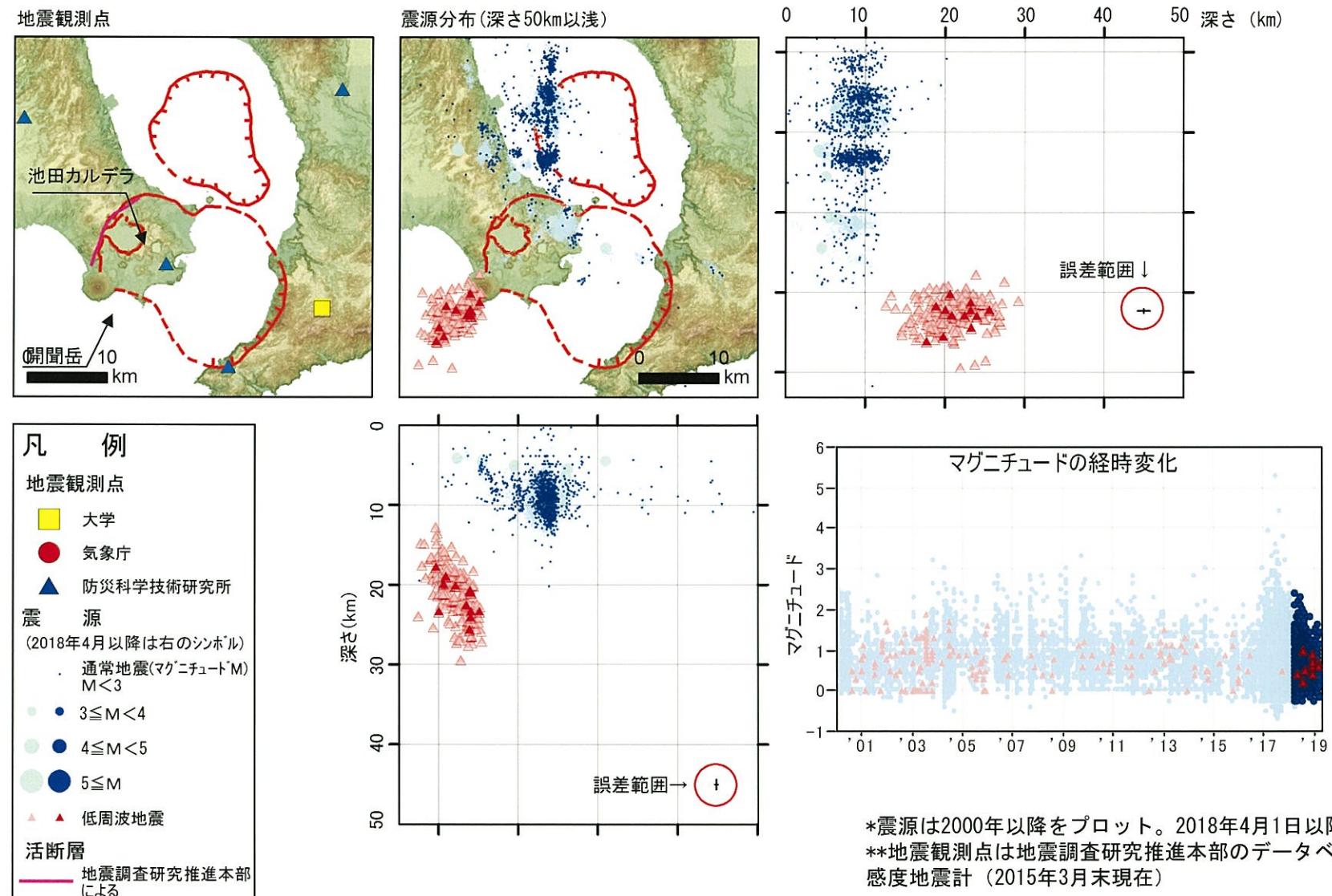
④ 阿多カルデラ [地震活動: 2000年以降の地震発生数の推移]

- 2018年度の地震活動(発生数、位置、規模等)は、2017年7月11日に鹿児島湾で発生した地震(M5.3)の余震が認められるものの、発生数は過去1年と比較して減少傾向にある。なお、位置と規模に有意な変化は認められない。

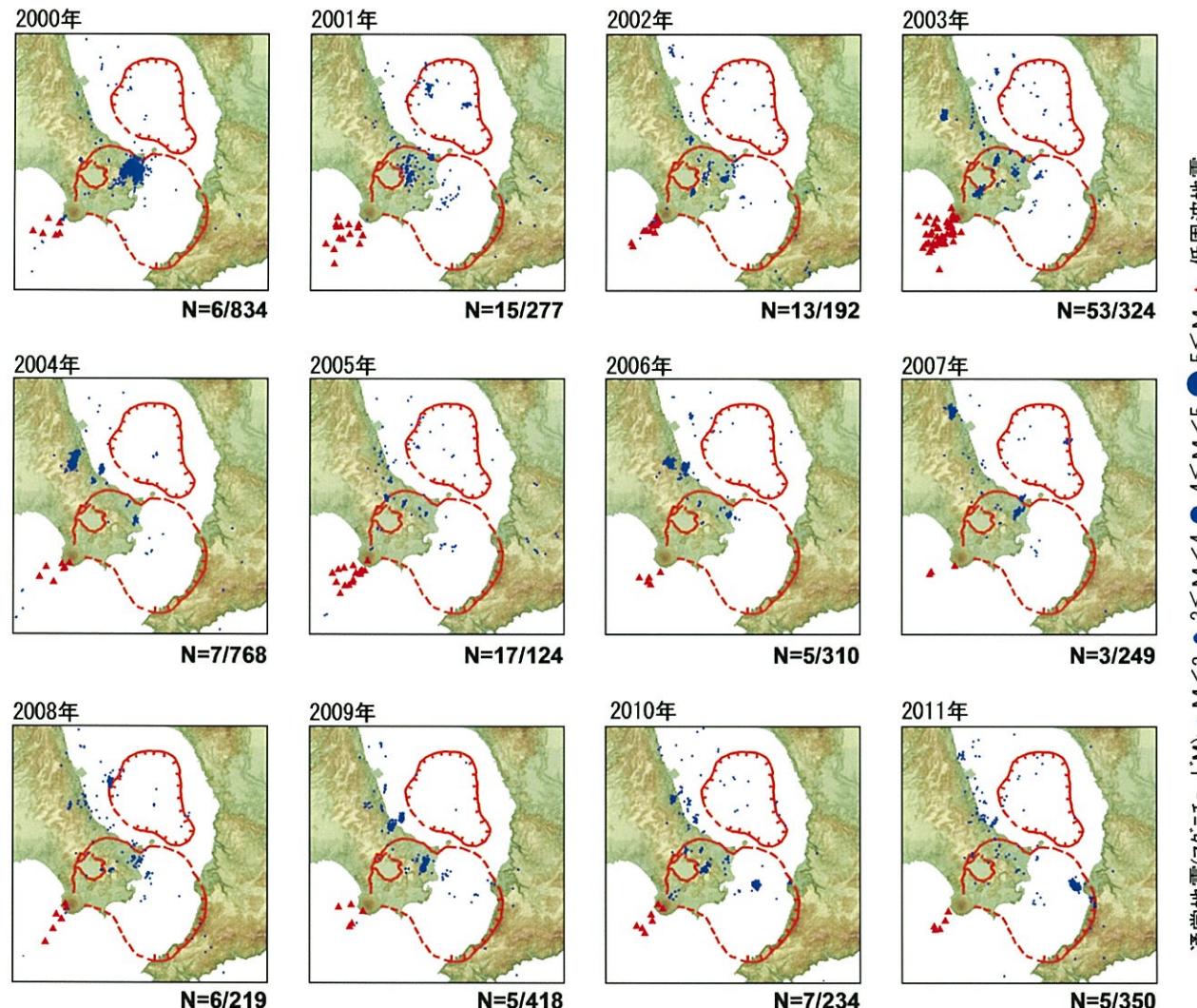


[Mc値(2000～2018年データ使用)] 通常地震 : 0.6 低周波地震 : 0.9

④ 阿多カルデラ [地震活動: 震源分布とマグニチュードの経時変化]



④ 阿多カルデラ [地震活動: 2000年以降の地震発生数の推移]



最近の主な噴火

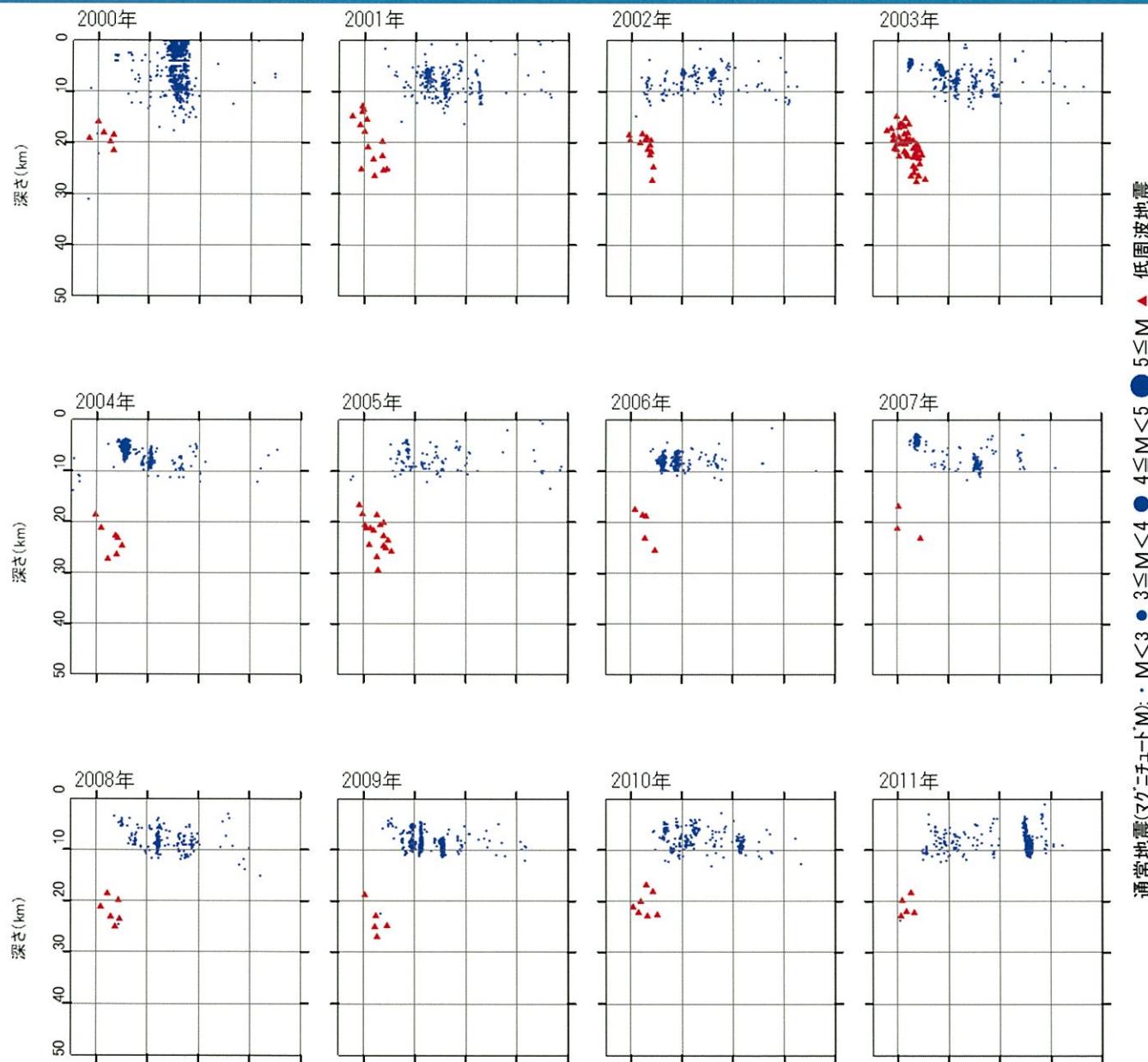
西暦885年の噴火以降、顕著な火山活動は発生していない。

通常地震(マグニチュードM): ▲ M < 3 ● 3 ≤ M < 4 ● 4 ≤ M < 5 ● 5 ≤ M < 5 ▲ 低周波地震

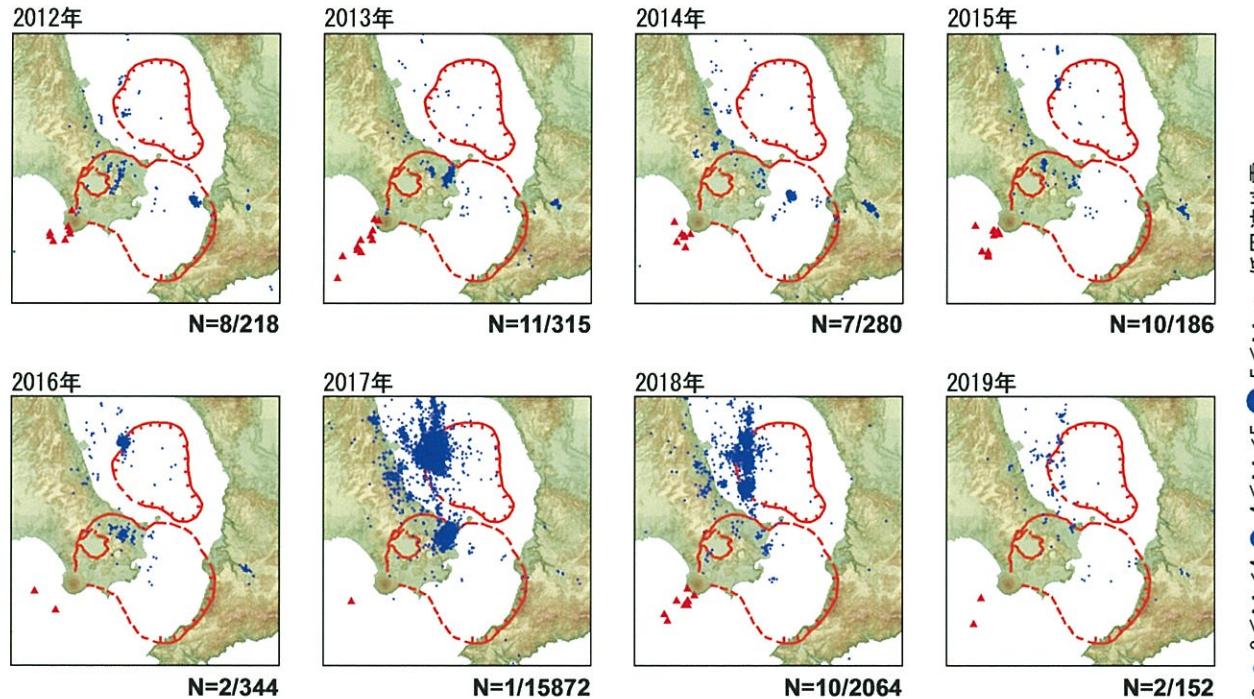
*各図の右下の数値は範囲内での該当年の(低周波地震発生数/総地震発生数)を示す。

この地図は、国土地理院発行の数値地図50mメッシュ(標高)
日本-IIIを使用したものである。

④ 阿多カルデラ [地震活動: 2000年以降の地震発生数の推移]



④ 阿多カルデラ [地震活動: 2000年以降の地震発生数の推移]



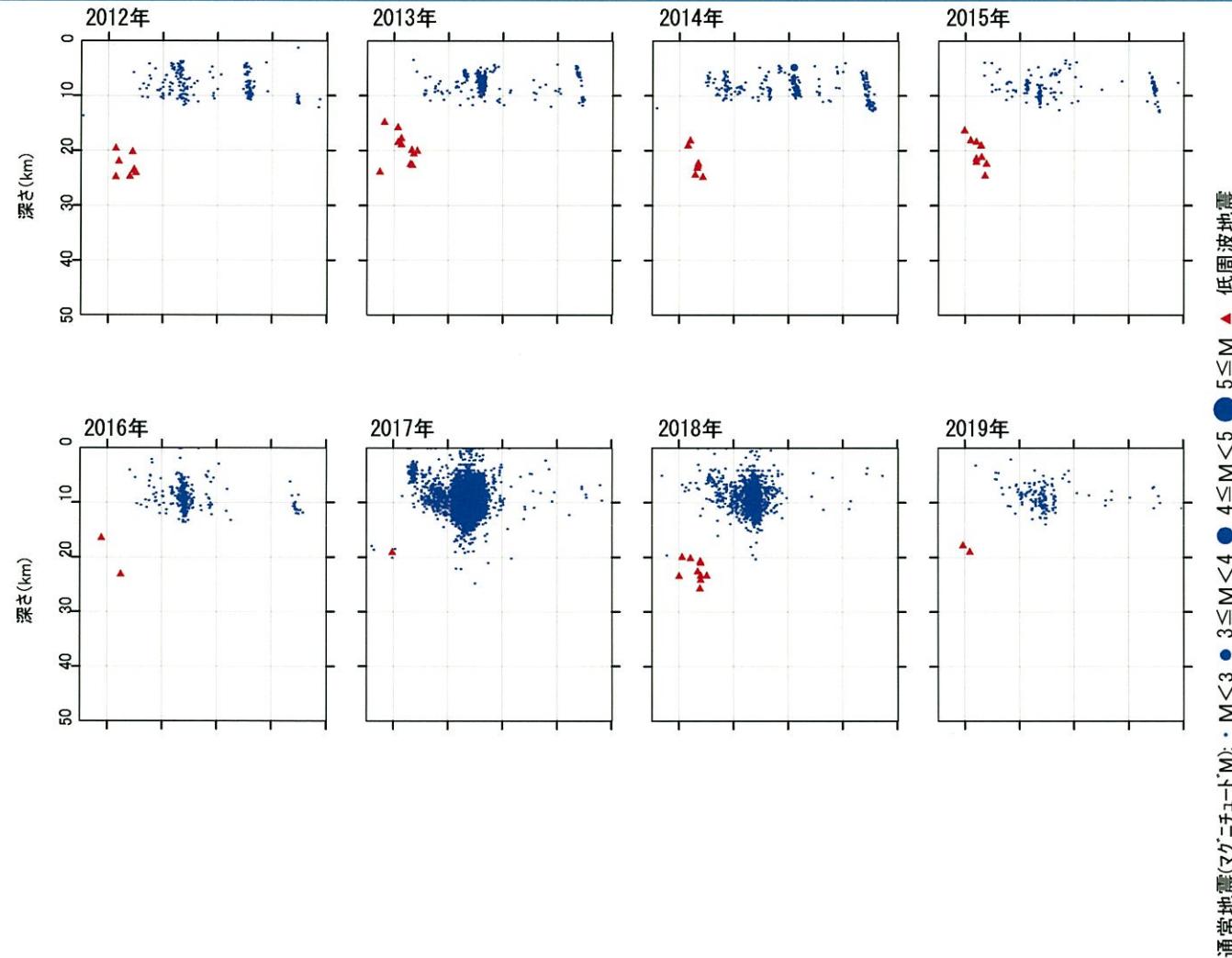
最近の主な噴火

西暦885年の噴火以降、顕著な火山活動は発生していない。

*各図の右下の数値は範囲内の該当年の(低周波地震発生数/総地震発生数)を示す。
ただし、2019年は3月31日までももの

この地図は、国土地理院発行の数値地図50mメッシュ(標高)日本-IIIを使用したものである。

④ 阿多カルデラ [地震活動: 2000年以降の地震発生数の推移]



通常地震(マグニチュードM): • $M < 3$ ● $3 \leq M < 5$ ● $4 \leq M < 5$ ▲ 低周波地震

④ 阿多カルデラ [まとめ]

【活火山に関する公的機関の評価】

- ・開聞岳および池田・山川において、火山活動の特段の変化はなく、噴火の兆候はみられない。

【当社の評価】

- ・GNSS連続観測による基線長変化等を確認した結果、2018年度は、カルデラ火山の活動に起因する有意な変化は認められない。
- ・地震発生数の推移及び震源分布とマグニチュードの経時変化等を確認した結果、2018年度の地震活動(発生数、位置、規模等)は、2017年7月11日に鹿児島湾で発生した地震(M5.3)の余震が認められるものの、発生数は過去1年と比較して減少傾向にある。なお、位置と規模に有意な変化は認められない。

阿多カルデラについては、公的機関による発表情報、既存観測網によるデータ等を収集・分析した結果、2018年度は、顕著なマグマ供給率の増加を示唆する地殻変動及び地震活動の有意な変化が認められることから、活動状況に変化ないと評価した。

余 白